

靈界物語 第二卷 靈主體從 丑の卷

出口王仁三郎

~~~~~

●凡例

※【】……底本で傍點が振られている文字列

(例)【ヒ】は火なり

※「ス」を現す記號（丸にホチ）は「◎」に置き換えた。その他、文字コード（ユニコード）に無い文字は「ㇿ」に置き換えた。

※底本

『靈界物語 第二卷』愛善世界社

1993 (平成05) 年02月03日 第一刷發行

※底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジェイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

※現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

※図表などのレイアウトは完全に再現できないので適宜変更した。

※編纂・データ作成：飯塚弘明 (オニド主宰)

二〇〇九年十一月二〇日修正

~~~~~

●目次

序

凡例

總説

第一篇

神界しんかいの混亂こんらん

第一章

攻防兩軍こうぼうりやうぐんの配置はいち〔五一〕

第二章

邪神じやしんの再來さいらい〔五二〕

第三章

美山彦命みやまひこのみことの出現しゅつげん〔五三〕

第四章

眞澄ますみの神鏡かがみ〔五四〕

第五章

黒死病ペストの由來ゆらい〔五五〕

第六章

モーゼとエリヤ〔五六〕

第七章 天地てんち あはの合せ鏡かがみ〔五七〕

第八章 嫉視しつしはんもく反目〔五八〕

第二篇 善惡ぜんあくせいじや正邪

第九章 タコマ山やまの祭典さいてん その一〔五九〕

第一〇章 タコマ山やまの祭典さいてん その二〔六〇〕

第十一章 狸たぬきの土舟つちぶね〔六一〕

第十二章 醜女しこめの活躍くわつやく〔六二〕

第十三章 蜂はちの室屋むろや〔六三〕

第三篇 神戰の經過しんせん けいくわ

第十四章 水星の精すゐせい せい〔六四〕

第十五章 山幸やまさち〔六五〕

第十六章 梟の宵企ふくろ よひだくみ〔六六〕

第十七章 佐賀姫さがひめの義死ぎし〔六七〕

第十八章 反間はんかん苦肉くにくの策さく〔六八〕

第十九章 夢ゆめの跡あと〔六九〕

第四篇 常世とこよの國くに

第二〇章 疑問の艶書〔七〇〕
ぎもん えんしよ

第二一章 常世の國へ〔七一〕
とこよ くに

第二二章 言靈別命の奇策〔七二〕
ことたまわけのみこと きさく

第二三章 龍世姫の奇智〔七三〕
たつよひめ きち

第二四章 藻脱けの殻〔七四〕
もぬ から

第二五章 蒲團の隧道〔七五〕
ふとん トネル

第二六章 信天翁〔七六〕
あはうどり

第二七章 湖上の木乃伊〔七七〕
こじやう ミイラ

第五篇 神の慈愛
かみ じあい

第二十八章 高かうはくざん白せん山の戦とう闘〔七八〕

第二十九章 乙をとめ女てんしの天使〔七九〕

第三十章 十とえう曜しんきの神旗〔八〇〕

第三十一章 手ていた痛あくしゆき握手〔八一〕

第三十二章 言ことたまわけのみこと靈きじやう別命の歸城〔八二〕

第三十三章 焼やけの野きぎすの雉子〔八三〕

第三十四章 義ぎしん神さんかの參加〔八四〕

第三十五章 南なんかうざん高しんぼう山の神寶〔八五〕

第三十六章 高かうはくざんじやう白ひげき山上の悲劇〔八六〕

第三十七章 長ちやうかうざん高ひげき山の悲劇〔八七〕

第三十八章 歡くわんでんきち天喜地〔八八〕

第六篇 神靈の祭祀しんれい さいし

第三十九章 太白星の玉たいはくせい たま〔八九〕

第四〇章 山上の神示さんじやう しんじ〔九〇〕

第四一章 十六社の祭典じふろくしゃ さいてん〔九一〕

第四二章 甲冑の起源かつちう きげん〔九二〕

第四三章 濡衣ぬれぎぬ〔九三〕

第四四章 魔風戀風まかせこひかせ〔九四〕

第七篇 天地の大道てんち だいだう

第四五章 天地の律法〔九五〕
てんち りつぽう

第四六章 天則違反〔九六〕
てんそくゐはん

第四七章 天使の降臨〔九七〕
てんし かうりん

第四八章 律法の審議〔九八〕
りつぽう しんぎ

第四九章 猫の眼の玉〔九九〕
ねこ め たま

第五〇章 鋼鐵の銚〔一〇〇〕
まがね ほこ

附録 第一回高熊山參拜紀行歌

（
（
（
（
（
（
（
（

序

ほんしよ わたし めいぢさんじふいちねんきうきさらぎここのか

どうげつじふごにち

ぜんごいつしうかん

あらぎやう

しんかい

本書は王仁が明治三十一年舊如月九日より、同月十五日にいたる前後一週間の荒行を神界より

めい

きたくご

いつしうかんとしば

しうげふ めい

あひだ

わたし

れいこん

れいかい

あそ

しゆじゆ

命ぜられ、歸宅後また一週間床縛りの修業を命ぜられ、その間に王仁の靈魂は靈界に遊び、種々

いうかいしんかい

せうそく

じつけん

ものがたり

れいかい

じかんくうかん

てうえつ

幽界神界の消息を實見せしめられたる物語であります。すべて靈界にては時間空間を超越し、

ゑんきんだいせうめいあん

くべつ

ここんとうざい

れいかい

できごと

へいめんてき

れいがん

えい

遠近大小明暗の區別なく、古今東西の靈界の出來事はいづれも平面的に靈眼に映じますので、そ

いとぐち

みつ

どくしや

れうかい

やす

しゆがん

こうじゆつ

の絲口を見付け、なるべく讀者の了解し易からむことを主眼として口述いたしました。

れいかい

せうそく

つう

じんし

わたし

れいかいものがたり

よ

こども

はなし

わら

靈界の消息に通ぜざる人士は、私の『靈界物語』を讀んで、子供だましのおとぎ話と笑はれ

るでせう。ドンキホーテ式しきの滑稽こつけいな物語ものがたりと嘲あざける方かたもありませう。中には一篇いつぺんの夢物語ゆめものがたりとして顧かへりみ

ない方かたもあるでせう。また偶意的ぐういてきけうくんだん敎訓談おもと思かたふ方かたもありませう。しかし私は何と批判わたし なん ひはんされてもよ

ろしい。

要えうは一度いちどでも讀よんでいただきまして、靈界れいかいの一部いちぶの消息せうそくを窺うかがひ、神々かみがみの活動くわつどうを幾分いくぶんな

りと了解れうかいして下くだされば、それで私の口述わたし こうじゆつの目的もくてきは達たつするのであります。

本書ほんしよの述のぶるところは概がいしてシオン山攻撃ざんこうげきの神戦しんせんであつて、國祖こくその大神おほかみが天地てんちの律法りつぽうを制定せいいていし

るでせう。ドンキホーテ式しきの滑稽こつけいな物語ものがたりと嘲あざける方かたもありませう。中には一篇いつぺんの夢物語ゆめものがたりとして顧かへりみ

ない方かたもあるでせう。また偶意的ぐういてきけうくんだん敎訓談おもと思かたふ方かたもありませう。しかし私は何と批判わたし なん ひはんされてもよ

ろしい。要えうは一度いちどでも讀よんでいただきまして、靈界れいかいの一部いちぶの消息せうそくを窺うかがひ、神々かみがみの活動くわつどうを幾分いくぶんな

りと了解れうかいして下くだされば、それで私の口述わたし こうじゆつの目的もくてきは達たつするのであります。

本書ほんしよの述のぶるところは概がいしてシオン山攻撃ざんこうげきの神戦しんせんであつて、國祖こくその大神おほかみが天地てんちの律法りつぽうを制定せいいていし

たまひ、第一に稚櫻姫命の天則違反の罪を犯し幽界に神退ひに退はれたまへる、經緯を述べたのであります。本書を信用されない方は、一つのおとぎ話か拙い小説として讀んで下さい。これを讀んで幾分なりとも、精神上の立替立直しのできる方々があれば、王仁としては望外の幸であります。

『三千世界一度に開く梅の花。良の金神の世になりたぞよ。須彌仙山に腰を掛け、鬼門の金神、守るぞよ』との神示は、神世開基の身魂ともいふべき教祖に歸神された最初の良の金神様が、救世のための一大獅子吼であつた。アゝ何たる雄大にして、莊嚴なる神言でありませうか。

『三千世界一度に開く』とは、宇宙萬有一切の物に活生命を與へ、世界のあらゆる生物に、安心立命の神鍵を授けたまへる一大慈言でありますまいか。

口述者はいつも此の神言を讀む度ごとに、無限絶對、無始無終の大原因神の洪大なる御經綸と、その抱負の雄偉にして、なんとなく吾人が心の海面に、眞如の月の光り輝き、慈悲の太陽の宇内

をいつせい一齊に公平こうへいに照臨せうりんしたまひ、萬界ばんかいの暗やみを晴はらしたまふやうな心持こころもちになるのであります。

そして、『三千世界一度さんぜんせかいいちどに開く』と宇宙うちうの經綸けいりんを豎たてに、しかと完全くわんぜんに言ひ表あらわはし、句くの終りをはに

いたつて『梅の花うめはな』とつづめたるころ、あたかも白扇はくせんを擴ひろげて涼風りやうふうを起おこし、梅の花うめはなの小さき要かなめ

をもつて之これを統一とういつしたる、至大無外しだいむぐわい、至小無内の神權發動しせうむないしんけんはつどうの真相しんさうを説明せつめいしたまひところ、到底たうてい

智者ちしや、學者がくしやなどの企くはだて及およぶべきところではない。

またその次に『須彌仙山しゆみせんざんに腰こしをかけ、良うしろの金神守こんじんまもるぞよ』との神示しんじがある。アゝこれまたな

んたる偉大ゐだいなる神格しんかくの表現へうげんであらうか。なんたる大名文だいめいぶんであらうか。到底人心たうていじんしん小智せうちの企及ききふすべき

ところではない。そのほか、大神おほかみの歸神きしんの産物さんぶつとしては、三千世界さんぜんせかいいはゆる神界しんかい、幽界いうかい、現界げんかいに

たいし、神祇しんぎはさらなり、諸佛しよぶつ、各人類かくじんるいにいたるまで大慈だいじの神心かみこころをもつて警告けいこくを與あたへ、將來しやうらいを顯示けんじ

して、懇切こんせついたらざるはなく、實じつに古今ここんにその類例るゐれいを絶たつてゐる。

かかる尊たふとき大神おほかみの神示しんじは、俗人ぞくじんの容易よういに解かいし難がたきはむしろ當然たうぜんの理りにして、したがつて誤解ごかいを

生じ易きところ、口述者は常にこれを患ひ、おほけなくも神諭の一端をも解釋をほどこし、大神の大御心の、那邊に存するやを明らかに示したく、思ひ煩ふことほとんど前後二十三年間の久しきにわたつた。されど神界にては、その發表を許したまはざりしたため、今日まで御神諭の文章の意義については、一言半句も説明したことは無かつたのであります。

しかるに本年の舊九月八日にいたつて、突然神命は口述者の身魂に降り、いよいよ明治三十一年の如月に、『神より開示しおきたる靈界の消息を發表せよ』との神教に接しましたので、二十四年間わが胸中に蓄藏せる靈界の物語を發表する決心を定めました。しかるに口述者は、本春以來眼を病み、頭腦を痛めてより、執筆の自由を有せず、かつ強て執筆せむとすれば、たちまち眼と頭部に痛苦を覚え如何ともすること能はず、殆んどその取扱ひについて非常に心神を悩めてゐたのであります。その神教降下ありて後、十日を過ぎし十八日の朝にいたり、神教ありて『汝は執筆するを要せず、神は汝の口を藉りて口述すべければ、外山豊二、加藤明子、櫻井重雄、

谷口正治の四人を招き、汝の口より出づるところの神言を筆録せしめよ』とのことでありました。

そこで自分はいよいよ意を決し、竝松の松雲閣に隠棲して靈媒者となり、神示を口傳へするこ

とになったのであります。二十四年間に秘めたる靈界の消息も、いよいよ開く時津風、三千世界

の梅の花、薰る常磐の松の代の、神の經綸の開け口、開いた口が閉まらぬやうな、不思議な物語

り、夢かうつつか幻か、神のしらせか、白瀬川、下は音無瀬由良の川、和知川、上林川の清流靜

かに流れ、その中央の小雲川、竝木の老松川の邊に影を浸して立ならぶ、流れも清く、風清く、

本宮山の麓なる、竝松に、新に建ちし松雲閣書齋の間にて五人連れ、口から語る、筆を執る、五人

が活氣凜々として、神示のままを口述發表することとなつたのであります。

大正十年十一月 舊十月九日

於松雲閣 瑞月 出口王仁三郎誌

凡例

一、第一卷より第四卷までは、まだ伊那那岐尊、伊邪那美尊二神の御降臨まします以前の物語であります。第四卷にいたつて始めて國祖の御隱退遊ばされるところになり、第六卷において、
諸冊二尊が葦原中津國へ御降臨遊ばすところになるのであります。それゆゑ、あまりに小さく
現在の大本といふものにとらわれてはならないのであります。たとへば『聖地エルサレム』とあ
るごときも、決して綾部を指されたものではありません。これは、瑞月大先生より特に御注意が
ありましたから、讀者諸氏のお含みおきを願つておきます。要するに『生れ赤兒』の心になつて
拜讀することが、もつとも必要であらうと思ひます。
一、しかしながら、歴史は繰返すといふごとく、これは今から六七千萬年前の物語で、いかにも
吾々とは縁が遠いもののやうに油斷をしてゐると、脚下から鳥が立つやうなことが出來して、に
はかに狼狽へ騒がねばならぬとも限らないのであります。

一、本書第一卷の發表とともに、かれこれ種々な批評も出てゐるやうですが、單に第一卷や第二卷を讀んだだけでは、たうてい分らないのであります。何にしても批評は後廻しにして、本書の全部刊行されるまで待つていただきたい。神諭にも『細工は流々仕上げを見て下されよ』と示されてゐます。ただ一端を覗いただけで、批評がましき言を弄するのは、いかにも輕率であるばかりでなく、御神業にたいして大なる妨害を與へるやうな結果になりはしないかと思ひます。

一、第二卷以下には處々に神様の歌が出てきますが、これはすべて神代語で歌はれたものだからですが、そのままでは今の吾々には理解出來ませぬので、特に現代語に翻譯されたものであります。例へば、本書の第二十三章『龍世姫の奇智』の中に、龍世姫が滑稽諧謔な歌を唄はれるところがあります。その歌の神代語と現代語を大先生の御教示のまま、一例として對照しておきます。

歌

言^{こと}靈^{たま}別^{わけ}の神^{かみ}さんは (コトトモオコヨカムソモホ)

こしの常^{とこよ}世^{つか}へ使^{つか}ひして (コスヨトコヨイツコイステ)

道^{みち}に倒^{たふ}れて腰^{こし}を^を折り (ミツイトホレテコスヨオイ)

輿^{こし}に^の乗^のせられ腰^{こしいた}痛^{いた}む (コスイノソロレコスイトム)

こしの國^{くに}でも腰^{こしぬ}拔^ぬかし (コスヨクシデモコスヌコス)

腰^{こしぬ}拔^ぬけ神^{かみ}と笑^{わら}はれる (コスヌクカムヨワロヲレル)

他^{ひと}のことなら何^{なん}ともない (フトヨコトノロノムトヨノイ)

こしやかまやせん こしやかまやせん こしやかまやせん (コスカモヨセ

ヌ コスカモヨセヌ コスカモヨセヌ コスカモヨセヌ)

一、神代語の數字一二三四五六七八九十百千萬は、一二三_山四_山五_山六_山七_山八_山九_山十_山百_山千_山萬_山は、一二三_山四_山五_山六_山七_山八_山九_山十_山百_山千_山萬_山（略して_山）_山といふ風_{ふう}に

表_{あら}はすさうであります。

一、最近_{さいきん}一つの神祕_{しんぴ}的な話_{はなし}を聞_ききましたから、讀_{どく}者_{しや}諸_{しよ}氏_しの御參_{ごさん}考_{かう}のため_にこ_こに御紹_{ごせう}介_{かい}しておき
ます。

昔_{むかし}、南都東大寺五重塔丸柱の蟲_{むし}喰_くひ跡_{あと}に次_{つぎ}のやうな文字_{もじ}が表_{あら}れたこと_にあります。

九九五一 合_に 二十四_あ西_がより上_よる四_よ日_づ月_き

一五一 合 八洲_{しう}の神地_{しんち}となる

〇五〇六 合 十一_{かみ}神世_よの初_{はじめ}

一三二 合 六_が合_ふとなる

二一六 合 十_{すなは}即_かち神_{かみ}となる

一一一 合 四魂こんとなる

三一六一 合 十一すなは即ち土つちの神かみとなる

一〇一一 合 三體たいの大神おほかみとなる

〇〇〇 合 三ツの御魂みたまとなる

(すうじ數字したの下もの「合云々」の文字もは瑞月大先生ずゐげつだいせんせいがつけ加くはへられたものです)

しかし、誰たれいちにん一人これを讀よむことも出來できなければ、その意味いみも分わかるものはありませんでしたが、
當時たうじの高僧弘法大師かうそうこうぼうだいしは之これを斯かう讀よみました。

月九中岸

閑居一一

露五幽苔

獨身一一

法一不一

一一一一

道一不一

時節一一

瑞月大先生にこの事を伺ひましたら、ただちにその意味を御教示下さいました。その五重塔の丸柱に現はれた不可思議な文字は全體を數へると七十七の數になります。そして七十七は上からしも下からも七十七となります。上下そろふ譯であります。七十七數は其の代詞で七は『成』の意であり、十は『神』の意であり、七はまた『國』の意であり、つまり『成神國』の意味になるさうであります。その數字の中の〇三つは三ツの三玉の意であります。つまり瑞の御魂が隠されてあ

るといふことになるのであります。弘法大師はこうぼうだいしこの事ことを知しつてゐたのだけれども、故意わざとかくし
てゐたといふことであります。

大先生だいせんせいは斯かう讀よまれました。

月懸中岸

閑居誰待

露萎幽苔

獨身孤寂

法初不蔓

隨鼓增光

道獨不擴

時節待人

いかにも月光げつくわうが萬界ばんかいの暗やみを照破せうはし、神政成就しんせいじやうじゆの機運きうんの到達たうたつすることを暗示あんじせる神祕しんぴ的な面白おもしろい話はなしであるやうに思おもはれます。

大正十一年一月六日 於龍宮館 編著識す

酸すいも甘あまいも皆尻みなしりの穴あな、おならの如ごとくにぬけて行く、閒拔まぬけた顔かほの鼻高はなだかが、尻毛しりげを抜ぬかれ眉毛まゆげをよまれ、狐狸きつねたぬきのうさ言ごとと、相手あひてにせねばせぬで良い。雪隠せつちんで饅頭まんぢうく喰くひつ武士ぶし、武士ぶしの言葉ことばに二言にごんはないと、こいた誤託ごたくの鼻はなの糞くそ、ひねつて聞きいて馬鹿ばかにして、一度いちどは讀よんで暮くれの空そら、きよろ月つき、まご月つき、嘘月うそつきの、空言そらごとならぬ瑞月靈界物語ずゐげつれいかいものがたり穴あなかしこ穴あなかしこ。

總説

神界しんかいにおける神々の御服装かみがみにつき、大略たいりやくを述べておく必要ひつえうがあらうと思ふ。一々神々の御服装かみがみに關して口述こうじゆつするのは大變に手閒てまどるから、概括がいくわつてき的に述べれば、國治立命くにちはらたちのみことのごとき高貴かうきの神は、たいいてい絹物きぬものにして、上衣うはぎは紫むらさきの無地むぢで、下衣したぎが純白じゆんぱくで、中の衣服なかが紅いふくの色の無地くれなあである。國大立命くにひろたちのみことは青色あをいろの無地むぢの上衣うはぎに、中衣なかぎは赤色せきしよく、下衣したぎは白色はくしよくの無地むぢ。稚櫻姫命わかざくらひめのみことは、上衣うはぎは水色みづいろに種々の美しゆじゆはしき模様もやうがあり、たいいていは上中下とも松まつや梅うめの模様もやうのついた十二單衣じふにひとえの御服装ごふくさうである。天使大八洲彦命てんしおほやしまひこのみこと、大足彦おほだるひこのごときは、上衣うはぎは黒色こくしよくの無地むぢに、中衣なかぎは赤色せきしよく、下衣したぎは白色はくしよくの無地むぢ。天てん使大八洲彦命おほだるひこ、大足彦おほだるひこのごときは、上衣うはぎは黒色こくしよくの無地むぢに、中衣なかぎは赤色せきしよく、下衣したぎは白色はくしよくの無地むぢの絹きぬの服ふくである。その他の神將しんしやうは位くらゐによつて、青あを、赤あか、緋ひ、水色みづいろ、白しろ、黄き、紺等こんとう、いづれも無地服むぢふくで、絹きぬ、麻あさ、木綿等もめんとうに區別くべつされてゐる。

冠かむりもいろいろ形かたちがあつて纓えいの長短ちやうたんがあり、八王八頭神やつわうやつがしらがみいじやう以上の神々かみがみに用もちゐられ、それ以下の神司いかは烏帽子ゑぼしを冠かぶり、直衣ひたたれ、狩衣かりぎぬ。婦神ふしんはたいいてい明衣みやうえであつて、青あを、赤あか、黄き、白しろ、紫などの色いろを用もちゐられ、袴はかまも色々いろいろと五色ごしきに分わかれてゐる。また神將しんしやうは闕腋けつてきに冠かむりをつけ、残のこらず黒色こくしよくの服ふくである。

神卒しんそつは一の字いちの笠かさを頭あたまに戴いたき、裾すそを短みじかくからげ、手首てくび、足首あしくびには紫むらさきの紐ひもをもつて結び、實じつに凜々りんしき姿すがたをしてをらるるのである。委くはしく述べれば際限さいげんがないが、いま述べたのは國治立命くにはるたちのみことが御隠退遊ごいんたいあそばす以前の神々の御服裝の大略である。

星移ほしうつり、月換つきかはるにつれ、神界しんかいの御服裝はおひおひ變化へんくわし來たり、現界げんかいの人々の禮裝らいさうに酷似こくじせる神服しんぷくを纏まとはるる神司かみも澤山たくさんに現はれ、神使しんしの最下さいかたる八百萬やほよろづの金神天狗界こんじんてんぐかいにては、今日流行こんにちりゅうかうの種々の服裝で活動しゅじゅさるるやうになつてをる。

また邪神界じやしんかいでもおのおの階級かいきふに應おうじて、大神おほかみと同一どういつの服裝を着用ちやくようして化ばけてをるので、靈眼れいがんで見ても一見いつけんその正邪せいじやに迷まよふことがある。

ただ至善しぜんの神々は、その御神體ごしんたいの包羅ほうらせる靈衣れいいは非常ひじやうに厚あつくして、かつ光澤くわうたくつよ強く眼めを射いるばかりなるに反はんし、邪神じやしんはその靈衣れいいはなはだ薄うすくして、光澤くわうたくなきをもつて正邪せいじやを判別はんべつするぐらゐである。しかるに八王大神やつわうだいじんとか、常世姫とこよひめのごときは、正神界せいしんかいの神々のごとく、靈衣れいいも比較的ひかくてきに厚あつく、

また相當の光澤を有してをるので、一見してその判別に苦しむことがある。

また自分が幽界を探險した時にも、種々の色の服を着けてゐる精霊を目撃した。これは罪の

輕重によつて、色が別れてゐるのである。しかし幽界にも亡者ばかりの靈魂がをるのではない。

現界に立働いてゐる生きた人間の精霊も、やはり幽界に靈籍をおいてをるものがある。これらの

人間は現界においても、幽界の苦痛が影響して、日夜悲惨な生活を續けてをるものである。これ

らの苦痛を免るる方法は、現體のある間に神を信仰し、善事を行ひ萬民を助け、能ふかぎりの

社會的奉仕を務めて、神の御恵を受け、その罪を洗ひ清めておかねばならぬ。

さて現界に生きてゐる人間の精霊を見ると、現人と同形の幽體を持つてゐるが、亡者の精霊に

比べると、一見して生者と亡者の精霊の區別が、判然とついてくるものである。生者の幽體（精霊）

は、圓い靈衣を身體一面に被つてゐるが、亡者の幽體は頭部は山形に尖り、三角形の靈衣を纏う

てをる。それも腰から上のみ靈衣を着し、腰以下には靈衣はない。幽靈には足がないと俗間にい

ふのも、この理りに基もとづくものである。また徳高とくたかきものの精靈せいれいは、その靈衣れいゐきはめて厚あつく、大おほきく、
光澤くわうたくつよ強くして人ひとを射いるごとく、かつ、よく人ひとを統御とうぎよする能力のうりよくを持つてゐる。現代げんだいはかくの如ごとき靈衣れいゐ
の立派りつぱな人間にんげんがすくなくないので、大人物だいじんぶつといはるるものができない。現代げんだいの人間にんげんはおひおひと靈衣れいゐ
が薄うすくなり、光澤くわうたくは放射はうしやすることなく、あたかも邪神界じやしんかいの精靈せいれいの着きてをる靈衣れいゐのごとく、少すこしの
權威けんゐもないやうになつて破やぶれてをる。大病人だいびやうにんなどを見ると、その靈衣れいゐは最も薄もつとくなり、頭部とうぶの靈衣れいゐ
は、やや山形やまがたになりかけてをるのも、今いままで澤山たくさんに見みたことがある。いつも大病人だいびやうにんを見舞みまひふたび
に、その靈衣れいゐの厚薄こうはくと圓角ゑんかくの程度ていどによつて判斷はんだんをくだすのであるが、百發百中ひやくぱつひやくちゅうである。なにほ
ど名醫めいいが匙さじを投なげた大病人だいびやうにんでも、その靈衣れいゐを見て、厚あつくかつ光ひかりが存ぞんしてをれば、その病人びやうにんはか
ならず全快ぜんくわいするのである。これに反はんして天下てんかの名醫めいいや、博士はくしが、生命いのちは大丈夫だいぢやうぶだと斷定だんていした病人びやうにん
でも、その靈衣れいゐがやや三角形さんかくけいを呈ていしたり、紙かみのごとく薄うすくなつてゐたら、その病人びやうにんは必ず死し
でしまふものである。

ゆゑに神徳ある人が鎮魂を拜授し、大神に謝罪し、天津祝詞の言靈を圓滿清朗に奏上したならば、たちまちその靈衣は厚さを増し、三角形は圓形に立直り、死亡を免れるものである。かくして救はれたる人は、神の大恩を忘れたときにおいて、たちまち靈衣を神界より剥ぎとられ、ただちに幽界に送られるものである。

自分は數多の人に接してより、第一にこの靈衣の厚薄を調べてみるが、信仰の徳によつて漸次にその厚みを加へ、身體ますます強壯になつた人もあり、また神に反對したり、人の妨害をしたりなどして、天授の靈衣を薄くし、中には圓相がやや山形に變化しつつある人も澤山實見した。自分はさういふ人にむかつて、色々と親切に信仰の道を説いた。されどそんな人にかぎつて神の道を疑ひ、かへつて親切に思つて忠告すると心をひがまし、逆にとつて大反對をするのが多いものである。これを思へばどうしても靈魂の因縁性來といふものは、如何ともすることが出来ないものをつくづく思ひます。

おほくにはるたちのみこと まを あ
 大國治立尊と申し上げるときは、大宇宙一切を御守護遊ばすときの御神名であり、單
 くにはるたちのみこと まを あ
 國治立尊と申し上げるときは、大地球上の神靈界を守護さるるときの御神名である。自分の
 こうじゆつちゆう にしゆ めいしよう
 口述中に二種の名稱があるのは、この神理に基づいたものである。

かみさま にんげんすがた ごくわつどう はじめ くにひろたちのみこと さいしよ
 また神様が人間姿となつて御活動になつたその始は、國大立命、稚櫻姫命が最初であり、
 わかざくらひめのみこと じつげつ せい きふいん こくそ かみ いぶき うま くにひろたちのみこと つき せい うま
 稚櫻姫命は日月の精を吸引し、國祖の神が氣吹によつて生れたまひ、國大立命は月の精より生
 い にんげんすがた かみさま
 れ出でたまうた人間姿の神様である。それよりおひおひ神々の水火によりて生れたまひし神系と、
 あだるひこ えばひめ にんげん そ うま にんげん にしゆ くべつ かみ ちよくせつ いき
 また天足彦、胞場姫の人間の祖より生れいでたる人間との、二種に區別があり、神の直接の水火
 うま ちよくけい にんげん あだるひこ えばひめ けいと うま にんげん
 より生れたる直系の人間と、天足彦、胞場姫の系統より生れいでたる人間とは、その性質におい
 たいへん さうあ かみ ちよくせつ いき うま いで にんげん とうはつくろ うるし ごと
 て大變な相違がある。そして神の直接の水火より生れ出たる人間は、その頭髮黒くして漆の如く、

あだるひこ えばひめ うま 天足彦、胞場姫より生れたる人間の子孫は赤色の頭髮を有している。あだるひこ えばひめ
もと おほかみ ちよくけい うま 元は大神の直系より生れたのであれども、世の初發にあたり、しんめい そむ
によつて、人間に差別が自然にできたのである。にんげん さべつ しぜん

いづ じんしゆ こんにち くぶくりん さいれども何れの人種も、今日は九分九厘まで、みな體主靈從、尊體卑心の身魂に墮落してゐる
こんにち しんかい み こんにち たいしゆれいじゆう そんたいひしん みたま だらく
のであつて、今日のところ神界より見たまふときは、甲乙を判別なし難く、つひに人種平等の至當
さけ たち なるを叫ばるるに立いたつたのである。

○

ばんこだいじん しほながひこ ひ 盤古大神鹽長彦は日の大神の直系にして、たいやうかい かうたん かみ
いざなぎのみこと ごゆだん て また くぐ い げんこん しな ほつばう くだ 伊邪那岐命の御油斷によりて、手の俣より潜り出で、現今の支那の北方に降りたる温厚無比の

正神せいしんである。

また大自在天神大國彦は、天王星より地上に降臨したる豪勇の神人である。いづれもみな

善神界の尊き神人であつたが、地上に永住されて永き歳月を経過するにしたがひ、天足彦、

胞場姫の天命に背反せる結果、體主靈從の妖氣地上に充滿し、つひにはその妖氣邪靈の惡龍、惡狐、

邪鬼のために、いつとなく憑依されたまひて、惡神の行動を自然に採りたまふこととなつた。そ

れより地上の世界は混濁し、汚穢の氣みなぎり、惡鬼羅刹の跋扈跳梁をたくましくする俗惡世界

と化してしまつた。

八王大神常世彦は、盤古大神の水火より出生したる神にして、常世の國に靈魂を留め、常世姫

は稚櫻姫命の娘にして、八王大神の妃となり、八王大神の靈に感合し、つひには八王大神以上

の惡辣なる手段を用ゐ、世界を我意のままに統轄せむとし、車輪の暴動を繼續しつつ、その靈は

なほ現代にいたるも常世の國にとどまつて、體主靈從的世界經綸の策を計畫してをる。

ゆゑに常世姫の靈の憑依せる國の守護神は、今になほその意志を實行せむと企ててをる。

八王大神常世彦には天足彦、胞場姫の靈より生れたる八頭八尾の大蛇が憑依してこれを守護し、

常世姫には金毛九尾白面の惡狐憑依してこれを守護し、大自在天には、六面八臂の邪氣憑依して

これを守護し、ここに良の金神國治立命の神系と盤古大神の系統と、大自在天の系統とが、地上

の靈界において三つ巴になつて大活劇を演ぜらるるといふ靈界の珍しき物語である。

自分はここまで口述したとき、何心なくかたはらに散亂せる大正日日新聞に眼をそそぐと、

今日はあたかも大正十年陰曆十月十日午前十時であることに氣がついた。靈界物語第二卷の

口述ををはつた今日の吉日は、松雲閣において御三體の大神様を始めて新しき神床に鎮祭する

こととなつてゐた。これも何かの神界の御經綸の一端と思へば思へぬこともない。

ついでに第三卷には、盤古大神（鹽長彦）、大自在天（大國彦）、良能金神（國治立命）三神系

の紛糾的經緯の大略を述べ、國祖の御隱退までの世界の狀況、神々の驚天動地の大活動を略述

する考へであります。かんが讀者諸氏の幸に御熟讀あつて、それが靈界探求の一端ともなれば、口述者くじゆつしやの目的は達せらるる次第であります。もくてき たつ しだい

ア、惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへまぜ

大正十年舊十月十日午前十時十分たいしやうじふねんきうじふぐわつとをかごぜんじふじつぶん

於松雲閣 口述者識

(註) 本卷において、國治立命、豐國姫命、國大立命、稚櫻姫命、木花姫命とあるは、神界ほんくわん
くにはるたちのみこと とよくにひめのみこと くにひろたちのみこと わかざくらひめのみこと このはなひめのみこと
の命により假稱したものであります。しかし眞の御神名は讀んで見れば自然に判明することと思
めい かしよう しん ごしんめい よ み しぜん はんめい
ひます。

第一篇 神界の混亂

第一章 攻防兩軍の配置〔五一〕

龍宮城の防備は勇猛なる諸神司の守護のため難攻不落の堅城となり、したがって黄金橋もや
や安心することができるようになった。しかし敵軍は龍宮城および地の高天原を脅かすには、
まづシオン山に根據を構へるの有利なることを覺つた。さうして敵軍の部將は棒振彦、高虎姫、
武熊別、駒山彦、荒熊彦などである。シオン山は今日の地理上よりみれば、きはめて小さき山で
あるが、神界にては非常に高く秀でたる神嶺であつて、神々の世界經綸の御神業の主要地點であ
る。それゆゑこのシオン山を一時にても早く占領した神が勝利を得るのである。

棒振彦、高虎姫はその消息を知り、神軍を悩ませ、會稽の恥を雪がむとして軍備を整へつつあつた。その消息を窺ひ知つた齋代彦は看過しがたき事件となし、ひそかに天使大八洲彦命に報告した。天使は時をうつさず眞鐵彦、谷川彦、谷山彦、宮比彦、康代彦、眞言彦、奥山彦、磐樟彦、廣足彦、神座彦、香川彦、花照彦、大足彦、道貫彦、吾妻別、花森彦の十六神將をしておの神軍を督し、シオン山に逸早く出陣せしめられた。十六神將はただちに神軍を率ゐシオン山の要所々々を固め、ここにいよいよ難攻不落の陣地を獲得し、なほも十分の注意を怠らなかつた。天使大八洲彦命は眞鐵彦をして北方の上り口に、吾妻別をして東方の上り口に、磐樟彦をして西方の上り口に、大足彦をして南方の上り口に、各自神軍を率ゐて陣取らしめ、固く敵軍の襲來に備へられた。山頂の中央なる顯國の御玉の出現せし聖跡には、莊嚴無比の神宮を建設し天神地祇を祀り、宮比彦をしてこれに奉仕せしめられた。このとき棒振彦、高虎姫、武熊別の邪神の三將は、盤古大神鹽長彦を奉じてシオン山を乗取らむと欲し、高虎姫は南方より、棒振彦は東方

より、武熊別は西方より攻めかけた。さうして北方は路嶮惡にして進むことができぬ。やむをえず敵の魔軍は三方より一齊に攻め寄せた。

シオン山は前述のごとく大八洲彦命の率ゐる忠勇無比の十六神將によつて堅く守らるることになった。しかし稚櫻姫命は深く慮るところあつて、かの神玉の精靈を祕めおかれるシナイ山を魔軍に占領されなば、千仞の功を一簣に缺くのおそれありとし、ここに八島別を主將とし、八島彦、八島姫、小車彦、小車姫、元照彦、梅若彦、玉榮姫、神山彦の八神將を副へてこれを守護せしめられた。

シオン山およびシナイ山の彼我の勝敗は、神界經綸上に一大影響を及ぼすべき重要な地點である。ゆゑに、敵も味方も千變萬化の祕術をつくして戦ふた。この兩山の戦闘開始に先だち、鹽長彦を奉ずる魔軍が必死となりて畫策したる、その行動の千變萬化の經緯を略述することにいたします。

(大正一〇・一〇・二六 舊九・二六 谷口正治録)

第二章 邪神の再來〔五二〕

ここに竹熊の再來なる棒振彦と木常姫の再來なる高虎姫は八王大神常世彦を謀主とし、
盤古大神鹽長彦の神政に覆さむと欲し、艮の金神國治立命を地上より退去せしめむとする一念
は、竹熊の時よりも一層激烈の度を増した。棒振彦はここに美山彦と名を變じ、高虎姫は國照姫
と偽名して、大八洲彦命の部下の神軍を欺く手段をとつた。

この偽美山彦には温順にして正直一途の玉能姫といふ妻神があつた。美山彦の行動を見て、
天地の道理に背反せるを歎き、しばしば涙とともに善道に立歸らむことを諫めた。

しかるに美山彦は妻の諫言を一言も耳に入れず、偽國照姫とともに種々の惡策を凝議しつつあ

玉能姫は夫の心を改めしめむと焦心し、一通の遺書を残し紅海に身を投げて歸幽した。
後に美山彦はわが目的の妨害者の亡び失せたるをかへつて愉快となし、偽國照姫とともに相謀りて最初の大望を達せむとした。

ここに國照姫は、自分の部下にしてもつとも奸智に長たる小杉姫を美山彦の正妻とした。

小杉姫は奸智にたける女なれば、棒振彦、高虎姫の奸計を探知しながら、素知らぬ顔をしてゐた。

小杉姫の心中には萬一の場合、その悪計を、憤怒の極點に達したるとき、これを大八洲彦命に内々奏上し、もつてその恨みを報ずるの準備としてゐた。アゝ女の瞋恚ほど世に恐ろしいものはない。

棒振彦、高虎姫は小杉姫の心中穩かならざる色あるを怪しみ、小杉姫の侍女鷹姫をして、その心中を探らしめた。

あるとき鷹姫は小杉姫にしたがひ、美はしき丘上に上り、散歩を試みながら無花果の實を採つ

て遊んだ。ふたりは山の頂に草をしきて坐し、四方山の景色を賞めつつ、

『世の中に多くの神司あませども貴女のごとき幸福なる御方は外に一柱もあまさざるべし。げに

親しき睦じき御夫婦の間柄にましますこそ羨ましきの限りよ』

と言葉たくみに小杉姫の心中を探り、その返答やいかにと、顔をながめて待侘びた。小杉姫は自分

の信ずる鷹姫の言なれば、心措きなく小聲になつて、あたりを見廻しながら、耳に口をあて、

棒振彦と高虎姫との悪逆無道の計畫を、瞋恚の念とともに打明けた。ここに鷹姫は、

『貴女の御立腹は實にごもつとも。妾は實に同情の念にたへませぬ』

と額に袖をあてて空泣きに泣きながら、

『妾は貴女のためには生命に代へても充分の力を添へ、おふたりの仲を割き、もつて貴神に安心

をえさせ奉らむ。今後は何事にも介意なく仰せられたし』

と忠義さうにいった。賢明なやうでもさすがは女の浅はかさ、鷹姫の詐術に深く陥つたのであ

る。

心こころきたなき鷹たか姫ひめは棒振彦ぼうふりひこ、高虎たか姫ひめにむかつて、小杉こすぎ姫ひめの心中しんちゆうならびに一切いっさいの祕密ひみつを密告みつこくした。

ふたりはおほ大いに驚おどろき大事だいじの前のまへ小事せうじゆだん油斷たいてきは大敵たかひめなりと、鷹たか姫ひめをして謀計ぼうけいをもつて小杉こすぎ姫ひめを逐おはし

めた。ここに鷹たか姫ひめはふたりの寵ちやうを得え、つひに拔擢ばつてきされて謀議ぼうぎに参さんずるにいたつた。これより棒振彦ぼうふりひこ、

高虎たか姫ひめ、鷹たか姫ひめは三つ巴みどもゑとなつて陰謀成就いんぼうじやうじゆのために、大活動だいくわつどうをはじめたのである。さうして高虎たか姫ひめ

には立派りつぱなる猿飛彦さるとびひこという夫をがあつた。

(大正一〇・一〇・二七 舊九・二七 外山豊二録)

第三章 美山彦命みやまひこのみことの出現しゆつげん〔五三〕

ここに天使てんし大八洲彦命おほやしまひこのみこと、眞澄ますみ姫ひめのもつとも信賴しんらいせる神人かみに、美山彦命みやまひこのみことという智勇兼備ちゆうけんびの神將しんしやうが

あつた。この神人は常に帷幄に參じて、すべての畫策を大八洲彦命にすすめてゐた。龍宮城の神司は、大八洲彦命の參謀にして、かつ信任ある美山彦命のあることは仄かに聞いてゐたが、その風貌に接した神司は一柱もなかった。しかしいつとはなしに美山彦命の智勇兼備の聲望は、大八洲彦命の驍名とともに廣く世界に喧傳されてゐた。

奸惡なる棒振彦はその消息を知つて、ここに美山彦命と名を偽り、また木常姫の再來なる高虎姫は美山彦命の妻神國照姫と偽り名乗つた。しかるに眞正の美山彦命は、大八洲彦命、眞澄姫の内命によりロッキー山に立てこもり、魔軍の内情を偵察してゐた。このとき、美山彦命の使として、岡野姫は天の鳥船に乗りて龍宮城にきたり、

『ロッキー山は棒振彦、高虎姫の魔軍のために八方より包圍せられ、美山彦命は危機一髪にあひだに立てり、一時もはやく眞澄姫は援軍を率ゐて來りたまへ』と密告した。眞澄姫は大いに訝かり、

『われはかよわき女なり、しかるに大八洲彦命を差し置き、われに救援のため出陣を乞ひきたるとは、實にその意をえず』

として直ちにこの由を稚櫻姫命に奏上したまうた。この美山彦命は全くの偽名であつて、實際は棒振彦の計略であつた。

稚櫻姫命は、この密書を怪しみ、大八洲彦命に報告された。大八洲彦命はただちに敵の奸策なることを看破された。このゆゑは、眞の美山彦命は神示によつて、東方に位する安泰山に第二の陣營をつくり、既に出陣してをつたからである。そして後には岩をもつてわが姿をつくり、また諸々の從臣の形をも岩にて作り、これをロツキー山の城塞に立ておいたのである。

一方、ロツキー山に駐屯せる美山彦命の危急は迫れりと傳へ聞きたる神司は、とるもの取りあはず、ロツキー山さしてめいめい神軍を引率し救援にむかうた。そのとき棒振彦、高虎姫は、山腹に待ち伏せ、みづから美山彦命、國照姫と稱し、あまたの正しき神司を誑かしてわが勢力を集め

むとした。味方みかたの神將しんしやう香川彦かがはひこ、廣足彦ひろたるひこ、瀧彦たきひこ、豐彦とよひこ、神山彦かみやまひこはそれを眞まことの美山彦命みやまひこのみことと信じしん、率先そつせん

して棒振彦ぼうふりひこの魔軍まぐんに加はつた。美山彦みやまひこ（棒振彦ぼうふりひこの偽名ぎめい）は諸神司しよしんに向つて、

『龍宮城りゆうぐうじやうはすでに棒振彦ぼうふりひこ、高虎姫たかとらひめの手に陥おちいれり。これより進すすんで龍宮城りゆうぐうじやうを回復くわいふくし、稚櫻姫命わかざくらひめのみこと

以下いかの諸神司しよしんを救すくひ奉たてまつらむ』

と、いかにも言葉ことばたくみに諸神司しよしんを詐いつはり、反對はんたいにふたたび龍宮城りゆうぐうじやうに迫せまらむとした。

この時とき、大八洲彦命おほやしまひこのみことは安泰山あんたいざんの美山彦命みやまひこのみこととともにロツキー山さんの麓ふもとに現あらはれ、

『眞まことの美山彦命みやまひこのみことはここにあり』

と大音聲だいおんじやうに呼よばはりたまえば、棒振彦ぼうふりひこ、高虎姫たかとらひめは謀計ぼうけいの破やぶれたるに驚おどろき、散亂さんらんせむとする魔軍まぐんをか

きあつめ、西方せいほうの海うみに向つて姿すがたを隠かくした。かくして惡神あくがみの計畫けいくわくは見事失敗みごとしつぱいに歸きした。

一旦いつたん棒振彦ぼうふりひこを眞しんの美山彦命みやまひこのみことと信しんじて參加さんかした諸神將しよしんしやうは、ここに全まつたく夢ゆめのさめたるごとく、

大八洲彦命おほやしまひこのみことにその不覺不識ふかくふしきを謝しやし、美山彦命みやまひこのみことにしたがひて安泰山あんたいざんに出軍しゆつぐんした。このとき早はやくも、

ロッキー山は棒振彦の占領するところとなつてゐた。しかるに美山彦命以下の石像より常に火を
發して、棒振彦の魔軍を滅茶々々になやませしかば、棒振彦はつひにロッキー山を捨てて、鬼城山
の高虎姫の陣營に退却するの止むをえざるに立ちいたつた。

こがらしや犬のほえつく壁の蓑

(大正一〇・一〇・二七 舊九・二七 櫻井重雄録)

第四章 眞澄の神鏡〔五四〕

ここに天使大八洲彦命は龍宮城の勇神、大足彦、花照姫、道貫彦を添へて、木花姫命の鎮まりたまふ芙蓉山を守らしめたまうた。

不二の山三國一の四方面

汽車の窓半日のぞく不二の峰

ここに美山彦、國照姫は、鷹姫とともに雲霧をおこして芙蓉山に翔けのぼり、大足彦に面會を求めた。大足彦は木花姫命の神務を帯びて、遠く安泰山に行かれた後である。そこで花照姫は道貫彦をして代つて應接せしめた。

美山彦以下二神は「一大祕密あり、願はくは隣神を遠ざけたまへ」と仔細ありげに申しのべた。道貫彦は乞ふがまにまに隣神を遠ざけ一閒に入りて、

『その祕密はいかに』

と反問した。このとき美山彦は聲を密めて、

『龍宮城も地の高天原も既に重圍に陥り危機旦夕にせまる。稚櫻姫命はわずかに身をもつて

のがれたまひ、萬壽山に避難し、ここに再舉を圖らせたまふ。しかるに大八洲彦命、眞澄姫はす

でに棒振彦に歸順し、今や魔軍の將として萬壽山に押し寄せむとす。高天原の大事を救ふは今こ

の時なり。智略縱横の大足彦きたりて萬壽山の主將となり、大勢を挽回し、大神の神慮を慰め

よ、との稚櫻姫命の御神命なり。貴神の向背いかん』

と氣色を上げまし、刀の柄に手をかけ決心の色を見せながらズリズリと詰めよつた。

花照姫、道貫彦は始終を聞きて心も心ならず、ただちに天の鳥船をもつて、豊彦をして安泰山

の大足彦にこの顛末を報告せしめた。時をうつさず西方の天より、大足彦は豊彦とともに歸山し、

すでにすでに安泰山において美山彦命と會見してすべての様子を知りみたるに、ここにまた

美山彦命みやまひこのみことの來きたれるを聞ききて、何なんとなく怪あやしみに堪たへず、山頂さんちやうの木花姫命このはなひめのみことの宮みやにいたり神示しんじを乞こひたまうた。

木花姫命このはなひめのみことの神示しんじによりて、天使てんしは心中しんちゆうふか深く期きするところのあるものごとの如ごとく、花照姫はなてるひめ、豊彦とよひこその他の神司たを芙蓉山かみがみ ふようざんに残のこして守備しゆびとなし、美山彦みやまひこ一行いっかうと共に萬壽山まんじゆうざんに向むかうた。萬壽山まんじゆうざんには、バイカル湖この邪神じやしんとなりし鬼姫おにひめの再さい來らいなる杵築姫きづきひめは、美々びびしく變裝へんさうを凝こらして稚櫻姫命わかざくらひめのみことと化なり、大足彦おほだるひこに向むかつて遠來ゑんらいの勞らうを謝しやし、かつ地ちの高天原たかあまはらおよび龍宮城りゆうぐうじやうの回復くわいふくを命めいぜられた。

這はふて出でてはねる蚯蚓みみずや雲くもの峰みね

大足彦おほだるひこは出發しゆつぱつの際さい、木花姫命このはなひめのみことよりひそかに賜たまはりたる眞澄ますみの鏡かがみをとりいだし、稚櫻姫命わかざくらひめのみことを照てらしみれば、こはそも如何いかに、今いままで優美いうびにしてかつ尊嚴そんげんなりし稚櫻姫命わかざくらひめのみことは、見みるも恐おそろしき鬼姫おにひめ

の後身こうしんバイカル湖この黒龍こくりゆうと現あらはれ、東北とうほくの天てんにむかつて黒雲こくうんを捲まきおこし、雲くもを霞かすみと逃げ失うせ
た。美山彦みやまひこはと鏡かがみに照てらして見みれば、こはそも如何いかに、竹熊たけくまの再來さいらい棒振彦ぼうしひこの正體しやうたいあらはれ、高虎姫たかとらひめ
を見みれば木常姫こつねひめの再來さいらいなる金毛九尾きんもうきゆうびの惡狐あくこと化くわし、鷹姫たかひめの姿すがたは大だいなる古狸ふるだぬきと現あらはれた。

大足彦おほだるひこは天てんを拜はいし地ちに伏ふし、芙蓉山ふようざんにむかつて合掌がつしやうし神德しんとくの廣大無邊くわうだいむへんなるを感謝かんしやした。その後ご
棒振彦ぼうしひこ、高虎姫たかとらひめは諸方しよはうにかけ廻めぐり、このたびは大足彦おほだるひこをいかにもして亡ほろぼし、眞澄ますみの鏡かがみを得えむと
非常ひじやうに苦心焦慮くしんせうりよした。邪神じやしんの去りしあとの萬壽山まんじゆざんは、實じつに荒涼くわうりやうたる荒野くわうやと化くわしてゐた。あとに
大足彦おほだるひこは地ちを踏ふみ轟とどろかして雄健をたけびしながら、怒いかりを押おさへ直ただちに烏船とりぶねに乗りて芙蓉山ふようざんに歸還きくわんした。
(大正一〇・一〇・二七 舊九・二七 加藤明子録)

第五章 黑死病ペストの由來ゆらい〔五五〕

死海しかいの惡靈あくれいとなりし竹熊たけくま、木常姫こつねひめは、再生さいせいして棒振彦ぼうふりひこ、高虎姫たかとらひめと化なり、ふたたび初志しよしを貫徹くわんてつせむため、神界しんかいに聲望せいぼう高き美山彦命みやまひこのみこと、國照姫くにてるひめの神名しんめいを偽いつはり、種々しゅじゅの謀計ぼうけいをもつて正神界せいしんかいの諸神司しよしんを攪亂かくらんせむと必死ひつしの活動くわつどうを續つづけてをる。茲ここに美山彦命みやまひこのみことは諸神司しよしんの正邪去就せいじやくしうの判別はんべつに迷まよはされむことを慮おもんばかり、稚櫻姫命わかざくらひめのみことの神命しんめいを奉ほうじて言靈別命ことたまわけのみことと改名かいめいし、これを諸神司しよしんに内報ないほうしおかれた。また國照姫くにてるひめも言靈姫ことたまひめと改名かいめいされることになった。したがつて以下いかの述のぶるところの言靈別命ことたまわけのみことは、眞まことの美山彦命みやまひこのみことのことであり、言靈姫ことたまひめは眞まことの國照姫くにてるひめのことである。さうして美山彦みやまひこといふのは眞まことの棒振彦ぼうふりひこのことであり、國照姫くにてるひめといふのは眞まことの高虎姫たかとらひめであることをあらかじめ述べておく。

月の夜つきよにそのに立出たちいでながむれば 黄菊白菊きぎくしらぎく一つ色いろなる

長白山ちやうはくざんの山腹さんぶくに古ふるくより鎮しづまります智仁勇兼備ちじんゆうけんびの神將しんしやうに、神國別命かみくにわけのみこと、佐倉姫さくらひめの二神人にしんがあつ

た。その麾下には豊春彦、猛虎彦ありて一切の神務を掌握し、八百萬の神司を集めて天下の趨勢を觀望し、銳氣を養ひ、潛勢力を備へて天使の來迎を待ちわびてゐた。この神人は國治立命の御系統にして、木星の精降つてここに顯はれたのである。大八洲彦命は、一旦神界は平穩無事に治まりしといへども、執念深き僭偽の美山彦、國照姫および鬼熊の再生なる鬼猛彦、杵築姫等の、各所に魔軍を集めて、ふたたび世界を攪亂するの氣勢明らかとなりたれば、これらの魔軍を殲滅し、世界の憂慮を除かむがために種々の神策をめぐらされた。そこで、言靈別命に瀧津彦を副へて長白山にのぼり、神國別命、佐倉姫を地の高天原に招致せむと計りたまうた。神國別命は神命を奉じて豊春彦、猛虎彦をして長白山の神營にとどまつて守備せしめ、みづから進んで地の高天原の部將たるを拜授された。

このとき偽美山彦の一味の邪神は、言靈別命の長白山に到りしことを探知し、あまたの邪鬼惡龍毒蛇を遣はし、八方より言靈別命、神國別命を攻め悩まさむとした。神國別命は三德兼備

の神將なれども、あまりの巧妙なる邪神の戦略にいかんともする能はず、言靈別命とともに非常なる苦境に陥った。

偽美山彦、國照姫は死海に沈みたる黒玉を爆發せしめ、山の周圍に邪氣を發生せしめた。この邪氣は億兆無數の病魔神と變じ、神國別命の神軍に一々憑依して大熱を發せしめた。神軍はこらず、この病魔に冒されて地上に倒れ、中には死滅する者も多數に現はれてきた。この病魔は漸次に四散して世界の各所に擴がり、つひにペストの病菌となつた。

ここに佐倉姫は神軍の慘状を見るにしのびず、天の木星にむかつて救援を請ひ、神言を朗かに奏上された。このとき木星より一枝の榊の枝がくだつてきた。佐倉姫は天の與へと喜び勇んで感謝し、この榊葉に神靈を取懸けて「左右左」と打ちふられた。東風にはかに吹ききたり、長白山の邪氣は遠く散逸してロッキー山の方に向かつて消滅した。たちまち神軍は蘇生しその元氣は平素に百倍した。ここに神國別命は神恩の深きに感謝し、神授の榊葉を豊春彦に授け、猛虎彦と

ともに長白山を守らしめ、二神人は地の高天原に参向さるることとなつた。

(大正一〇・一〇・二八 舊九・二八 谷口正治録)

第六章 モーゼとエリヤ〔五六〕

言靈別命は稚櫻姫命、大八洲彦命の命を奉じ、海原彦命の部下の猛將岩高彦はオコツク海方面にありと知り、これを高天原に招致せむとされた。

言靈別命は天の磐楠船に乗りて、浪風荒き海原を酷烈なる寒氣を冒して進まれた。ここに岩高彦は神命を聞きおほいに喜び、われに優渥なる神命の下りしは實に光榮身にあまる次第なり、しかしながら當方は邪神もつとも多く、寸時もわれの不在を許さず、あまたの惡龍神は今や

オコツク海かい はつぱうを八方より占奪せんだつせむとするの眞最中まつさいちゆうなり。ゆえに折角せつかくの御神勅ごしんちよくなれども命みことに應ずることを得ず。もしこの一角いっかくを魔軍まぐんに占領せんりやうされなば、龍宮城りゆうぐうじやうも地の高天原ち たかあまはらも保ちがたし。われはこの海うみに隠れて大神おほかみのために死力しりよくをつくさむ。されども神命しんめいを拒否きよひするは心許こころもとなければ、部下ぶかの神將瀧津彦しんしやうたきつひこをわれに代つて参向さんかうせしめむと答へた。

言靈別命ことたまわけのみことは、

『理義明白りぎめいはくなる貴下きかの御言葉おことば、げにもつともなり。われは歸りて大神かへ おほかみに貴下きかの赤誠せきせいを奏上そうじやうし奉らむ』

と満腔まんかうの感謝かんしやを述べられた。このとき天てんの一方より百雷ひやくぐらいの一時いちじに轟くとどろぐとき大音響だいおんきやうを發し、黒雲こくうんを押分け降りくる巨神人きよしんあり。たちまち天上てんじやうに群がる惡龍邪鬼あくりゆうじやきを、左右さいうの手に鐵棒てつぱうを振り廻しまは縦横無盡じゆうわうむじんにうち悩ませ、悠々いういうとして降りきたり、岩高彦いはたかひこに向つて、

『今や地上いま ちじやうの世界せかいは惡靈あくがみのために大混亂だいこんらんに陥らむとするの兆てうあり。われは天神てんしんの命めいによりて地上ちじやう

の神政を輔翼し、國治立命とともに、天上の制度を地上に布かむがために降れり』

といと嚴かに述べられたり。この神再來して後にモーゼの神人となり、すべて神則を定められた。

この神の御名は天道別命といひ、また天道坊と假稱する。

ここに遠く西方の海より雲霧立昇り、中天において光芒天地を輝かす明玉となつて、大陸を越

えオコツク海に落ち、水煙を立て、かつ海面に渦卷をたて、山嶽のごとき波間より現はれ出たる

巨神人あり、これを天真道彦命といふ。また天真坊と假稱する。

この神は國治立命の天地剖判のとき、神命を奉じて海中に明玉となつて沈み、神命のくだる

を待ちたまうた神である。いまや神界は混亂に混亂を重ね、邪神惡鬼の跳梁跋扈する時機なり、

神司は善惡正邪の區別なく右往左往に迷ふのをりからなれば、天地の諸神司にむかつて宇宙一切

の道理を説き、因果の神律を開示せむとして現はれたまうた。この神人再生して天下に現はれ、

豫言警告を發して神人を戒めたまふた。これをエリヤの神といふ。

ことたまわけのみこと にしん しゆつげん ちから え てん のぼ こち ししん あひ りゆうぐうじやう めでた
言靈別命は二神人の出現に力を得、天にも上る心地して四神人相ともなひ龍宮城に目出度く
きじやう
歸城し、ここにいよいよ大神の神慮を遍ねく天上天下に擴充された。

(大正一〇・一〇・二八 舊九・二八 外山豐二録)

第七章 天地の合せ鏡〔五七〕

てんし わかざくらひめのみこと てんし あまぢわけのみこと りゆうぐうじやう まも てんし あめのまみちひこのみこと かみくにわけのみこと
ここに天使稚櫻姫命は、天使天道別命をして龍宮城を守らしめ、天使天真道彦命、神國別命
ち たかあまはら まも たきつひこ かんらんざん まも ときよひこ こがねばし まも
をして地の高天原を守らしめ、瀧津彦をして檍欒山を守らしめ、齋代彦をして黄金橋を守らしめ、
こうこ うれ わかざくらひめのみこと きんりゆう おほやしまひこのみこと ぎんりう ますみひめ
はじめて後顧の憂ひなきをみて、稚櫻姫命は金龍にまたがり、大八洲彦命は銀龍に、眞澄姫は
こんがう ふようざん あら このはなひめのみこと ちはや りうめ じゆうしん ひき
金剛に、芙蓉山より現はれいでたる木花姫命は劍破の龍馬にまたがり、あまたの從臣を率ゐて

天馬空を驅けりて、高砂の島に出で行きたまひ、新高山に下らせたまふ。

天までも高く匂ふや梅の花

この高砂の神島は國治立命の嚴の御魂の分靈を深く祕しおかれたる聖地であつて、神國魂の生粹の御魂を有する神々の永遠に集ひたまふ經綸地で、神政成就の暁、この聖地の神司の御魂を選抜して使用されむがための、大神の深き御神慮に出でさせられたものである。故にこの島は四方荒浪をもつて圍み、みだりに邪神惡鬼の侵入を許されない。天地の律法まつたく破れて、國治立命御隱退ののちは邪神たちまち襲來して、ほとんどその七分どほりまで體主靈從、和光同塵の邪神の經綸に全く汚されてしまった。されど三分の残りし御魂は、今に神代のままの神國魂を抱持する嚴正なる神々が、潜んで時節を待つてをらるるのである。稚櫻姫命はこの中央

なる新高山に到着し、あまたの正神司を集め、神界の經綸をひそかに教示しおかれた。

ここにこの島の正しき守り神、眞道彦命は岩石を打ち割り、紫紺色を帯びたる透明の寶玉を持ちだし、これを恭々しく稚櫻姫命に捧呈された。この玉は神政成就の暁、ある國の國魂となる寶玉である。

つぎに奇八玉命は海底に沈み日生石の玉を拾ひきたつて捧呈した。この玉は神人出生の時にさいし、安産を守る寶玉である。この玉の威徳に感じて生れいでたる神人は、すべて至粹至純の身魂を有する靈主體從の身魂である。そこで眞鐵彦は谷間へ下りて水晶の寶玉を取りだし、これを稚櫻姫命に捧呈した。この玉は女の不淨を清むる珍の神玉である。ここに武清彦は山腹の埴を穿ちて黄色の玉を取りいだし恭しく命に捧呈した。この玉は神人の惡病に罹れるとき、神氣を放射して病魔を退くる寶玉である。つぎに速吸別は頂上の巖窟の黄金の頭槌をもつて靜に三回打ちたまへば、巨巖は分裂して炎となり中天に舞ひのぼつた。空中にたちまち紅色の玉と

へん うちう とうざいなんぼく しつそう くわえん は すめき は らいめい
變じ、宇宙を東西南北に疾走して火焰を吐き、ついで水氣を吐き、雷鳴をおこし、たちまちにし
くうちゆう えうき いつさう うるは こうしよく たま へん みこと まへ をみな ほうぢ
て空中の妖氣を一掃し、美しき紅色の玉と變じ、命の前にあまたの女性に捧持させてこれを命
たてまつ たま とき ひ はつ とき みづ はつ ひみづ てんち こんらん きよ
に獻つた。この玉はある時は火を發し、ある時は水を發し、火水をもつて天地の混亂を清むる
しんぼう
の神寶である。

わかざくらひめのみこと いつかう ばじやう かいじやう わた ち たかあまはら きくわん あめ やちまた
稚櫻姫命の一行は、馬上はるかに海上を渡りて地の高天原に歸還したまへるとき、天の八衢
おにくま ぼうれい くわ おにたけひこ だいじやひこ みこと きくわん ぼうし しんぼう だつしゆ
に鬼熊の亡靈は化して鬼猛彦となり、大蛇彦とともに命の歸還を防止し、かつその神寶を奪取せ
むと待ちかまへてゐた。ここに稚櫻姫命は紅色の玉を用ひるは、いまこの時なりとしてこの玉
もち
を用ひむとしたまひし時、木花姫命はこれをとどめていふ。
とき このはなひめのみこと

たま いちどしやう ふたた よう ちひ まぐん しよう じつ ざんねん
『この玉は一度使用せば再び用をなすまじ。かかる小さき魔軍にむかつて使用するは實に残念な
まぐん ぼろ た
り。この魔軍を滅ぼすはこれにて足れり』

ふところ あめ ますみ かがみ おにたけひこ まぐん いちはや て
と懷より天の眞澄の鏡をとりだして鬼猛彦の魔軍にむかつて逸早くこれを照らしたまうた。

魔神はたちまち黒龍と變じ、邪鬼と化して、ウラル山目がけて遁走した。

天地の眞澄の鏡照りわたり

醜の曲靈も逃げうせにけり

稚櫻姫命一行は無事歸還された。さうしてこの玉を龍宮島の湖に深く祕めおかれた。さきに

木花姫命より大足彦に賜はりしは國の眞澄の鏡である。天地揃うて合せ鏡という神示は、この

二個の神鏡の意である。また五個の神玉は海原彦命、國の御柱神二神の守護さるることとなつた。

(附言)後世女神および婦人らの簪に玉をつけ、また玉を連ねて頸飾りとなして、惡事を拂ひ、

幸福を求め、賢兒を得むとするのはこの因縁に因るものである。

(大正一〇・一〇・二八 舊九・二八 櫻井重雄録)

第八章 嫉視反目〔五八〕

ここに言靈別命は天使稚櫻姫命、大八洲彦命の命を奉じ、天道別命、天真道彦命とともに神業に奉仕し、大神の勅を宇内に宣傳し、神國別命は地の高天原にありて神政を總轄するこ
ととなつた。

この時常世の國に武豊彦といふ神司あり、こは正しき神司にして、言靈別命の神業を贊し、數多
の神司を率ゐて、神業に参加すべく馳せ參じた。武豊彦は全力を盡して奉仕した。また同じ常世
の國より鬼雲彦現はれ、神國別命の神政を輔翼せむとして、急ぎ群神司を率ゐて地の高天原に上
り、神政に参加した。鬼雲彦は米彦、岡彦を左右の補佐としてゐた。然るに鬼雲彦は神國別命の
聲望をみて深くこれを妬み、米彦、岡彦をして常に神國別命の身邊をうかがはしめてゐた。米彦、

をかひこ かみくにわけのみこと せいれんけつばく やばう いだ ちじんゆう さんとく けんび むひ

岡彦は、神國別命の清廉潔白にして、いささかも野望を懷かず、智仁勇の三徳を兼備したる無比

しんしやう いちいせんしんおほかみ ほうし み しんせい ほうしよく しせい かん

の神將にして、一意専心大神に奉仕し、身をもつて神政に奉職せるその至誠に感ずるとともに、

おにくもひこ かんねいじやち やしんまんまん しんてい いやき しやう いちど かんげん こころ おにくもひこ

鬼雲彦の奸佞邪智にして野心満々たるに心底より嫌氣を生じ、一度の諫言をも試みず鬼雲彦に

そむ かみくにわけのみこと ちよくかつ はいか はなもりひこ かい かみくにわけのみこと しんじゆう ねが

背きて、神國別命の直轄の配下たらむとし、花森彦を介して神國別命に臣従せむことを願ふた。

かみくにわけのみこと いちおうおにくもひこ しやうにん え うへ ゆる むね はなもりひこ つた

神國別命は一應鬼雲彦の承認を得たる上にてこれを許さむとし、その旨を花森彦に傳へた。

はなもりひこ おにくもひこ ゆる さと よねひこ をかひこ おにくもひこ こころ はな

花森彦は鬼雲彦のたうてい許さざるを悟り、かつ米彦、岡彦のすでに鬼雲彦にたいして心の離れ

ちしつ かみくにわけのみこと むね おにくもひこ いちごん つた にしん かみくにわけのみこと じゆうしん

たるを知悉したれば、神國別命の旨を鬼雲彦に一言も傳へずして、二神司を神國別命の從臣に

すめきよ

推舉した。

おにくもひこ かみくにわけのみこと はなもりひこ われ はいじよ いか とこよ くに のぼ

ここに鬼雲彦は神國別命、花森彦の吾を排除せるものとなし、いたく怒りて常世の國より上り

きたれる武豊彦とともに、神國別命、花森彦を排除し、みづから代りて高天原の神政を總轄せむ

はか たけとよひこ たけとよひこ ことば つく ひ と さと おにくもひこ こころ

と計つた。ここに武豊彦は言葉を盡してその非を説き諭した。されど鬼雲彦の心はますます荒び

にすさびてこれを用いず、つひには武豊彦を仇敵と見做すにいたつた。

ここに鬼雲彦は心を決し、言靈別命の前に出て、口を極めて神國別命、花森彦の讒誣を放ち、

かつ反逆の準備あることを言葉たくみに進言した。言靈別命は彼我兩神司の心中を推知し、

鬼雲彦の野望を知りながら、今このとき正邪の裁決をなさば、かへつて平地に浪をおこすのおそ

れあり、若かず、鬼雲彦に相當の地位を與へ互ひに和衷協同せしめむと苦心した。されど彼我の

二神司は言靈別命の眞意を悟らず、互ひに對立して正邪を爭ひ、鬼雲彦はつひにその勢力を失墜

して地の高天原を追はれ、惡鬼と化して東方に去つた。

鬼雲彦は逃れて鬼城山にいたり、國照姫と力を協せ、言靈別命を亡ぼし、つひに進んで地の

高天原を占領せむことを凝議した。國照姫はここに有力なる味方を得たりと打ち喜び、僞美山彦

とともに八方に魔軍を募り、種々の準備に着手した。

ここに清熊といふものあり、神國別命にしたがひて神政に奉仕せしが、鬼雲彦の鬼城山に逃れ、

反逆を企てをるを耳にし、われもこれに参加せむとてひそかに款を通じてゐた。清熊は利欲に深
き神なれば、清廉潔白なる神國別命の部下にありては、わが欲望を満たすこと能はず、むしろ
鬼雲彦に加擔して目的を達せむとした。しかるに清熊は言靈別命の神眼に心中を看破され、つ
ひにゐたたまらずして自ら鬼城山に逃れ、美山彦の魔軍に加はり、その參謀役となつた。

（大正一〇・一〇・二八 舊九・二八 加藤明子録）

第二篇

善惡正邪

第九章 タコマ山の祭典 その一〔五九〕

あるとき言靈別命は神命を奉じて、宮比彦、谷山彦、谷川彦以下あまたの神軍を率ゐてタコマ山に登り、宮比彦をして國魂之神の鎮祭を行はしめられた。谷山彦、谷川彦は大祓の神事を奉仕し、恭しく太祝詞を奉上し、八百萬の神々は神集ひに集ひて、盛大なる祭事は執行された。天地六合いよいよ澄み渡り、空中一點の雲翳をもとどめざる、えもいはれぬ朗かな光景であつた。ここに從臣なる速虎彦、速虎姫、唐玉彦、島田彦の四神は、國照姫、田野姫にひそかに氣脈を通じてゐた。この四柱は言靈別命の深き恩恵に浴し、しばしば危難を救はれた關係があつて、命は彼らの恩神である。祭事も目出度くすみで、一行は下山し海岸に出かけられたとき、右の四柱はあまたの者と共に、山野河海の珍味をもつて、言靈別命一行の諸神司を招待した。その理由とするとところは、今回言靈別命は首尾よく國魂の鎮祭を了へ給ひ、吾ら諸神司は歡喜に堪へず、

さればその御祝として、ここに吾々祝宴を張るは、一は神々に感謝し、他は諸神司の勞苦に酬いむがためなりといふのであつた。

宮比彦は速虎彦以下の諸神司の誠意をよろこび、その由を谷山彦、谷川彦とともに諸神司に傳達した。諸神司は大いに喜び、海邊の廣場に出でて、宴席に加はり、歡喜のかぎりをつくし、いたく酔つぶれて、前後の區別もなく、あるひは唄ひ、あるひは舞ひ、面白さうに踊り狂うてゐた。

小雀やささのかげにて踊り出し

このとき速虎彦、速虎姫、唐玉彦、島田彦は威儀を正し、言靈別命に拜謁を請ふた。さらに美しき神殿に招待し、山野河海の珍味を出して命を饗應せむことを宮比彦を通じて請ふた。ここ

に言靈別命は何心なくその殿内に入り、四方山の話に打ち耽り、かつ速虎彦らの好意を感謝し、心地よげに一閒に入りて休息してをられた。たちまち天の一方に黒煙がたちのぼった。爆然たる大音響につれて、みるみる一大火柱は天に沖し、岩石の雨を降らし、實に壯觀をきはめた。これぞエトナの大火山が爆發したはじまりである。

言靈別命はその光景に見惚れてゐられる。その隙をうかがひ速虎彦、唐玉彦は器に毒藥を投げ入れ、素知らぬ顔をしてゐた。

『まづ一服召し喫られよ』

と、毒藥の入りたる器に湯をそそぎ言靈別命に奉獻つた。命は何の氣もなく、ただ一口飲みむとする折しも、息せき切つて走りよつたる時野姫はその湯を奪ひ、ただちに自分の口に飲みほした。時野姫はたちまち顔色蒼白となり、七轉八倒して苦悶しはじめ、黒血を多量に吐きその場に打ち倒れた。言靈別命も小量ながら口に入りし毒藥の湯に中てられ、言葉を發すること能はず、

ただちにその場を逃れ出むと早々に座を立ちかけた。速虎彦以下の三柱は謀計の暴露せむことを
おそ ことたまわけのみこと たち かく 命の跡を追つかけた。
惧れて、言靈別命を捕へ隠さむとし、

火を出して毒湯すすめる曲津神

萬の神司は、前述のごとく、みな残らず酔ひ潰れて足の立つものは一柱もなかつた。言靈別命
よろづ かみがみ ぜんじゆつ のこ よ つぶ あし た ひとはしら ことたまわけのみこと
は、自分が毒にあてられて言語を發することも叶はぬのみならず、時野姫の苦悶昏倒せることを、
じぶん どく げんご はつ かな ときのひめ くもんこんたう
手眞似をもつて衆神司にさとらせむとし、いろいろ工夫を凝らし表情をもつて知らせども、
てまね しうしん さとらせむとし、いろいろ へうじやう
衆神司はその何の意たるか察するものなく、ただ單に言靈別命は酒に酔ひ戯れ踊りをなし給ふ
しうしん なん い さつ たん ことたまわけのみこと さけ よ たはむ をど たま
ものと信じ、己もまた起つて、おなじく手を振り、口を押へ、種々と身振をまねて平氣になつて
しん おのれ た おなじく 手 ふ くち おさ いろいろ みぶり へいき
ゐる。ア、言靈別命のもどかしさは、察するにあまりありといふべしである。
ことたまわけのみこと さつ

はやとらひこ からたまひこい かはんしん
速虎彦、唐玉彦以下の叛臣は、さすがに衆神司列座の前なれば、言靈別命を押さへ隠すをえず
して時のいたるを待つてゐた。

ことたまわけのみこと せうりよ げんご はつ
言靈別命はいかに焦慮するも言語を發することができないので、已むをえず意を決してただ
ひとはしらりうぐうじま に かへ
一柱龍宮島さして逃げ歸らうとせられた。さすがの勇神猛卒も今は酒のためにその精神を奪はれ、
かかる危急の場合に一柱としてその大將を護るものはなかつた。宮比彦、谷山彦、谷川彦は少し
さけ の ことたまわけのみこと しんべん き
も酒を飲まず、言靈別命の身邊を氣づかひ、後よりしたがひ龍宮島に安全に送り奉るべく、そ
の座を立たむとするや、酒に酔ひつづれ足は千鳥の覺束なく、腰も碌に立ちえざる衆神司は、
さんしん て あし
三神司の手をとり足をとり、かかる芽出度き酒宴に列して神酒を飲まざるは神々にたいし御無禮
なり。ゆるゆる神酒をいただきましたまへと、寄つてたかつて三神司を遮り離さなかつた。三神司は
ころ ころ ことたまわけのみことさうなん じつじやう つ しうしん あひ
心も心ならず、言靈別命遭難の實情を告げ、衆神司の酔をさまさむと心を焦つた。されど
しまだひこ はやとらひめ め ひか そば はな ころ
島田彦、速虎姫が眼を光らせて側を離れざるに心をひかれ、その真相を述ぶることができない。

そこで三神司さんしんは或あるひは喩言たとへごとを引き、あるひは諷歌ふうかを唄うたひ、あるひは手眞似てまねを用もちゐて、速虎彦はやとらひこ以下の陰謀いんぼうと、言靈別命ことたまわけのみことの御遭難ごさうなんの次第しだいを衆神司しうしんに悟さとらせやうとつとめた。いづれも酔よひつぶれてこれを覺さとる者ものは一柱ひとはしらもないばかりか、三神司さんしんの動作どうさをながめて、喜よろこんで歌うたを詠よみ、戯ざれ踊をどりをなすものと思おもひ違ちがひ、手てをとり足あしをとり、三神司さんしんを席せきの中央ちうあうに誘いざなひゆきて胴どうあ上げまでして立ち騷さわぐもどかしさ。

言靈別命ことたまわけのみことは萬難ばんなんを排はいし、からうじて龍宮島りゆうぐうじまにたち寄り、國御柱命くにのみはしらのみことに保護ほごされて、やうやく龍宮城りゆうぐうじやうに御歸還ごきくわんせられた。この龍宮島りゆうぐうじまの地下ちかは、多くの黄金おうごんをもつて形造かたちづくられてゐるのである。

これが今地理學上いまちりがくじやうの濠洲大陸がうしうたいりくに當あたるので、一名いちめいまた冠島かむりじまといふのである。

(大正一〇・一〇・二九 舊九・二九 谷口正治録)

第一〇章 タコマ山の祭典 その二〔六〇〕

龍宮城には言靈別命の侍臣に田野姫といふのがあつた。田野姫は表面忠實にたち働き、つねに言靈別命の身の廻り一切の世話をしてゐた。田野姫は實は高虎姫の偽名國照姫の探女として入り込んでゐたのである。

田野姫は龍宮城の内事に關し、非常な信任と勢力があつた。ここに田野姫の發案によつてタコマ山祭典の祝祭を行ふことになつた。天使大八洲彦命は、言靈別命の歸城の後に祝祭を執行せよと命ぜられた。そのとき田野姫は命の前に進みいでて、顔色を和げ甘言追従いたらざるなく、

『諺にも善は急げといふことあり、タコマ山の祭典の時間を考へ、同時刻に祭事を行ふには雙方一致の眞理に適ふべし』

と言辭も滑らかに奏上した。

大八洲彦命はまづ大神に奏上して、その上にて決せむと座をたち奥にいり、稚櫻姫命に伺は

れた。命は嬉々として直ちにこれを許したまうた。一方田野姫は龍宮城の諸神將にむかつて、

一時も早く祝宴を開くべきことの可なるを、言葉たくみに進言した。上下一致の賛成に、城内は

にはかに色めきたちて祝祭の準備に着手し、膳部の獻立はすべて田野姫が監督することに一決し、

神前の祭典は莊嚴に開かれ、祭典をはつて諸神司の談話會に移り、ついで直會の宴を開く順序と

なつた。

梅若彦、正照彦は上座に立ちて言靈別命の功績を賞めたたへ、つぎに田野姫の幹旋努力を激賞

した。つぎに梅若彦も雙方一時の祭典については、田野姫の幹旋努力おほいに功ありと感謝した。

城内は神國別命をはじめ一同の神司手を拍つて賛同した。そのまに田野姫は鳩の羽を取だし、

膳部の羹に一々これを浸してゐたのである。様子をうかがひし神島彦は芳子姫に命じ、その羹

の ため
を呑み試さしめた。たちまち芳子姫は黒血を吐いて七轉八倒苦悶しはじめた。諸神司は驚き水よ
くすり
薬よと騒いだ。芳子姫は糞を指さして、自分の口を苦しきうちに押さへて見せた。神司は芳子姫
こころ し
の心を知らず、糞を要求するものと早合點し、膳部の糞を取りて口を捻開け、無理に飲まし
よしこひめ くる
た。芳子姫の苦しみはますます激烈になつてきた。そこへ言靈別命は生命から遁げ歸つてこ
えうきう
られた。しかして自分の口を押さへて、その糞を用心せよとの意を示された。諸神司は糞を
えうきう
要求したまふものと信じて、恭しく机に之をのせて献上した。
ことたまわけのみこと
言靈別命はその糞を手にとるやいなや、庭園の草木に注ぎかけられた。見るみる草木は白煙
はつ こし
を發し枯死してしまつた。ここに諸神司ははじめて氣がつき、田野姫の惡逆無道の所爲たること
さと
を悟り、これを捕へむとした。田野姫は早くも風をくらつて姿をどこかに隠してしまつたのであ
る。

そこへ時野姫はやうやく病氣恢復し、宮比彦以下の諸神司とともに、鼈に尻を吸はれたる如

き恍惚とぼけた顔かほつきして歸かへつてきた。一同いちどうはアフンとして、開あいた口くちが塞すまらぬばかりであつた。
注意ちういすべきは實じつに飲食物いんしょくぶつである。

神國別命かみくにわけのみことは驚おどろいてただちに神前しんぜんに祝詞のりとを奏上そうじやうして、大神おほかみに祈願きぐわんしをはるとともに、言靈別命ことたまわけのみこと、
時野姫ときのみめおよび芳子姫よしこひめの病氣びやうきは、たちまち拭ぬぐふがごとく全快ぜんくわいした。

(大正一〇・一〇・二九 舊九・二九 外山豐二録)

第一章 狸たぬきの土舟つちぶね〔六一〕

ここに高虎姫たかとらひめの偽名ぎめいなる國照姫くにてるひめは、常世國とこよのくにに時めきわたる常世姫とこよひめを動うごかして自分の目的じぶん もくてきを達たつせ
むとした。この常世姫とこよひめは稚櫻姫命わかざくらひめのみことの第三女だいさんぢよにして、もつとも野心やしんの強い神司つよ かみであつた。國照姫くにてるひめは

りゆうぐうじやう　ちようしんことたまわけのみこと　ことたまひめ　はいじよ
龍宮城の寵神言靈別命、言靈姫を排除し、みづから代つてその地位に立たむとしてゐたのであ
る。ここに國照姫は偽の美山彦とともに常世國にいたり常世姫の意を迎へ、もつて龍宮城に歸還
せしめむとした。しかるに彼らは、天使大八洲彦命、言靈別命にその大敵たることを悟られを
をもつて、自分の部下なる魔我彦、魔我姫とともに母神に會見し、その目的を達すべく常世姫を
教唆した。

とこよひめ　ひさ　まがひこ　まがひめ　あまた　かみがみ　おく　ぶじ　りゆうぐうじやう　きくわん
常世姫は久しぶりにて魔我彦、魔我姫をともし數多の神司に送られて無事に龍宮城に歸還
せむと、黄金橋の袂にさしかかりしとき、神威にうたれて容易に橋を渡ることができなかつた。
とこよひめ　こがねばし　たもと　しんあ　ようい　はし　わた
常世姫はやむをえず信書を認め鳥の足に縛りつけ、黄金橋畔まで歸りきたりしことを
稚櫻姫命に奏上した。稚櫻姫命は從臣に命じ、新しき黄金の船を出してこれを迎へしめられ
た。常世姫は何の障もなく龍宮城に到着し、種々の珍らしきものを八足の机代に盛足らはして、
これを命に奉つた。命は久しぶりの親子の對面を非常によろこばれ海山の話に夜を徹し、

とこよひめ とこよのくに じじやう くは の たさかれたのである。その翌日、ただちに數多の神司を集め歡迎の宴をはつた。神司は先を爭ふて宴席に現はれ無事の對面を祝した。

とこよひめ わかさくらひめのみこと いちど がは こがね ふね うか かみがみ ふなあそ さて常世姫は、稚櫻姫命にむかひ、一度ヨルダン河に黄金の船を浮べ、神司とともに船遊びせむことを希望した。稚櫻姫命は直ちにその請を容れ、諸神司に命じ、その準備に着手せしめられた。

ごちそう がは ふなあそ をしへ ふね 御馳走にヨルダン河の舟遊び教の舟にヨルものは無し

こんにち がは かははば ひろ なが きよ にご しんかい 今日のヨルダン河は河幅もあまり廣からず、流れもまた清からず、濁りをおびをれど、神界にみ見たるヨルダン河は水清く流れも緩やかにして、廣きこと揚子江のやうである。これは神界に

おけるヨルダン河の光景である。黄金の船は幾艘となく準備された。上流には、かの金色燦然たる黄金の大橋が、太鼓を並べたやうにその影水に映り、實に莊嚴を極めてをる。常世姫を主賓として周圍に數多の船をならべ、珍酒佳肴に酔ひて諸神司は交るがはる面白き歌舞音楽を奏し、實に賑はしき底抜け騒ぎの大散財であつた。

そこぬけのさわぎに舟の底いため

この時、龍宮城の神司は大部分出遊し、猫も杓子もみな船遊びに耽つた。言靈別命は何となく心に不安を感じ、船遊びの列に加はらなかつた。その時稚櫻姫命は色を作し、

『汝は常世姫の久しぶりに歸城せるを喜ばざる面持あり』

と不満の意を表はされた。折しも常世姫の使なりとて魔我彦は禮をつくし言靈別命を迎へにき

た。言靈別命は否むに由なく齋代彦、齋代姫とともに船遊びの列に加はることとなつた。あまたの神司は命の河畔に現はれしを見て大いによろこび、手を拍つて喝采した。この時魔我彦は新しき黄金の船に搭乗を勧めた。命は蟲が知らすか何となくこの船に乗ることを否む色があつた。ふたたび魔我彦はしきりに搭乗を勧めてやまぬが、他の船には神司満乗してすこしも空席がない。已むをえずしてこれに乗り中流に棹さしてすすんだ。魔我彦は常世姫の乗れる大船の側近く寄るとみるや、この船を捨てて常世姫の用船に飛び入つた。言靈別命を乗せた船は、表面堅固に見えてその實はもろき狸の土船であつた。土製の船に金箔を塗りたる偽船である。たちまち船は崩壊沈没した。言靈別命は水に溺れ深みに沈まむとして九死一生の態である。神司はアレヨアレヨと聲を放つて叫ぶばかりである。この時齋代彦は水練に妙を得たるをもつて、からうじて岸に泳ぎついた。

齋代姫は身を犠牲として激浪の中に飛び入り、言靈別命の頭髮を握り、流れ渡りに此方の岸に

ついた。くにてるひめ ぼうけい まった やぶここに國照姫の謀計は全く破れた。

とこよひめ ふなあそ常世姫は船遊びをへ、しよしん とも りゆうぐうじやう きくわん諸神司と共に龍宮城に歸還し、

ときよひめ をつと ときよひこ め ことたまわけのみこと いのち『齋代姫は夫の齋代彦に目もくれず、言靈別命を命をかけて救ひたる義侠と勇氣は感ずるにあ

いつばう かんが とき あや ふしまりあれども、また一方より考ふる時は、まことに怪しき節あり』

ことたまひめ わかさくらひめのみこと しゆじゆ ことば まう ぶこくと言靈姫および稚櫻姫命に種々の言葉を設けて誣告した。

した つるぎきりまくる舌の劍のおそろしさ

ことたまわけのみこと わかさくらひめのみこと だい ぎわく う つまがみ しんこれより言靈別命は稚櫻姫命の大なる疑惑を受けた。されど妻神はこれを信じなかつた。そ

わかざくらひめのみこと とこよひめ ことたまわけのみこと ことたまひめ あひだ おもしろ かき きづれより稚櫻姫命、常世姫と、言靈別命、言靈姫の間に面白からぬたかき垣が築かれた。

(大正一〇・一〇・二九 舊九・二九 加藤明子録)

第二章 醜女の活躍〔六二〕

常世姫は稚櫻姫命の厚き信任を得、城内の諸神司を種々様々の方法をもつて吾に信賴せしめ、
聲望竝ぶものなく、つひに龍宮城内の花と謳はるるにいたつた。ゆるゑに常世姫の一言一行は
諸神司を支配し、その威望と信徳は四方に喧傳さるることとなつた。

これに反し言靈別命、言靈姫、齋代彦、齋代姫の威信は、邪神の讒言のために今は全く地に墜
ちてしまつた。常世姫は魔我彦、魔我姫に陰謀の眞意を含め、ひそかに美山彦、國照姫に對して
一切の祕密の打ち合せをなし、漸をもつて龍宮城の主たらむとし、畫策これ日も足らぬ有様で
あつた。

常世姫のために最も妨害となるべき目の上の瘤は、言靈別命以下の神司である。ここに魔我彦

と魔我姫まがひめは藤姫ふぢひめ、八百姫やほひめの醜女しこめをして、言靈別命ことたまわけのみことを魔道まどうにおとしいれむとした。（醜女とは色情

をもつて敵てきを墮落だらくせしめむとする心の醜惡しうあくなる女性をんなのことである）

ある時とき、言靈別命ことたまわけのみことは風邪ふうじゃに罹り、病床びやうしやうに呻吟しんぎんしてゐた。藤姫の醜女しこめは甘言かんげんをもつて近く傍ちかに侍し、看護かんごに務めながら身に盛装せいさうを凝らし、命の心を動かさむとした。命は藤姫の醜女しこめたるこ

とを夢ゆめにも知らず、病やまひの床とこを立ち出で廁かはやに入らむとせし時、藤姫は手をとつて命を支へつつ廁かはやに送つた。命は廁みことより出で眩暈げんうん、危あやふく地に倒れむとし、前後も知らず藤姫の肩かたにもたれかかつ

た。藤姫は甲ふぢひめだかき聲こゑをあげて救すくひを求めた。一間ひとまにあつてこの様子を聞きあたりし魔我彦まがひこは、

その場ばに現あらはれ、

『言靈別命ことたまわけのみことは藤姫ふぢひめを後うしろより抱だきしめたり。かならず汚きたなき心こころあらむ』

とただちに走はしつて、常世姫とこよひめに尾をに鰭ひれをつけ仰山ぎやうざんらしく報告はうこくした。常世姫は烈火れつくわのごとく憤いきどほり、藤姫ふぢひめを招まねき委細あさいを厳きびしく訊問じんもんした。藤姫は涙なみだながらに、

『吾は今日まで何事も包みみたりしが、今や現状を見届けられて何の辭もなし。實は命のために常に脅迫され、夫ある身の不倫とは知りつつも、今まで命の命に盲從せしは、全く吾が重ねがさねの罪なり』

と聲を放つて泣く。常世姫はえたりと喜び、心中ひそかに小躍りしながら、表面はどこまでも物憂げに稚櫻姫命の御前に出でて、言靈別命の不倫の行爲を針小棒大に報告した。これを聞かれし稚櫻姫命はおほいに怒らせたまひ、諸神司を集めてその顛末を語り、言靈別命を神退ひに退はむとしたまうた。言靈姫は泣いてその無實を證明し、佐倉姫もまた走せきたつて、その無實を涙とともに證言した。稚櫻姫命は二柱の女神の證言により、言靈別命の處罪を赦し給ふた。しかし疑雲は容易に晴れないばかりでなく、常世姫の誣言はますます甚だしく、つひには諸々の神司まで、言靈別命の眞意、行動を疑ひはじめ、たがひに耳に口を寄せては囁きあひ、命の惡評は城内はおろか四方の國々までも、油の滲むがごとく廣まつていった。

ここに言靈別命は憂悶やるかたなく、ただ一柱神苑を逍遙しをられしとき、松の小蔭に女の叫び聲が聞えた。命は何事ならむと急ぎ聲する方へ走りゆく。大空の月は黒雲に包まれ光も薄く星影一つ見えぬ朧月夜であつた。フト見れば八百姫が地上に倒れて七轉八倒してゐた。命は女の苦悶する様を見て、そのままそこを立去るに忍びず、いかにもしてその苦痛を救ひ助けむものと、八百姫の手を取り助け起さむとした。八百姫は悲しき聲を放つて助けを叫んだ。たちまち松の小蔭より邪神魔我彦が勿然として現はれ、

『狼藉者見届けたり』

と燈火を點じて、言靈別命が八百姫の手を取り脇に抱へたその一刹那を捉へて、不倫の行爲と罵り、無理に引き立てて常世姫の前に突き出した。常世姫は謀計の圖にあたりしを喜びながら何喰はぬ顔にて、言靈別命、八百姫を前におき、厳しく事實の審問をはじめた。ここに言靈別命は答ふるに、事實の真相を委細に述べた。されど魔我彦は首を左右にふり、

『否々、吾はたしかなる證據を握る。命は八百姫を手込めになし、既に非を遂げむとせり、委細は八百姫に問はせたまへ』

と氣色ばみて誣言した。八百姫は同じ穴の狐である。魔我彦の言ふところを事實なりと強辨し、かつ涙を流して、

『吾は今まで幾度となく命のために辱められたり。今日かぎり吾に暇をたまへ』
と、しきりに嘆願した。

城内の諸神司は集まり來りて、あゝ言靈別命はかかる不倫の神人に非ざりしに、いかなる邪靈の魅入りしやと、命の前途を悲しんだ。常世姫は魔我彦、八百姫をともし奥殿に進みて稚櫻姫命に謁し、事實を曲げて言靈別命の日夜の悪行を針小棒大に進言した。稚櫻姫命はおほいに憂ひたまひ、諸神司を集めて協議の結果、命を蜂の室屋に投げ入れたまうた。

あゝ、言靈別命の運命や如何。

(大正一〇・一〇・二九 舊九・二九 櫻井重雄録)

第一三章 蜂の室屋〔六三〕

言靈別命は常世姫一派の奸計におちいり、蜂の室屋に投げ込まれ、熊蜂、雀蜂、足長蜂、土蜂の悪靈どもは、晝夜の區別なく襲ひきたりて、尻尖の劍をもつて刺し迫る。

言靈姫は、黄金龍姫の靈魂に感じ、蜂の領巾を作りて夜ひそかに室屋の内に差入れた。言靈別命はその領巾を持ちて八方より攻めきたる悪蜂を拂ひ退けた。されど數萬の悪蜂は隙をねらうて、室屋の外に群がり集まり、少しの油斷あれば直ちに入りて、これを刺さむとするがゆゑに、少しも眠ることはできなかつた。ここに田依彦、中裂彦は小島別を誑かし、三柱は、共に室屋の外にきたつて命が不倫の行跡を詰り、かつ改心を迫つた。しかして改心の意を表するため、蜂の

領巾を吾らに渡せと脅迫した。

命はその無實を細々と辨じた。されど三柱はこれを信ぜず、つひには辭を荒らげ顔色を紅く

して、罵詈雑言を頻發し侮辱した。命は無念やるかたなくただ首を垂れて、悲憤の涙を押さへ

つつあつた。このとき常世姫室屋の前に現はれ、命にむかつて言葉きたなく雑言を竝べ、かつ速

かに改心の情を表はし、職を去り常世の國に落ちゆくべしと宣言した。言靈別命は天にむかひ、

……正邪理非曲直を明らかにしたまへ、もしわれに邪あれば、わが生命を斷ち、常世姫に邪あ

れば今この場において常世姫を罰し、もつてわが疑ひを晴らしたまへ……と祈願をこめた。この

時いづくともなく神の御聲命の耳に入つた。神の御聲のまにまに蜂の領巾を常世姫にむかつて

打振つた。常世姫の身體はにはかに動搖をはじめ、惡寒惡熱を感じ、その場に轉倒し苦悶をはじ

めた。

ここに小島別、田依彦、中裂彦は驚いて常世姫を籠に乗せ、擔いで稚櫻姫命の御前にいたり、

こと てんまつ はうこく とこよひめ びやうせいこくこく つの うち あわ ふ くろち は くもん
事の顛末を報告した。常世姫は病勢刻々に募り、口より泡を吹きつひには黒血を吐いて苦悶しだ
した。稚櫻姫命はこれを見て言靈別命の復讐的悪行となし、大いに怒つて大神に賞罰を明らか
にされむことを祈願された。

ことたまひめ ゆくわいげ びせう も かみがみ らうばい ばうかん わかざくらひめのみこと い か
このとき言靈姫は愉快氣に微笑を漏らし、神司の狼狽するを傍觀してゐた。稚櫻姫命以下の
神司は、大宮の前に額きて祝詞を奉上し、病氣平癒の祈願を凝らし、五日五夜に及んだ。され
ど連夜の祈願も寸效無く、常世姫の生命は瀕死の状態に立ちいたつた。

わかざくらひめのみこと けしき か はち むろや まへ た ことたまわけのみこと
ここに稚櫻姫命は氣色を變へ、みづから蜂の室屋の前に立ち、言靈別命にむかつて、
『常世姫の苦しみは汝が怨靈の祟りならむ。すみやかに前非を悔いて、かれが病を癒やし天地の
神に謝せよ』

ことばおごそ げん もち そらふ かぜ き なが てんち
と言葉嚴かにきめつけられた。されど言靈別命はその言を用ゐず、空吹く風と聞き流してゐた。
折しも常世姫の居室に當つて、大なる叫び聲がおこつた。諸神司は周章狼狽しながら、その居室

に集まつた。そのとき既に常世姫は身體冷え渡りて【こと】切れてゐた。ここに稚櫻姫命は神慮を疑ひ、ただちに國治立命に正否を奉伺された。

國治立命は言葉おごそかに宣りたまふやう、

『邪は正に勝たず、神は善を助け邪を罰す。邪は常世姫にあり。言靈別命は正しき神人なり。汝すみやかに小島別をして言靈別命の前にいたり、謝罪せしめよ』

との神勅であつた。小島別は正邪の判別に迷ひ、心は五里霧中に彷徨しつゝ大神の命を拒むに由なく、つひに我を折りて言靈別命、言靈姫に前の誤解と無禮を陳謝した。命は答へて、

『正邪の判別したる上は、われ何をか恨まむ』

とて直ちに天に向つて謝罪したまふと同時に、常世姫はたちまち蘇生した。

ここに稚櫻姫命以下の諸神司は、常世姫に向つて謝罪せむことを勧めた。されど頑強なる常世姫はこれを拒み、ふたたび苦悶をはじめ、口から泡を吹き血を吐くこと前の通りである。

さすがの常世姫もつひに我を折り、生々に室屋の前^{まへ}にきたりて叩頭陳謝^{こうとうちんしや}した。命^{みこと}の怒りは忽ち^{たちま}と解^とけて常世姫の病^{やまひ}は全快^{ぜんくわい}した。ここに言靈別命^{ことたまわけのみこと}は諸神司^{しよしん}の進言^{しんげん}により、室屋の中より救ひ出され、ふたたび元の聖職^{せいしよく}に就^つかれた。

常世姫はこの事件^{じけん}のために龍宮城^{りゆうぐうじやう}を退^やはれ、つひに常世國^{とこよのくに}に遁^にげ歸^{かへ}つた。されど常世姫の惡意^{とこよひめあくい}は容易^{ようい}に改^{あらた}まらず、執拗^{しつえう}にも種々の畫策^{しゆじゆくわくさく}をめぐらし、はるかに常世國^{とこよのくに}より醜女^{しこめ}を放ちて、ふたたび言靈別命夫妻^{ことたまわけのみことふさい}を陷^{おとし}れむと、畫策^{くわくさく}これ日も足らぬ有様^{ありさま}であつた。

(大正一〇・一〇・三〇 舊九・三〇 外山豐二録)

第三篇 神戰の經過^{しんせんけいぐわ}

第一四章 水星の精〔六四〕

ここに田依彦、中裂彦は麗しき庭園を造り、稚櫻姫命を慰め奉らむとし、ヨルダン河の上流にあまたの神々を引きつれ、千引の岩をとり、廣き石庭を造らむとした。稚櫻姫命にはかに身體に大瘰癧を發し、劇烈なる腹痛に悩まされたまうた。諸神司は驚き集まりて、あるひは天に祈り、あるひは藥を獻じ、百方手を盡せども、何の效をも奏せなかつた。このとき小島別言靈別命の前に出で、命の重病に罹り給ひし原因につきて神界に奉伺し裁斷を請ひ、神示を得むことを依頼した。言靈別命は大いに驚き、ただちに神言を奏上し神示を請ひ奉つた。天津神の神示によれば、

『ヨルダン河の上流に、水星の精より出でたる長方形にして茶褐色を帶べる烏帽子型の靈石あり、

これを掘りだし持ち歸り、汚れたる地上に奉置し、その上にあまたの岩石を積みたり。水星の靈
苦しみにたへず、これを諸神司に知らさむがために稚櫻姫命に病を發せしめ、もつて警告せる
なり。すみやかに種々の巖岩を取り除きて、その靈石を黄金水にて洗ひ清め、宮を作りてこれを
鎮祭せば、命の病はたちまち恢復せむ。しかしてこれを掘り出したるは中裂彦にして、これを汚
したるもまた同神司なり。田依彦以下の神司も共に、水星の崇りを受くべきはずなれども、その
責任は主神たる稚櫻姫命に負はせたまへるなり。されば諸神司は慎みて水星の神に陳謝し恭
しくこれを祭れ』

との神示であつた。

小島別はこれを聞きて大いに恐れ慎みてその命のごとく取計らつた。不思議なるかな
稚櫻姫命の病苦は、靈石を洗ひ清めて恭しく神殿に祭るとともに拭ふがごとく癒えたのであ
る。

ヨルダン河がは じやうりうの上流に、この水星すゐせいの精なる烏帽子型せいの靈石えぼしがた れいせきありしたため、河廣く水深く、清鮮かはひろ みづふか せいせんの泉いづみゆるやかに流れて、あたかも水晶すゐしやうの如くなりしを、この靈石れいせきを掘り出してより、山上さんじやうよりは土砂どしやを流し河を埋め、濁水の流れと變化へんくわしてしまつた。そして中裂彦なかさきひこはここに心狂こころくるひてヨルダン河がはに身を投じ、その靈れいは惡蛇あくじやと變じ、流れて死海しかいに入り、變じて邪鬼へん じやきとなつた。水星すゐせいの精せいを祭りたる水の宮みやは、言靈別命ことたまわけのみこと特に齋主さいしゆとして日夜奉仕にちやほうしさるることとなつた。

一時靈石を祭りて恢復し給ひし稚櫻姫命いちじれいせき まつ ぐわいふく たま わかざくらひめのみことは、その後健康勝れたまはず、時々病床ときどきびやうしやうに臥したまふことがあつた。茲ここに常世姫とこよひめは信書しんしよを認め、熊鷹くまたかの足に結びこれを放ち、眞道知彦まみちしるひこに何事かを報告はうこくした。眞道知彦は稚櫻姫命まみちしるひこ わかざくらひめのみことの長男であつた。この信書しんしよを見てたちまち顔色かほいろを變じ、怒髮天どはつてんを衝つき龍宮城りゆうぐうじやうに參入さんにふし、神國別命かみくにわけのみこと、花森彦はなもりひこ、眞鐵彦まがねひこ、小島別こじまわけその他の神司かみがみを集めて、何事か凝議ぎようぎしたのである。そしてその結果は、稚櫻姫命わかざくらひめのみことに進言しんげんされた。稚櫻姫命はこれを聞ききて大いに怒おほり、言靈別命ことたまわけのみことにむかひ、

『汝は水星の靈石を祭りもつて吾を苦しめ、或ひは呪咀し、つひに取つて代らむとの野心ありと聞く、實に汝の心情疑ふにあまりあり。もし汝にして誠意あり、吾が疑ひを晴らさむとせば、すみやかに水星の宮を毀ち、その神體なる靈石を大地に抛ち、これを碎きて誠意を示せ』と嚴しく迫られたのである。あまたの從神は集まり來りて、異口同音に宮を毀ちて、神體を打ち碎けと迫るのであつた。

言靈別命は衆寡敵せず、涙を呑んで天に訴へ、靈石に謝し、恭しく頭上に奉戴し、ついで麗しき芝生の上に擲げつけた。敬神に厚き言靈別命は、このとき熱鐵を呑む心地をせられたであらう。たちまち靈石より旋風吹きおこり、その風玉は高殿に立てる稚櫻姫命にあたり、高樓より地上に吹き飛ばされ、腰骨を挫き身體の自由を失ひ、非常に苦悶したまうた。諸神司は群がりきたりて命を介抱し、奥殿に擔ぎ入れ、心力をつくして看護に餘念なかつた。稚櫻姫命は久しうしてやや恢復され、神務に差支なきにいたられた。されど遂に不具となり、歩行に苦痛を感じた

まふに立ちいたつた。

言靈別命は庭園の八重梅の枝を切り、御杖を作りてこれを奉つた。これが老衰者の杖を用ふる濫觴である。ここに言靈別命は神威を恐れ千引の巖を切り、うるはしき石造の宮を造り、月讀命の從神として、靈石を永遠に鎮祭し置かれた。

(大正一〇・一〇・三〇 舊九・三〇 加藤明子録)

第一章 山幸〔六五〕

言靈別命の弟に元照彦という放縦な神司があつた。この神司は、言靈別命が神業に従事して神界を思ふのあまり、親兄弟を顧みざるのを憤慨してゐた。

ふるさとの空打ちながめ思ふかな國にのこせし母はいかにと

もとてるひこ やまさち この あめ かぐやま まがね もろもろ ぶき つく
元照彦は山幸を好み、天の香具山の鐵をもつて諸々の武器を作り、あまたの征矢を製して

おほだいがはら た おほがいをがい くま しか しし うさぎ う
大臺ヶ原に立てこもり、大峽小峽にすむ熊、鹿、猪、兔などを打ちとり無上の快樂としてゐた。

いぶきひこ ともがみ つね もとてるひこ ばいじゆう やまさち たす
さうして伊吹彦といふ供神は常に元照彦に陪従し、山幸を助けてゐた。

いぶきやま た じせつ うかが たけくまわけ ぶか やそくま あしくま くまえひめ
ここに伊吹山に立てこもり時節を窺ひゐたる武熊別の部下、八十熊、足熊、熊江姫、その他多

まがみ おほだいがはらやま い はなばな やまさち こころ しうじつほんそう
くの魔神も大臺ヶ原山にわけ入り、花々しく山幸を試むれども、終日奔走してただの一頭の獲物

もとてるひこ じゆくれん けいけん だいせう てうじう ひとつ のこ かり あと
もなかつた。そのわけは元照彦が熟練せる經驗により大小の鳥獸を一つも残らず狩とつた後ばか

すす やそくまい か はうこう てん やま こ ふたた やまさち こころ
りを進んだからである。八十熊以下は方向を轉じて山を越え、再び山幸を試みた。そこには

いぶきひこ そや さか やまさち やそくまい か もの いぶきひこ しゆじゆ たから あた
伊吹彦がゐて征矢をもつて盛んに山幸をしてゐた。八十熊以下の者は伊吹彦に種々の寶を與へて、

くわんしん か いぶきひこ もとてるひこ そむ そや もとてるひこ ころ
しきりにその歡心を買ひ、つひに伊吹彦をして元照彦に背き、かつ征矢をもつて元照彦を殺さし

めむと計つた。伊吹彦は八十熊らの欲に誘はれ、つひに八十熊の味方となつてしまつた。

元照彦は伊吹彦の變心せしことを知らず、常のごとく相伴なつて日の出ヶ山に登り、群がる猪

にむかつて征矢を射らしめた。伊吹彦はその猪にむかつて矢を射るがごとく装ひ、たちまち體を

翻して元照彦目がけてしきりに射かけた。元照彦は驚いて八尋まはりの大杉の蔭にかくれ、

征矢を防がむとした。この時、八十熊らの魔軍八方より現はれ來りて、さかんに征矢を射かけた。

元照彦は進退これ谷まり、身に十數創を負ひその場に仆れた。

言靈別命は龍宮城にあり、弟の危難を知りて直ちに天の鳥船に乗り、大臺ヶ原に驅り進ん

だ。ただちに伊吹彦、八十熊以下の魔軍にむかひ種々の領巾を打ち振れば、魔軍は黒雲をおこし、

武熊別の隠れたる伊吹山さして雲を霞と逃げ去つた。

元照彦は重傷を負ひ、つひに病の床に臥し、生命危篤の状態におちいつた。このとき母神の

國世姫は、

『汝平素の放縱なる心を立替へ、深く神を信じ、兄弟と共に神業に参加せば、大神の恵によりて汝が病はたちどころに癒えむ』

と懇に涙とともに諭された。

ここにはじめて元照彦は敬神の至誠をおこし、数月の間、苦痛を忍びつつ天地の大神を祈り、つひに病床を離れ全く悔改めて、山幸の快樂を捨てて苦しき神業に参加し、言靈別命の蔭身に添ひて、神教を天の下四方の國々に宣傳し偉功をあらはした。

邪神伊吹彦は八十熊と共に一時は伊吹山に逃れ去り、やつと息繼ぐ暇もなく、どこともなく飛びくる白羽の征矢に當り、山上より轉落して終焉を告げ、伊吹山の邪鬼となつた。

(大正一〇・一〇・三〇 舊九・三〇 櫻井重雄録)

第一六章 梟の宵企み〔六六〕

ここに言靈別命は、疑惑まつたく晴れて蜂の室屋を再び出で、神業に奉仕せられた。されど疑惑の念深き稚櫻姫命は、言靈別命の心中に野望を抱けるものと、日夜疑心を抱いてをられたのである。かてて加へて小島別、田依彦の一派は心中穩かならず、命の神務にたいし、いちいち反對的態度を持し種々の妨害を加へ、かつ非難を放つて止まなかつた。神國別命以下の神司も、小島別の言に賛同して、つひに言靈別命を排斥せむとするに立いたつた。

うたがひの黒雲おほふも何かせむ天津日さへも曇る世なれば

されば言靈別命は、天使大八洲彦命、眞澄姫とはかりたまひ、天道別命、天真道彦命とともに

いちじりゆうぐうじやう たちの
に一時龍宮城を立退き、ローマの都に下りて、國魂の神花園彦の御舎に潛み、時の到るを待ち
たまふこととなつた。このとき八島彦、元照彦、正照彦らの諸神司は、共にローマの都に集まり、
あまぢわけのみこと あめのまみちひこのみこと をしへ しはう せんでん せいばうてんか
天道別命、天真道彦命の教を四方に宣傳し、聲望天下にふるひ、驍名つひに龍宮城にまで高く
達した。

わかざくらひめのみこと おほ おどろ こじまわけ たよりひこ やすかはひこ た もろもろ かみ
稚櫻姫命は大いに驚きたまひ、小島別、田依彦、安川彦、その他の諸々の神司をして、
ことたまわけのみこと みぶつ がは きし もちだ はつぼう ひ
言靈別命の遺物をヨルダン川の岸に持出さしめ、八方より火をかけてこれを焼燼せしめたまうた。

さるほどに、言靈別命はモスコの都に出で、諸神司を集めて、天津神の宣旨を宣べ傳へた。

とき はなぞのひこ きふし こじまわけ たよりひこ やすかはひこ あまつかみ みのり の つた
この時、ローマなる花園彦の急使として、小島別、田依彦、安川彦はあまたの者と共に出できた
り、片時もはやく還りたまへと報告した。

ことたまわけのみこと やしまひこ かへ はなぞのひこ しんでん たうちやく ま
言靈別命は八島彦をともしなひローマに歸り、花園彦の神殿に到着した。待ちくたびれたる
こじまわけ いつかう ことたまわけのみこと みあらか い みぎ ただ かたち
小島別の一行は、言靈別命の御殿に入り、威儀を正し、容をあらため、

われ わかざくらひめのみこと

おゆうだい

にんむ

お

くだ

しんし

なんぢ

いま

ち

『吾は稚櫻姫命より重大なる任務を帯びてはるばる下りきたれる神使なり。汝は今この地にあ

もろもろ

かみたち

あつ

せいりよくひ

くは

き

おも

ごじつち

たかあまはら

せんりやう

はけん

にぎ

りて諸々の神司等を集め勢力日に加ふと聞く。思ふに後日地の高天原を占領し霸權を握らむとす

しよぞん

なんぢ

みこと

めい

したが

ところ

す

りゆうぐうじやう

きくわん

みこと

めい

くひあらた

るの所存ならむ。汝は命の命に従ひ、この所を捨てて龍宮城に歸還し、命の命のまにまに悔改

しんげふ

したが

まんいち

こば

われ

かくご

めて神業に従ひまつるか、萬一これを拒むにおいては吾に覺悟あり』

つむがりのたち

つか

て

さんぼう

へんたふ

つ

ことたまわけのみこと

こじまわけ

と都牟刈太刀の柄に手をかけ、三方より返答きかむと詰めよつた。言靈別命は小島別らの

そんだいふそん

たいど

こじまわけ

はなたか

かた

ゆす

せつしやう

すがた

をか

尊大不遜なる態度にあきれながら、小島別の鼻高く肩を揺りて折衝する姿の可笑しさにたへず、

はうふくぜつたう

抱腹絶倒した。

こじまわけ

おほ

いか

まつか

小島別は大いに怒り、眞赤になつて、

なんぢおほかみ

しんし

ぐろう

『汝大神の神使を愚弄するや。このままには捨ておかじ。覺悟をせよ』

さんぼう

かたな

ぬ

と三方より刀を抜きはなちて切りかけた。

歎なげきつつかい眼めをむく猿芝居ざるしばゐ

こしたまわけのみこと いっは
言靈別命は偽つてこの場ばをのがれ、後日ごじつの備へそなをなさむとし、降伏かうふくの意味いみの神文しんもんをしたため、
こじまわけ わた
小島別に渡し、

きか いま すみ
『貴下は今より速やかに龍宮城りゆうぐうじやうに歸かへらせたまへ。吾われは神軍しんぐんを解散かいさんしすべての後始末あとしまつをなし、後あとより歸參きさんすべし』

てい たふべん
と體よく答辨した。

こじまわけ とくいまんめん
小島別は得意満面にあふれ、勝ち誇ほこつたる面持おももちにて、あたかも鬼おにの首くびを竹籠たけべらにて切りとりしごとく、意氣傲然いきごうぜんとして、他の三神司さんしんとともに數多あまたの部下ぶかを引連れ、龍宮城りゆうぐうじやうに歸還きくわんした。

さんしん かた かぜ き てがらがほ わかざくらひめのみこと みまへ い
三神司は肩かたにて風かぜを切りつつ、手柄てがら顔がほに稚櫻姫命わかざくらひめのみことの御前みまへに出で、

おほかみ ごしんゐ だいしようり え
『このたびは大神の御神威ごしんゐにより大勝利を得たり。やがて言靈別命こしたまわけのみことは悄然せうぜんとして、後あとより還かへり來きた

るべし。その詫状は今ここにあり』

と鼻高々と得意氣にその封書を命に奉まつた。稚櫻姫命は大いに喜びたまひ、披き見れば

こはそもいかに、言靈別命は龍宮城に斷じて歸還せず、稚櫻姫命はまず御心を改められて、

嫉妬心を去り、冷靜に復り、赤心より悔い、もつて一切の誤解を拂拭し、常世姫、小島別、魔我彦、

魔我姫その他の神司をそれぞれ處罰し、もつて吾意のごとく改革の實をあげたまふならむには、

喜びて歸城すべし。萬一この語に御違背あらば、吾らはますますローマの都に根據を固め、こ

こに天津神の命を奉じて、新に地の高天原を開き、龍宮城を建設し、もつて貴神に對抗し奉り、

花々しく雌雄を決し申さむ、との極めて強硬なる信書であつた。

稚櫻姫命は顔色にはかにかはり、聲もいとあららかに信書を引破りて握りかため、小島別の

面上目がけて投げつけ、雉子の直使なり、と神使の不明不覺を詰りたまふた。

小島別以下の神司は案に相違し、あたかも梟の夜食に外れしごとく、頭をかいて小隅に引き

さがり、こんご 今後の身みの進退しんたいにつき苦心くしんしてゐた。

ここに稚櫻姫命わかざくらひめのみことは大いおほに憤りいきどほたまひ、小島別こじまわけ、田依彦たよりひこ、安川彦やすかはひこをしてあまた數多しんぐんの神軍いんそつを引率せ

しめ、言靈別命ことたまわけのみことを討ち惱なやましたまふことになるのである。言靈別命ことたまわけのみことは已むやをえず、花園彦はなぞのひこ、元照彦もとてるひこ、
正照彦まさてるひこ、八島彦やしまひこをして、これが防備ぼうびに當あたらしめた。

(大正一〇・一〇・三〇 舊九・三〇 谷口正治録)

第一七章 さがひめ 佐賀姫ぎしの義死〔六七〕

言靈別命ことたまわけのみことは素もとより稚櫻姫命わかざくらひめのみことに反抗はんかうするの心こころは毛頭まうとうなかつたのである。されど命みこと以下いかの神司かみがみ
にたいし、反正撥亂はんせいはいちらんの目的もくてきをもつて故意こいに反抗はんかう的信書しんしよを認め、使臣ししん小島別こじまわけに渡わたした。

玉の緒のいのちも如何で惜むべきすてて誠の道を照らさば

稚櫻姫命は、言靈別命の心情および行動につき、半信半疑の雲に包まれ給ひし折柄なれば、その信書を見て、本心より反旗を翻せるものとなし、ここに天使大八洲彦命に命じて、言靈別命討伐の令を下された。このとき大八洲彦命は疾と稱して出でず、固く戸をとざして差こもり、諸神司との交通を絶ち、正邪黑白の判明する時機を待たれた。

稚櫻姫命は已むをえず、代つて小島別に叛神討伐の命を下された。小島別は直ちに命を拜し、田依彦、安川彦を部將とし、あまたの神軍を督して叛軍を悩まさむと全力を盡した。ここに言靈別命は、一方小島別の神軍に諸方より攻撃され、一方よりは常世姫の部下美山彦、國照姫の魔軍より攻撃され、非常なる苦境におちいつた。

言靈別命はローマに根據をかまへ、花園彦、大島彦をして神軍を督せしめ、正照彦、溝川彦を

してモスコの神軍を督せしめおき、自らは元照彦とともに姿を變じ、小島別、常世姫の兩軍の情勢を探りつつ、神出鬼没の神策を講じた。さても言靈別命は、ボムバー山に陣せる佐賀彦のもとに到り、この度の戦闘に参加せしめむとして百方辨をつくして説きつけた。

佐賀彦は元來言靈別命のために身の危難を救はれたる神司であつた。ゆゑに一言の違背もなく命の命に従ふは當然の義務である。しかるに稚櫻姫命は、

『言靈別命野心あり。ローマに據りて神軍に叛旗を翻したり。萬一かれに加擔せば嚴罰に處すべし』

との嚴令は、佐賀彦はじめ一般的に諸神司の許に傳へられてゐた。佐賀彦もその選に漏れず、戦々兢兢として怖れ戦いてゐた際である。また田依彦のすでに來りて神軍の令旨を傳へ、言靈別命來らば伏兵をまうけて、これを滅ぼさむとの準備すでに整ふてゐた際である。

言靈別命はかかる計畫ありとは夢にも知らず、佐賀彦の勸むるままに、奥殿に入りて休息し、

かつ防戦の計畫を命令された。佐賀彦は心すでに言靈別命を離れ、田依彦と款を通じてゐた。

言靈別命の運命は、今や風前の燈火であつた。佐賀彦の妻佐賀姫は、命の立つて庭園を逍遙せ

るをりしも、傍より御前を横切り、懷よりわざと紙片を落し、足早に殿中に姿を隠した。

命は怪しみながら、手早くその紙片を拾ひあげ披きみるに、「田依彦、佐賀彦の謀計により、貴神

の身命は瞬時に迫れり。一時も早く裏門より免れたまへ」との書状である。命はやや思案にく

るる折しも、奥殿に當りて怪しき叫び聲が聞えた。これは佐賀姫が自殺を遂げたのである。恩神

を救へば夫にたいして道立たず、一命を捨てて節を守つたのである。ボムバー山の陣營は、上を

下への大騒ぎであつた。佐賀彦は妻の變死に度を失ひ、狂氣のごとくなりて大聲を發し、神々を

集めてゐた。その聲は言靈別命の耳に透き通るごとく聞えた。

ボムバー山の部將は、残らず佐賀彦の聲する方に集まつた。佐賀彦は周章狼狼のあまり、

言靈別命のあることを忘却するにいたつた。このとき言靈別命は服裝を變じ、神司の周章狼狼

するその間あひだを悠然いうぜんとして表門おもてもんより立出たちいで、門外もんぐわいに出づるや否やいな、待ちかまへたる元照彦もとてるひこと共に、モスコーをさして落おちのびた。

モスコーには正照彦まさてるひこ、溝川彦みぞかはひこが固く守つてゐた。このとき田依彦たよりひこの姉草香姫あねくさかひめは、身を變じてモスコーに入り、正照彦まさてるひこにむかひ言靈別命ことたまわけのみことの急使きふしなりと偽り、面會めんくわいを求め、かつ言靈別命ことたまわけのみことはボムベー山さんにおいて佐賀彦さがひこ、田依彦たよりひこのために窮地に陥り、今や全軍滅亡に瀕せり。正照彦まさてるひこは溝川彦みぞかはひことともに全軍を率ゐて救援に來れとの傳令でんれいなりと傳へた。

正照彦まさてるひこは溝川彦みぞかはひこをしてモスコーを守備せしめ、自ら部下を率ゐてボムベー山さんに急ぎ向ふたのである。モスコーは溝川彦みぞかはひこの神軍しんぐんによく守備されつつあつた。そこへ國照姫くにてるひめの部下種熊彦ぶかたねくまひこは、ローマの花園彦はなぞのひこの急使きふしなりとして面會を求めた。溝川彦みぞかはひこは國照姫くにてるひめの閒者かんじやたることを知らず、花園彦はなぞのひこの急使きふしと信じ面會を許し、かつ使のおもむきも訊ねた。種熊彦たねくまひこはローマの陷落は旦夕に迫り、大島彦おほしまひこは戦死したり。すみやかにモスコーをすて、全軍を率ゐて救援に來るべしとのことであつた。

溝川彦はただちにその言を信じ、モスコーを空虚にし直ちにローマに向うた。ローマの都は

士氣おほいに振ひ、敵の片影だも認めないのが實際である。ボムベール山救援に向ひたる正照彦は

中途にして、言靈別命、元照彦に會し、草香姫のために偽られしことを覺り、取るものも取り

あへず、モスコーの陣營を氣づかひ、急いでボムベール山の攻撃をすててモスコーに歸陣した。

一方溝川彦はローマに到つて實情を知り、全く敵の間に欺かれたるを悔いかつ怒り、これ

またモスコーを危みて急に軍を復した。言靈別命、正照彦、溝川彦らのモスコーに到れる時は、

すでにモスコーは田依彦の手に陥り、草香姫は部將として活躍してゐた。

ここに國照姫の部下種熊彦は、モスコーを占領せむとして溝川彦を欺き、空虚を狙つて一舉に

占領し、數多の魔軍をもつて一齊に攻撃をはじめた。この時モスコーの城塞は田依彦、草香姫の

占領に歸してゐた。ここに田依彦、種熊彦の軍を見て國照姫の魔軍と知らず、言靈別命の一味と

誤認し、死力を盡して戦ふてゐたのである。そこへ正照彦、元照彦は言靈別命を主將とし、種熊彦

の後方より神軍を督して火彈を抛ち、よく戰ふた。種熊彦は雙方に敵を受けつひに戰死を遂げ、全軍ほとんど全滅するにいたつた。それと同時に溝川彦の一軍は側面より田依彦、草香姫の軍を襲ひ、克く戰ふた。

田依彦は種熊彦の滅亡せるを見、龍宮城の味方の援軍のために滅されたるものと信じ、凱歌を奏し萬歳を連呼し、城中は鬨の聲に充ち満ちてゐた。しかるに側面より溝川彦の激烈なる攻撃を開始したるに打ち驚き、その方に向つて全力をそそぎ、言靈別命の神軍にたいする備へを閑却してゐた。

言靈別命は渡りに船と勇みすすみて、田依彦の占領する近くより一齊に火彈を發射した。田依彦、草香姫は、周章狼狽なすところを知らず、黒雲に乘じ、たちまち龍と變じ、狐と化して四方に敗走した。この時の天祐は全く言靈別命の神軍に下つた。

(大正一〇・一〇・三一 舊一〇・一 外山豐二録)

第一章 反間苦肉の策〔六八〕

ここに田依彦、安川彦、草香姫はモスコに敗れ一時四方に遁走し、つひにペテロに陣營を構へ、龍宮城の神軍と相應じてモスコを陷落せしめむと計畫し、神軍をペテロに集めて再舉を謀つてゐた。

ローマはもはや安全なればとて、花園彦の謀將大島彦をしてモスコを守らしめ、言靈別命みづから元照彦、正照彦、溝川彦を督してペテロの魔軍を討伐せむとし、大川彦、戸川彦、高屋彦を各部の將とし、八方よりこれを攻め落さむとした。小島別、田依彦は敵勢の侮りがたきを見て、魔我彦、魔我姫に款を通じ、常世姫を主將として一舉にこれを破碎せむとした。

ここに常世姫はタカ才山に城塞を構へ、あまたの魔軍を集め、ペテロの田依彦と呼應して

ことたまわけのみこと けふげき
言靈別命を挾撃せむとした。小島別、
ことたまわけ ことたまわけのみこと
田依彦一派は卑怯にも魔軍に款を通じ、その應援力をも
つて敵を悩まさむとしたのである。ここに言靈別命はペテロにむかつて進撃せむとす。このとき
いぶきやま に かへ やそくま あしくま くまえひめ いっぱ おほだいがはらやま うらみ はう
伊吹山に逃げ歸りたる八十熊、足熊、熊江姫の一派は、大臺ヶ原山の恨を報ずるはこの時なりと、
とこよひめ まぐん さんか さんぼう ことたまわけのみこと しんぐん せんめつ
常世姫の魔軍に参加し、三方より言靈別命の神軍を殲滅せむとした。神將正照彦、溝川彦は、
おほかはひこ とがはひこ たかやひこ かるがる すす てき はうぬ あ ちからつ まさてるひこ みぞかはひこ てき
大川彦、戸川彦、高屋彦とともに軽々しく進みて敵の包圍に遇ひ、力盡きて正照彦、溝川彦は敵
ほりよ た さんしやうい か せんし と ことたまわけのみこと もとてるひこ いぶきやま
の捕虜となり、他の三將以下は戦死を遂げたのである。さても言靈別命は元照彦をして伊吹山を
こうげき みづか たけひこ ぶしやう さん せま さん とこよひめ た いはくらひこ
攻撃せしめ、自らは武彦を部將としてタカオ山に迫つた。タカオ山には常世姫立てこもり、岩倉彦
ゆうまう まがみぼうしゆ すぎをか えびすひこ やまひこ だんくま ぶしやう ちんき ふる
といふ勇猛の魔神謀主となり、杉岡、夷彦、山彦、團熊を部將として士氣おほいに振ひつつあつ
た。言靈別命は前方より、武彦は後方より、タカオ山めがけて一目散に押し迫つた。この時タカ
さん むか ひそ ことたまわけのみこと ちんえい よこ さん うちもくさん お せま とき
オ山に向はむとして密かに言靈別命の陣營を横ぎるものがある。怪しみこれを捕へ、
なんぢ なに ちんちゆう よこ
『汝は何ゆゑにこの陣中を横ぎりしか』

と厳きびしく訊問じんもんした。ところが之これは國照姫くにてるひめの閒者かんじゃであつた。懷中くわいちゆうせる密書みつしよを開ひらき見れば、

『ローマは既に小島別すで こじまわけの手に落ちたり。もはや後顧こうこの憂うれひなし。貴下きかはタカオ山ざんに押寄おしよする敵てきに

むかつて暫時ざんじこれを支ささへたまへ。吾われは近く援軍えんぐんを出だして言靈別命ことたまわけのみことを後方こうほうより討滅たうめつすべし』

との祕文ひぶんであつた。言靈別命ことたまわけのみことはその眞偽しんぎを疑うたがひ、敵の謀計てき ぼうけいに非ずやと思案しあんにくるる折をりしも、後方こうほう

の陣營ちんえいにある武彦たけひこより、

『ただ今わが軍ぐんにおいて敵の閒者てき かんじゃを捕とらへこれが懷中くわいちゆうを嚴查げんさせしに、かかる祕文ひぶんを所持しよぢしゐたり、

よつてこれを奉たてまつり裁斷さいだんを乞こはむとす』

といふてきた。

曲神まがかみの醜しこのたくみの深ふかくとも言靈別ことたまわけぞふみ破やぶりけり

ことたまわけのみこと あわ
言靈別命は慌ただしくその祕文を開き見るに、

『モスコーは既に味方の手に入らむとす。貴下はタカオ山の陣營を守り、暫時これを支へたまふべし。吾は直ちに進んでタカオ山を應援し、前後より敵を全滅せむ』

との文意が記されてあつた。この間者は國照姫の謀計に出づるものにして、態とこれを捕らへしめた。

ここに言靈別命は武彦以下の諸將を集めて議を凝らし、つひに軍を還した。神軍を二隊に分ちて自らはローマに向ひ、武彦をしてモスコーに向はしめた。岩倉彦以下の部將は言靈別命の退却するを見て後方より火彈を投じた。怯氣だちたる言靈別命の神軍は諸方に散亂した。武彦は身をもつて免れ、伊吹山に迫れる元照彦に急を報じ、モスコー、ローマの危急に迫り、言靈別命の消息もつとも心許なきを傳へた。元照彦は取るものも取敢ず、伊吹山の圍みを解いて直ちにローマに向はむとした。伊吹山の八十熊一派はこの機に乗じ後方より火彈を投じ、元照彦の神軍を打ち惱

ました。元照彦は身をもつて免れた。ローマ及びモスコの危急に迫れりとの密書は、全然國照姫
以下の反間苦肉の策であり、ローマもモスコも依然として金城鐵壁のごとく安全であつた。

(大正一〇・一〇・三一 舊一〇・一 加藤明子録)

第十九章 夢の跡〔六九〕

言靈別命は元照彦、武彦と共に辛うじてローマの都に歸還することをえた。ローマは依然と
して、大島彦に固く守られてゐる。諸神將はおひおひと集まり來り、ともにモスコに籠城し、
持久戦に移らむことを協議した。しかるに敵軍はなほペテロにありて勢侮るべからざる情勢で
ある。諸神將は大舉して龍宮城および地の高天原を占領せむことを密議した。これに先立つて

まづペテロ城を亡^{じやう}ばす必要があつたのである。ローマ本營にては士氣大い^{ほんえい}にあがり、すでに天下^{てんか}無敵^{むてき}の概^{がい}があつた。

しかるに言靈別命は心底より稚櫻姫命に反抗し奉^{ことたまわけのみこと}るの意志なく、ただ單^{わかさくらひめのみこと}にわが神力^{しんりき}を示し、小島別以下の諸神司を覺醒せしめむとの誠意より出たるものなれば、この上徒らに戰鬪を繼續し、彼^{こじまわけいか}我^{しよしん}の諸神司を苦しむるに及ばず、かつ一方には美山彦、國照姫の一派ありて時^{ひが}を窺^くひつつあれ、いたづらに内訌^{ないかう}をおこし、味方の勢力を減ずるは策^{みかた}の得たるものに非^{せいりよく}ず、要^{げん}するに今次^{さく}のわが行動は味方の戰鬪力を養^{えんしふ}ひ、もつて演習を試みたるに過^すぎず、一時も早^{いちじ}く戰^{はや}ををさめ、稚櫻姫命を助け神業に奉仕せむと、ひそかに決心を定めてゐたのである。されど花園彦以下の諸神將^{わかさくらひめのみこと}は、命の眞意^{しんい}を解^{かい}せず、飽^あくまで對抗戰を繼續せむと、勇^{いさ}み猛^{たけ}りつつあつた。

稚櫻姫命は言靈別命の眞意をさと^{わかさくらひめのみこと}り給^{ことたまわけのみこと}はず、あくまで叛旗^{はんき}を翻^{ひるがへ}し野望^{やばう}を達^{たつ}せむとするものと認^{みと}めたまひ、新^{あらた}に眞道彦^{まみちひこ}、神倉彦^{かみくらひこ}、花照彦^{はなてりひこ}を部將^{ぶしやう}とし、ローマに向^{むか}はしめむとし給^{たま}ふたのであ

る。しかして一旦常世の國に追ひかへしたる、常世姫の大功績に愛でこれを赦して、ふたたび龍宮城に歸還せしめたまふた。

常世姫の信任は復活した。元來常世姫は奸佞邪智にして、拔目なき女性なれば、言靈別命の勢力には到底勝つべからざるを悟り、稚櫻姫命に進言して、一時言靈別命を赦し、龍宮城に歸還せしめ、時をはかりてこれを失脚せしめむとの計畫をしてゐた。

稚櫻姫命はここに言靈別命の勢力侮りがたきを看破したまひ、花森彦をローマに遣はし、すみやかに歸順せむことを勧告せられた。花森彦は天磐樟船にあまたの神司を従へ、ローマに到着しひそかに言靈別命に謁し、稚櫻姫命の御意志を傳へた。言靈別命は内心すでに覺悟し、みたる折柄なれば、喜んでその聖旨を受け、直ちにローマ、モスコを捨て龍宮城に歸還し、大命を奉じて犬馬の勞をとらむことを約し、信書を認めて花森彦の手に渡した。

花森彦はただちに諸神司とともに歸城し、言靈別命の心底より歸順せることを報告し、かつそ

の信書を捧呈した。しんしよ　ほうてい

ここに言靈別命は全神軍をあつめ、眞意を傳へ、すみやかに歸城せむことを宣告した。花園彦、ことたまわけのみこと　ぜんしんぐん　しんい　つた　きじやう　はなぞのひこ

元照彦、武彦、大島彦は大いに怒り、その卑怯なる變心を強く詰り、かつ反抗を試み、つひにもとてるひこ　たけひこ　おほしまひこ　おほ　いか　ひけふ　へんしん　つよ　なじ　はんかう　こころ

言靈別命の命に従はず、依然ローマ、モスコを固守せむことを強硬に述べた。命は夜陰ことたまわけのみこと　みこと　したが　いぜん　こしゆ　の　きやうかう　みこと　やいん

ひそかにローマに遁れ、ペテロに向かはれた。ここには稚櫻姫命の神使として杉島彦來り、の　む　わかざくらひめのみこと　しんし　すぎしまひこきた

常世姫の仲裁によりて、言靈別命の歸順せしことを報告せし後であつた。ペテロに捕虜となりとこよひめ　ちゆうさい　ことたまわけのみこと　きじゆん　はうこく　あと　ほりよ

し正照彦、溝川彦は放免された。このとき龍宮城より數多の神使、盛装をこらして禮儀をただまさてるひこ　みぞかはひこ　はうめん　りゆうぐうじやう　あまた　しんし　せいさう　れいぎ

して、言靈別命を出迎へ、命は歡呼のうちに歸城せられた。ことたまわけのみこと　でむか　みこと　くわんこ　きじやう

一旦歸順を拒みたる花園彦以下の諸神將も、言靈別命の深き神慮をやうやく悟り、つひにいったんきじゆん　こぼ　はなぞのひこ　いか　しよしんしやう　ことたまわけのみこと　ふか　しんりよ　さと

言靈別命と行動を共にすることとなり、目出度くこの紛争は終結を告げた。しかしローマにはことたまわけのみこと　かうどう　とも　め　で　た　ふんさう　しうけつ　つ　し　しかしローマには

花園彦、モスコには大島彦が、おのおの歸順してこれを守備してゐた。はなぞのひこ　おほしまひこ　きじゆん　しゆび

(大正一〇・一〇・三一 舊一〇・一 谷口正治録)

第四篇 常世の國

第二〇章 疑問の艶書〔七〇〕

ことたまわけのみこと つまがみことたまひめ わかざくらひめのみこと だいごぢよ
言靈別命の妻言靈姫は稚櫻姫命の第五女であり、常世姫は第三女である。言靈別命の歸城
じやうない ぎうん いつさう おやこきやうだいふうふ めで たいめん じやちふか とこよひめ へうめん
により城内の疑雲は一掃され、親子兄弟夫婦の目出たき對面となつた。邪智深き常世姫は表面
しゆくい へう じやうない しよしんしょう またしんてい へいわ しゆく あひだ
祝意を表し、城内の諸神將も亦心底より平和にをさまりしことを祝した。しばらくの間は

龍宮城はきはめて平穩無事であつた。

ここに常世姫は稚櫻姫命、以下諸神將の信頼を一身に集めた。しかしてその勢力は日ごとに増して來たのであつた。言靈別命の聲望は以前の如くならず、一時の叛將として上下一般より

侮蔑の眼をもつて見らるるにいたつた。しかし稚櫻姫命に信任厚き大八洲彦命、眞澄姫の隠れ

たる努力により、日に月に言靈別命の聲望は回復に向つていた。そこで言靈別命はふたたび

神務を掌握し、神國別命は依然として神政を總攬し、言靈別命と神國別命のあひだは極めて圓

にして、あたかも親しい夫婦のごとくであつた。常世姫はふたたび魔我彦、魔我姫を左右の補佐

となし、種々の手段をめぐらし、二神の信望を失墜せしめむとした。

言靈別命の聲望日々に回復するとともに、常世姫の奸黠なる心情はやうやく諸神司の感知す

るところとなつた。しかるに小島別、田依彦、安川彦、竹彦一派は常世姫を深く信頼してゐた。

稚櫻姫命もつひにその心情を察知し、信任は前日に比して大いに薄らいだのである。

やうやく言靈別命の一派と常世姫の一派とがここに現はれた。されど常世姫の一派はきはめて

少数にして微力であつた。常世姫はつひに策の成らざるを知り、時機をまつてその目的を達せむ

とし、表に不平を包み、莞爾として稚櫻姫命に暇を請ひ、常世國へ事變突發せりと稱して、歸國

せむことを乞ふた。稚櫻姫命は思ふところあつて、之をただちに許したまふた。常世姫は魔我彦、

魔我姫を伴ひ、歸國に際して小島別、田依彦、安川彦一派に密策を授け、公然歸國した。

常世姫の退城したるあとは、言靈別命の勢力は實に旭日昇天の勢となつた。田依彦、安川彦

は命の聲望を傷つけむとし、容色並びなき數子姫を城内に召し、言靈別命に近侍せしめた。

數子姫はいと懇切に命に仕へて、かゆきところへ手のまはるごとく立ち働いた。命は數子姫の

誠意を喜び、外出のときは必ず侍女として相伴なふこととしてゐた。

あるとき城内に一通の手紙が落ちてゐた。安川彦は手早くこれを拾つて懷中し、ただちに

小島別の手に渡した。小島別はこれを披見し、稚櫻姫命に奉つた。その手紙は數子姫より

ことたまわけのみこと おく
言靈別命へ送れる艷書であつた。その文面によれば、すでに數回要領をえたる後にして、かつ命
の強壓的非行を怨み、天則に違反したる罪を謝し、自らはヨルダン河に身を投じて罪を償はむ
との意味が認めてあつた。ここに稚櫻姫命はおほいに驚き、ひそかに言靈姫にその手紙を示さ
れた。

ことたまひめ をつとがみ かうゐ なげ し をつと いさ かくご さだ ことたまわけのみこと かんけい
言靈姫は夫神の行爲を嘆き、死して夫を諫めむと覺悟を定めた。言靈別命はかかる奸計あり
とは夢にも知らず、一間に入つて安臥しゐたりしに、夜半ひそかに室の押戸を押開きて入りきた
る怪しき影がある。何心なく打ちながめてゐると、その影は正しく言靈姫であつた。しばらく熟睡
をよそほひ姫神の様子をうかがつてゐた。姫神は命の枕邊に端坐し、小聲にて何事か耳語しつ
ねすがた さんばい ただ しつ た い ことたまわけのみこと あや ことたまひめ ひめがみ
寢姿を三拜して直ちにその室を立ち出でた。言靈別命はこれを怪しみて直ちに起きあがり、姫神
の後を差し足抜き足しつ追ふていった。姫神は天の眞名井の岸に立ち、天地を拜して合掌し
神言を奏上しをはりて今や投身せむとす。命は驚いて背後より不意にこれを抱きとめ、仔細を尋

ぬれば、數子姫の落したる艷書の次第を物語り、かつ泣いていふ。

『折角の聲望を回復したまへる夫神にして、かかる汚き御心ましますはかならず天魔の魅入り

しならむ。妾は死をもつて夫神に代り、天地の神明に夫の罪科を謝し、かつ夫神をして悔改め

本心に立ちかへらしめ奉らむと、女心の一心に胸せまりてかかる行動に出でしなり』

との陳辨であつた。命の驚きはあたかも寢耳に水のごとく、呆氣にとられて何の言葉も出な

つた。時しも城内は言靈姫の影を失ひしに驚き、上を下へと動揺めきわたつた。神國別命は姫神

を尋ねむとしてここに現はれ、二神の姿を見てやや安堵し、二神をなだめて殿内に歸つた。

稚櫻姫命は言靈別命の非行を質問したまふた。諸神司はただ驚くばかりである。この時思慮

深き神國別命は安川彦をひそかに招き、肩をたたき敬意を表して、

『貴下の謀計は巧妙至極にして、吾らは實に舌を卷くに堪へたり。吾も貴下と同腹なり。いかに

もして言靈別命を失墜せしめむと日夜苦慮せしが、もとより愚鈍の吾、かかる神策鬼謀は夢にも

思ひよらず。吾は今日より貴下を總裁と仰ぎ、貴下の部下となつて仕へ奉らむ』

と言葉たくみに述べた。安川彦は持ち上げられて心おごり、鼻高々と吾の腕前はかくの如しといはむばかりの面色にて、

『實は數子姫は吾の閒者なり。決して言靈別命に非行あるに非ず。數子姫をしてわざと艷書を認め、殿内に遺失せしめたるなり。しかしながら吾は貴下を信じて祕密を打明けたれば、貴下もまた吾を信じて口外したまふ勿れ』

と、かたく口止めた。神國別命は直ちに色を變じ、安川彦の兩手を捻ぢ後へまはして縛りあげ、稚櫻姫命の御前に引き連れ、彼が自白のことを逐一進言した。

ここに言靈別命に對する疑ひは全く晴れた。神國別命は諸神司を集めて、安川彦、數子姫の罪状を審議し、つひに退去を命じたのである。安川彦は退はれて直ちに鬼城山にある國照姫の城塞に使はるることとなつた。

(大正一〇・一〇・三一 舊一〇・一 櫻井重雄録)

第二章 常世の國へ〔七一〕

稚櫻姫命は、一度は常世姫を常世の國に追ひ歸したまうた。されど親子の情として、幾分か常世姫を愛護さるる氣味があつた。

常世姫はロッキ―山麓に都を開き漸次勢力を増し、その威望は諸方に擴充されたのである。常世姫は一方に威力を示しつつ、一方には稚櫻姫命の信任を回復せむとし、善言美辭を連ねて命を慰め奉り、かつ一方には言靈別命夫妻の心理行動につき、種々の虚偽的材料を集めて密使をたて、しばしば報告した。命はふたたび常世姫の言に耳を傾け、つひにはその報告を信ぜらるるにいたつた。

とき　りゆうぐうじやうない　かすこひめ　えんしよ　けん
時しも龍宮城内における數子姫の艷書の件につき、一時言靈別命を疑ひたまひしが、
かみくにわけのみこと　ちりやく　やすかはひこ　いんぼうろけん　すこ　ぎだん　は
神國別命の智略によりて、安川彦らの陰謀露見し、少しく疑團を晴らしたまうた。されど内心疑
はんしんはんぎ　まなこ　ことたまわけのみこと　かうどう　ちうい
ふかく、半信半疑の眼をもつて、言靈別命の行動を注意されつつあつた。

やすかはひこ　いんぼう　とこよひめ　しそ　い　こじまわけ　ぼうぎ　くは　すこ　さと
また安川彦の陰謀は常世姫の使喚に出で、小島別らの謀議に加はりしを少しも覺られなかつた。
とし　とこよひめ　こうぜん　ししや　りゆうぐうじやう　さんかう　うやうや　しんしよ　たてまつ
やや年をへて常世姫の公然の使者は、龍宮城に參向し、恭しく信書を奉つた。その文意は、

とこよひめ　しんせい　ひら　しんでん　つく　てんち　しんれい　ほうさい　じつ　おそ　おほ　ねがひ
『常世姫の神政おほいに開け、ここに神殿を造り、天地の神靈を奉齋せむとす。實に恐れ多き願

なれども、稚櫻姫命諸神司とともに出場されたし。萬一御承認なくば已むをえず、言靈別命を
わかざくらひめのみことしよしん　しゆつちやう　まんいちごしようにん　や　ことたまわけのみこと

だいり　しゆつちやう　ことたまわけのみこと　あくしん　あらた　まごころ　みこと　ほうし　しゆじゆ
代理として出場せしめたまへ。言靈別命の惡心を改めしめ、眞心より命に奉仕せしむべく種々

しんさく　みこと　ほさしん　じつ　あ　ことたまわけのみこと　しゆつちやう
の神策をもつてし、まことに命の輔佐神たるの實を擧げさせしめむ。すなはち言靈別命の出場

いつきよりやうとく　しよゐ
は、一舉兩得の所爲たるべし』

り　したた
と理をつくして認められてあつた。

わかざくらひめのみこと

稚櫻姫命はこれを見て大いに喜び、常世姫は最早改心の實を擧げたれば憂ふるに足らず、た

だ心

にかかるは言靈別命の心理行動なり。如かず、これを遣はして、常世姫により改心せしめ

むと、ここに言靈別命を招き、その旨を傳へたまうた。

ことたまわけのみこと

とこよひめ

かんけい

しあん

をり

もとてるひこ

とこよ

くに

じつじやう

たんち

言靈別命は常世姫の奸計ならずやと思案にくれてゐた。折しも元照彦、常世の國の實情を探知

かへ

し、歸りきたりて常世姫の謀計に出でたるなれば、ゆめゆめ油斷あるべからず、とひそかに忠告

した。

ことたまわけのみこと

やまひ

しやう

しゆつぢやう

しやぜつ

わかざくらひめのみこと

がんしよく

へん

ことば

あら

茲に言靈別命は病と稱して出場を謝絶せむとした。稚櫻姫命は顔色を變じ言葉を荒らげ

せんざいいちぐう

しんかい

けいじ

やまひ

たく

しゆつぢやう

こば

わ

めい

そむ

かなら

ふか

『千載一遇の神界の慶事にたいし、病に託し出場を拒むは、吾が命に背くものにして必ず深き

たく

企みあらむ』

ふんまん

と憤懣された。

ことたまひめ

や

たつよひめ

もとてるひこ

しゆじゆ

ひさく

あん

みこと

きなん

すく

ここに言靈姫は止むをえず龍世姫、元照彦とはかり種々の祕策を案じ、命の危難を救はむとし、

その神策を命にすすめられた。

もとてるひこ
元照彦はひそかに龍宮城を立出で、天の八衢に隠れ種々の計畫を立ててゐた。言靈別命は

げんめいいな
嚴命否みがたく、ここに意を決して常世の國に出發さるることとなつた。一行は小島別、松代姫、

たつよひめ たけしまひこ しよしん みこと しゅつぱつ のぞ はがみ くによひめ くさぐさもの ひれ と だ
龍世姫、竹島彦らの諸神司であつた。命の出發に臨み母神の國世姫は、種々物の領巾を取り出し

ことたまわけのみこと あた
て、言靈別命に與へ、

ひれ わがや たから いま なんぢ さづ ひれ おも ふか くわいちう ひ ゆ
『この領巾は吾家の寶なり。今これを汝に授く、この領巾をわれと思ひ、深く懷中に祕して行け』

ことば のこ なみだ わか いつかう めなしかたま ふね の とこよ くに
との言葉を残し、涙とともに別れたまうたのである。一行は目無堅間の船に乗りて常世の國へ

あんちやく
安着した。ここにロッキ―山麓の常世の都にいたるべき左右に岐れたる二筋の大道が開かれて

わかれみち すこ てまへ さ たつよひめ たちま きふびやう はつ ろじやう てんたう くる もだ
ある。その岐路の少しく手前に差しかかるや、龍世姫は忽ち急病を發し、路上に轉倒し苦しみ悶

える。

たつよひめ わかさくらひめのみこと さいあい むすめがみ こじまわけい か かみがみ おじろ あわてふため
龍世姫は稚櫻姫命の最愛の娘神なれば、小島別以下の神司はおほいに驚き、周章狼狽きて

看護に餘念なく手をつくした。これは龍世姫の巧妙なる神策にして、その實は偽病であつた。
言靈別命はこの場の光景に眼もくれず、ただ一柱足を速めてその岐路に進み、左方の道をとつて驀地に走り進んだ。

(大正一〇・一一・一 舊一〇・二 外山豊三録)

第二章 言靈別命の奇策〔七二〕

言靈別命は何ゆゑかこの遭難を後にみて、一目散に左の大道を進み、美濃彦の住める紅館にいたり、元照彦とともに種々の計畫をたて、萬一に備へたのである。小島別以下の神司は龍世姫の急病に心をとられ、言靈別命の影を失ひしに心付かず、種々手をつくして看護した。されど

容易よういに龍世姫たつよひめの病やまひは癒いえずして、多くおほの時ときを費つひやした。

このとき小島別こじまわけは狼狽らうばいのあまり、傍かたはらの深ふかき谷間たにまに轉落てんらくして腰こしを打ち、谷底たにぞこにて悲鳴ひめいを上げあてゐた。一方龍世姫たつよひめには松代姫看護まつよひめかんごの任にんにあたり、竹島彦たけじまひこは谷間たにまに下りて、小島別こじまわけの看護かんごに盡つくしてゐた。龍世姫たつよひめはますます苦悶くもんを訴うったへた。

竹島彦たけじまひこは小島別こじまわけをやうやく背せなに負おひて谷たにを這はひのぼり、ここにふたりの病神びやうしんに手てを曳ひかれとちめんぼう、柝とちめんぼう麵棒めんぼうをふつてゐた。そのとき龍世姫たつよひめは掌てのひらを翻かへしたごとくに病氣びやうき全快ぜんくわいし、大聲おほごゑを出だして笑わらひだした。

小島別こじまわけは顔かほをしかめ、苦痛くつうを訴うったへてゐたが、種々看護しゆじゆかんごの末すゑやうやく杖つゑを力ちからに歩行ほかうしうるやうになつた。ここにはじめて言靈別命ことたまわけのみことの影かげを失うしなひしに驚おどろき、竹島彦たけじまひこは大聲おほごゑを發はつして、「オーイ、オーイ」と呼よばはつた。その聲こゑは木精こだまにひびき、山嶽さんかくも崩くづるるばかりであつた。されど言靈別命ことたまわけのみことの聲こゑは梨なしの礫つぶての何なんの音沙汰おとさたもなかつた。

小島別は【よろめき】つつ杖を力に【なめくじり】の江戸行のごとく、遅々としてはかどらぬ

のである。にはかに従者に命じ、輿にかつがして行くことになつたが、やがて二股の岐路にさし

かかつた。このとき、一行は、言靈別命はいづれの路をとりしやと、しばし思案にくれてゐた。

龍世姫は右の道をとれと勧めてやまなかつた。されど一行は途方にくれていた。

衆議の結果、竹島彦、松代姫は右の道をとつたが、小島別、龍世姫は左道をとつて美濃彦の館

の前を何氣なく通過した。

言靈別命は小島別の輿をやり過ごして、悠々として協議をとげ、元照彦、美濃彦に策を授け、

やがて後より「オーイ、オーイ」と大聲を上げて、小島別の輿を呼びとめた。

小島別は輿より這ひいで、

『命はいづれにありしぞ。龍世姫の重病を見捨て、吾らを捨てて自由行動をとられしは、實に

不深切にして無道のきはみならずや』

と、腰こしを押おさへながら詰問きつもんした。

言靈別命ことたまわけのみことは打ち笑うつて、

『龍世姫たつよひめは平素慢心強へいそまんしんつよし、重病ぢゅうびやうに罹かるたうぜんときは當然のぞなり。望のぞむらくは途上とじやうに倒たふれ死しし、鳥獸てうじうの餌食ゑじき

となるべきものなり。しかるに憎にくまれ兒世ごよに羽張はるとの譬たとへのとほり、まだ頑強ぐわんきやうに生いきながらへあ

たるは不思議ふしぎなり』

と口くちをきはめて罵ののしつた。

小島別こじまわけは言靈別命ことたまわけのみこと、龍世姫たつよひめの心中しんちゆうを知らず、躍起やくきとなつて憤いきどほり、

『極惡無道の言靈別命ごくあくむだう、吾われいま天てんに代かはつて誅伐ちうばつせむ。泣面なきづらはかくな』

と起き上おつた。その一刹那いちせつなに小島別こじまわけの腰こしの痛みいたはたちまち癒いえ、言靈別命ことたまわけのみことは路上ろじやうにたふれて、絶息ぜつそく

してしまつたのである。小島別こじまわけは、

『神明恐しんめいおそるべし。罰ばつは覲面てきめんなり』

と手を拍つて天に感謝した。

龍世姫はただちに言靈別命を看護した。このとき小島別怒つて曰く、

『彼は命の野倒れ死を希ひし惡逆無道の神なり。何の義務あつて、仇敵を介抱したまふや』

と詰つた。龍世姫は容をあらため、威儀を正し、

『至仁至愛の神慮は汝らのたうてい窺知すべきところに非ず。汝の言こそ實に惡魔の囁きなり。

すみやかに悔改め、言靈別命に陳謝し奉れ。しからざれば妾はこれより龍宮城にたち歸り、

汝が不信の罪を稚櫻姫命に奏上し奉らむ』

と厳しく戒めた。

小島別は大地に平伏し、平蜘蛛のごとくなつて自分の過去を陳謝した。路上に倒れし言靈別命

は決して病を發して倒れたのではなかつた。小島別をして自分を輿にのせて舁つぎ行かしめむた

めの奇策であつた。

小島別は龍世姫の嚴命により、あまたの輿舁の神あるにかかはらず自ら輿舁となり、不精々々

に、あたかも屠所に曳かるる羊のごとく、足竝もあまり面白からず進むのであつた。

行くことややしばしにして左右兩岐路の出會路にさしかかった。右の道をたどりし竹島彦、

松代姫もここに來り、たがひに無事の會合を祝した。

このとき龍世姫は竹島彦にむかひ、

『吾が嚴命なり。汝は後棒となり、この輿を舁ぎて命を常世姫のもとに送り奉れ』

と命令した。竹島彦は心中おだやかならず。されど龍世姫の命を拒むに由なく、つひに輿を舁ぐ

こととなつた。輿を舁ぎしふたりはとみれば、實に三寶荒神が、竈の上の不動を燃え杭で

はした】やうな不足相な顔付であつた。

(大正一〇・一一・一 舊一〇・二 谷口正治録)

第二章 龍世姫の奇智〔七三〕

小島別、竹島彦は、言靈別命の輿をかつぎながら、猿が蒔柿を喰つたやうに、子供が苦い陀羅助を呑んだやうな面構へして嫌々ながらかついでゆく。心中の不平不満は察するにあまりがあつた。やうやく峻しい坂に差しかかった。ふたりは汗水垂らして登りゆく。松代姫は竹島彦の後棒を押しながら助けてゆく。龍世姫は滑稽諧謔の神司である。後からこの状態を見、手を打ちつつ笑ひ、いろいろの面白き手まね、足踏みしながら、『言靈別の神さんは こしの常世へ使ひして道に倒れて腰を折り 輿に乗せられ腰痛む こしの國でも腰拔かし 腰抜け神と笑はれる 他の事なら何ともない こしやかまやせぬ、かまやせぬ』

と聲こゑを放はなつてからかふ。

小島別こじまわけ以下の一行いっかうは、登り坂のぼざかにあたつて苦しみつつある際さい、この歌うたを聞ききて吹ふきだし、笑わらひこけ、足あしまで捲だるくなつて一歩いっぽも進すすめず、ここらに立往生たちわうじやうをなし、つひには腰こしをまげ腹はらを抱かかへて笑わらふのであつた。輿こしの中なかよりは、言靈別命ことたまわけのみことの聲こゑとしてさも愉快ゆくわいげに、

『こいでこいでと松代まつよは來こいで 末法まつぽふの世よがきて駕籠かごをかく

小島こじま、竹島たけじまお氣きの毒どく さぞやお腰こしが痛いたからう

お腹はらが龍世たつよが倒たふれうが 他ひとのことなら何なんともない

こしや構かまやせぬ、かまやせぬ』

と歌うたつた。小島別こじまわけ、竹島彦たけじまひこはその歌うたを聞きくなり大おほいに怒いかつて輿こしをそのまま谷底たにぞこへ投なげ棄すてた。

輿こしは轉々てんでんとして谷底たにぞこに落おち木葉微塵こつばみちんに碎くだけてしまつた。小島別こじまわけらは手てをうつて快哉くわいさいを叫さけび舞まひをどつてゐた。

ことたまわけのみこと　くわいちゃう　も　くさぐさもの　ひれ　しんりき　すこ　ふしやう　いうぜん　たに
言靈別命は懷中に持てる、種々物の領巾の神力により、少しの負傷だもなく、悠然として谷を
のぼ　こじまわけいつかう　た　まへ　あら　たつよひめ　くち　ことたまわけのみこと　ねっぱ　にしん
登り、小島別一行の立てる前に現はれた。龍世姫は口をきはめて言靈別命を熱罵した。ここに二神
のあひだに大爭論がはじまり、つひには掴みあひとなつた。この爭論は全く兩神の八百長であ
る。しんい　し　こじまわけ　たけしまひこ　たつよひめ　けが　なか　わ　ことたまわけのみこと　さうほう
眞意を知らざる小島別、竹島彦らは、龍世姫に怪我させじと仲に分けいり、言靈別命を雙方
より亂打した。それより龍世姫、言靈別命は後になり先になり惡口の限りをつくし、犬猿もただ
ならざる様子を示した。やうす　しめ　いつかう　とこよ　みやこ　ちか　とこよひめ　かみがみ
一行はおひおひ常世の都に近づいた。常世姫はあまたの神司をして
言靈別命の一行を迎へしめた。そして二臺の輿がきた。いちだい　ことたまわけのみこと　の　いちだい
は龍世姫がこれに乗った。こじまわけ　たけしまひこ　むか　かみがみ　めい　ことたまわけのみこと　こし　ぜんごさいう　ゆす
小島別、竹島彦は迎への神司に命じ、言靈別命の輿を前後左右に揺り
まはし、あるひは高く頭上に上げ、ときどきは低く地上に落とし苦しめた。命はほとんど眩暈す
るばかりであつた。とこよひめ　きうでん　つ　ことたまわけのみこと　げきれつ　どうえう　ひらう　の　ど
常世姫の宮殿に着いたときは、言靈別命は劇烈なる動搖のため疲勞し、咽喉
をかわかせ、いそ　みづ　もと　とこよひめ　じしや　わうごん　うつは　みづ　も　かは　みこと　ほうてい
急ぎ水を求めた。常世姫の侍者は黄金の器に水を盛り、渴ける命に捧呈した。こ

のとき龍世姫は輿より降り、この様をみて、

『かかる尊き玉水を腰拔神に吞ますの必要なし。われは大いに渴きたり。この水はわが吞むべ

き水なり。腰拔神は泥水にて充分なり』

といひながらその水を横合よりやにはに奪ひ、松代姫の神を目がけて打かけた。松代姫の袖より

は火煙を發し、熱さに悶えつつ濠に飛込み火を消し、辛うじて這ひ上つてきた。諸神司は驚いて

松代姫の方に走り新しき衣を着替へさせこれを勞はり慰めた。言靈別命は龍世姫の剛情我慢を

詰つた。龍世姫はしきりに「腰ぬけ、腰ぬけ」と嘲笑した。言靈別命は憤懣の色をあらはし、劍

の柄に手をかけ切つて捨てむと龍世姫に迫つた。小島別、竹島彦は二神人の仲に割つていり、百方

辨をつくして仲裁の勞をとり、この紛争は無事に治まつたのである。この争ひは龍世姫が

言靈別命の毒殺されむとするを救ふための深慮に出でたる一場の狂言であつた。

(大正一〇・一一・一 舊一〇・二 加藤明子録)

第二章 藻脱けの殻〔七四〕

常世の都には莊嚴瀟洒なる大神殿が建てられ、天地の諸神を鎮祭し奉った。ここに常世姫は齋主となり、言靈別命は諸神司を率ひ副齋主の職を奉仕した。莊嚴なる祭典はやうやくにして濟んだ。ただちに直會の宴にうつり、常世姫は首座に、八百萬の神司は順次宴席に着いた。さしもの廣大なる廣前も立錐の餘地もなきまでに塞がった。

言靈別命は龍宮城の大切な賓客として、常世姫の次席の座を占めることとなつた。このとき龍世姫は顔色を變へ、常世姫の前にて言靈別命を尻目にかけ、

『かかる腰抜け神司を正座に着かしむるは吾を侮辱するものなり。吾は稚櫻姫命の娘なり。席を代らせたまへ』

と申し込んだ。衆神はこの形勢を見て不安の念にかられた。言靈別命は大いに怒り、『女神の分際にて吾の上座に着かむとするは、僭越もはなはだし。汝は最下座にかへり、吾に接待の役を務めよ』

といった。かくして二神の争ひは再發した。

言靈別命はつひに一步を譲つて、龍世姫を上座にすゑた。このとき山野河海の美味し物は諸神司の前へ運ばれてきた。常世姫は一同にむかひ、祭典の無事終了せしことを祝し、かつ直會の宴を開きたる次第を細々と述べたてた。

言靈別命はこれに答へて龍宮城を代表し、慇懃なる挨拶を述べ、いよいよ酒宴の箸をとることとなつた。このとき龍世姫は、言靈別命の前にある種々の馳走をみ、怒つて曰く、

『かかる腰抜け神司に、山野河海の珍物を饗應するは分に過ぎたり』

といひつつ、命の前に据ゑたる膳部を残らず轉覆かへした。そして自分の懷中より蛙の形した

る味よきパンを取りだし、

『これは蛙の木乃伊なり。汝はこれにて充分なり』

といひも終らず、ただちに言靈別命の口に捻こんだのである。うちかへされたる膳部の羹よりは青色の火焰が立ち昇つた。常世姫以下の神司は、二神の間が犬猿もただならざることを知り、龍世姫に心を許してゐた。

宴會は無事にすんだ。神司は各自わが居間に歸つた。言靈別命は主賓として、奥殿のもつとも美しき居間にて寢につくこととなつた。小島別、竹島彦は侍者として枕邊に保護することとなつた。命は腰部の苦痛はなはだしければ、ふたりに命じて夜深くまで腰を揉ましめた。ふたりは疲れはてて高鼾をかきだした。そこへ龍世姫來りて、ふたりに對して一閒に休息せよと命じた。ふたりは喜んで命のまにまに一閒へはいつて、白河夜船を漕いで、華胥の國へ遊樂してゐた。

その間に龍世姫は言靈別命に武裝せしめ、夜ひそかに裏門より逃れしめた。門外には元照彦あ

またの從者^{じゆうしや}とともに待ち伏^ませて、天^{あめ}の羽車^{はぐるま}に乗り、北方^{ほつぱう}めがけて逃^にげ出^だしたのである。たちまち奥^{おく}殿^{でん}に聲^{こゑ}が聞^{きこ}えた。諸^{しよしん}神^め司^さは目^めを醒^さまし、何^{なに}事^{ごと}の突^{とつ}發^{ぱつ}せしかと怪^{あや}しみながら驅^かけつけた。

このとき龍^{たつ}世^よ姫^{ひめ}は大^{だい}音^{おん}聲^{じやう}にて、

『われ今^{いま}、言^{こと}靈^{たま}別^{わけ}命^{のみこと}に殺^{ころ}されむとせり。われは女^め神^{がみ}ながらも死^{しり}力^{よく}をつくして争^{あらそ}ひたれば、命^{みこと}は力^{ちから}つき逃^にげゆくとたん^かに、階^{かい}段^{だん}より迂^{すべ}り落^おち、いまこの深^{ふか}き濠^{ほり}に溺^{でき}没^{ぼつ}したり。神^{かみ}司^{がみ}來^{きた}りてこれ^{すく}を救^あひ上^あげよ』

と叫^{さけ}びつつかつた。神^{かみ}司^{がみ}は言^{こと}靈^{たま}別^{わけ}命^{のみこと}のひそかに逃^{のが}れしを夢^{ゆめ}にも知^しらず、右^う往^{わう}左^さ往^{わう}に走^{はし}りまはり、舟^{ふね}をいだして濠^{ほり}を捜^{さう}索^{さく}したが、つひにはその影^{かげ}だにも認^{みと}むることができなかつた。

小^こ島^{じま}別^{わけ}、竹^{たけ}島^{じま}彦^{ひこ}、松^{まつ}代^よ姫^{ひめ}は大^{おほ}いに驚^{おどろ}き、

『吾^{われ}らは稚^{わか}櫻^{さくら}姫^{ひめ}命^{のみこと}に對^{たい}し奉^{たてまつ}り、何^{なん}とも陳^{ちん}辨^{べん}の辭^{ことば}なし』

と頭^{あた}をかたむけ吐^{とい}息^きをつくのであつた。時^{とき}しも急^{きふ}報^{ほう}あり、

『言靈別命は元照彦と共に、神軍を率ゐて逃げ失せたり』

との報告である。常世姫、小島別、その他あまたの神司は、八方に手配りして命の所在を嚴探し

たが、つひにその影を認むる事はできなかった。ああ言靈別命の運命はどうなるであらうか。

(大正一〇・一一・一 舊一〇・二 櫻井重雄録)

第二章 蒲團の隧道〔七五〕

言靈別命の夜陰にまぎれて城中を遁げ出でたる藻脱けの穀のあとの祭りの光景は、實に慘澹たるものであつた。神司は残らず八方に派遣された。後には常世姫諸神司を集め、龍世姫の行動を怪しみ、いろいろと詰問をした。龍世姫は何といはれても平氣の平左で鼻唄をうたひ、素知ら

ぬ顔に誤魔化すのであつた。常世城の重神猿世彦は、龍世姫にむかひ、

『大切な玉を、眠れる間に失ひたるは貴神司の責任なり。貴神司はこれより常世姫に事實を述べ、所在を詳かに自白せられよ』

と迫つた。龍世姫は飽くまで白を切り、ネル盡しの歌を作つて異しき手眞似をなし、臀を振りつ面白く踊りくるふのであつた。

その歌は、

『長途の旅に疲れてグツと寝る 素人按摩が肩ひねる

竹島彦が腰ひねる 寝るは寝るは他愛もなしに

寝る間に飛び出た目の玉は 尋ねる由も泣き寝入り

こねる理屈も立ちかねる 呆れてわたしは尻ひねる

なんぼ理屈りくつをこねるとも わたしは何なんとも言いひかねる

言靈別ことたまわけの神かみさんは 龍宮城りゅうぐうじやうへは往いにかねる

行衛ゆくゑはどこぢやと尋ねるも 妾わたしは知しらんで言いひかねる

寢床ねどこの後あとを眺ながむれば 布團ふとんの隧トンネル道開いてある

あまり寝ねるにもほどがある 常世とこよの國くにの神かみさんの

わたしは心こころを解ときかねる ねってねってねりさがし

百度ひやくども千度せんどもねるがよい わたしに何なにを尋たづねるも

白河夜船しらかはよぶねのネル盡づくし 白川夜船しらかはよぶねのネル盡づくし』

と奥殿目おくでんめがけて踊り入をどる。常世姫とこよひめも呆あきれはて、やうやくに疑うたがひを晴はらした。

常世とこよの城しろはほとんど空虚くうきよとなり、守將しゆしやうは大部分出城だいぶぶんしゆつじやうして、言靈別命ことたまわけのみことの跡あとを追おふて不在中ふざいちゆうであ

る。にはかに城下に聞ゆる関の聲。常世姫は高臺に上つて城下をきつと打見やれば、豈はからむや、元照彦はあまたの神軍を引つれ、十重二十重に取圍んでいまや火蓋を切らむとする勢であった。

常世姫は進退これきはまり、直ちに和睦をなさむとて、龍世姫を軍使として、元照彦の神軍に遣はした。龍世姫は元照彦の前に出で、たがひに顔を見合せ、微笑しつゝ常世姫の命を傳へた。

元照彦は和議に關する信書をしたため、常世姫に送達した。その文意は、

『すみやかに城を捨て、汝はウラル山に退却せよ』

といふのであつた。常世姫はいよいよ進退谷まり、ただちに黒雲を呼び、金毛八尾の惡狐と化して東北の空高く遁げのびた。

元照彦は常世の城に入城した。常世姫の部下の神軍は、残らず元照彦に降伏した。元照彦は諸神司の勤勞を慰めむとて酒宴を催した。このときロッキー山の南方に立籠りたる常世姫の

部下なる竹熊彦、安熊といふ勇猛なる魔神があつた。彼は常世城の陷落し、かつ常世姫の身をもつて免れたるを憤慨し、再びこれを回復せむとして身をやつし、城下近く進んで様子を考へたのである。

このとき元照彦は心ゆるめ、丸裸のまま酔ひ倒れてゐた。竹熊彦、安熊は突然城内に侵入し、頭槌をもつて元照彦の部下を目がけて打ちまくつた。今まで元照彦に歸順せし常世城の神司は總立となり、四方より討ちかかつた。これらの諸神司は初めより酒を呑み酔ひしと見せて、その實水を呑み酒に酔ひし風をしてゐた。元照彦は驚きのあまり酔もにはかに醒め、生命からがら裏門より逃げだし、濠を泳いで裸のまま後をも水に、浪を打たせつつ震ひにふるふて、北方さして影を隠してしまつた。元照彦の運命はどうなるであらうか。

元照彦の神軍はにはかに驚いて酔を醒まし、蜘蛛の子を散らすがごとく四方に遁げ散つたのである。

第二章 信天翁〔七六〕

もとてるひこ こうげき しんたい
元照彦の攻撃に進退きはまり、金毛八尾白面の悪狐となりてロッキ―山の方面に雲をおこして
に かへ み
逃げ歸りしと見えしは、まつたく常世姫の魔術であつた。常世姫は依然として城内の奥深く潜ん
とこよひめ せいさう
でゐた。常世姫は盛装をこらし悠然として龍世姫、竹熊彦らの前に現はれた。竹熊彦は死者の蘇
ごと きやうき しよしん
へりし如く狂喜した。諸神司とともに歡喜の聲をあげて勇躍した。城内にはかに、枯木に花の
さ
咲きしがごとく陽氣となつた。これに反し小島別、竹島彦、松代姫は稚櫻姫命にたいし、この失敗
ちんしや しあん
をいかにして陳謝せむやと、思案にくれ、顔の色までかへて青息吐息の體であつた。龍世姫は可笑
た ふき
しさに堪へかねて失笑だした。さうしてまた面白く歌を唄つて踊りだした。

その歌の文句は、
うた もんく

『竹島彦の顔見れば
たけしまひこ かほ み

閻魔が抹香喰つたやうに
えんま まつかうく

何が不足でそんな顔
なに ふそく かほ

ここは地獄か極樂か
ぢごく ごくらく

常世の城ではないかいな
とこよ しろ

お地藏さまでも呼んで来て
ちざう よ き

お酌さしたらどうである
しやく

小島別の神さんの
こじまわけ かみ

お顔を一寸眺むれば
かほ ちよつとなが

青瓢箪か干瓢か
あをべうたん かんべう

朝瓜、鴨瓜、唐茄子
あさうり かもうり たうなすび

南瓜の一寸ひねたのか
かぼちや ちよつと

ここは畑ぢやあるまいに
はたけ

青息吐息の佛掌薯
あをいきといき つくねいも

つくづく思案をして見れば
しあん み

うそでつくねた其の罪で
そ つみ

眞赤な恥を柿のへた
まつか はぢ かき

下手な巧はせぬがよい
へた たくみ

宵に企んだ梟鳥

夜食に外れてお氣の毒

これが眞の信天翁

一つの取得泣き寝入り

煎豆花咲く時もある

この縮尻は身の因果

因果應報目のあたり

當り散らして怒つても

私は一寸も知らぬ顔

顔が立たうが立つまいが

いが栗頭が割れやうが

用が無いのはお前さん

三度の食事も二度にして

指をくはへて寝るがよい

よいよいよいのよいときつさ

さつさと龍宮に逃げ還れ

歸れば龍宮の神さんに

頭をはられて可笑しかろ

をかし可笑しと笑はれて

腹を立てなよ小島別

笑ふ門には福きたる

來る時節を樂みに

今度は改心するがよい　よいよいよいのよいときつさ』

諸神司は小島別、竹島彦の心配さうな顔つきを眺め、いろいろと言葉を盡して慰めた。常世姫はあまたの珍らしきものを二柱に與へ、かつ慇懃にその勞を謝し、龍世姫には麗しき寶玉を與へ、稚櫻姫命の御土産としては、種々の珍寶を取り出して、これを龍世姫に傳獻せしむることとなり、ここに四柱はまづ龍宮城へ還ることとなり、はるかに海山川を打渡りやうやく歸城した。龍世姫は何の恐れ氣もなく稚櫻姫命の御前に出で、常世姫より預かりしくさぐさの珍寶を奉り、かつ小島別、竹島彦らの今回の失策を詳細に、面白く進言した。稚櫻姫命は大いに怒り、『小島別以下の二神司、すみやかに吾が前に來れ』と嚴命せられた。三柱は猫に追はれた鼠のごとく縮みあがり、蚤か蝨のその如く、頭を隠して戦慄いてゐた。言靈姫はこの状態を見て氣の毒にたへず、いかにもして稚櫻姫命の怒りを和ら

げむと百方焦慮し、龍世姫は面白き歌を作り、言靈姫は怪しき手つきをなして踊り狂ひ、命を
抱腹絶倒せしめ、この場のごみを濁さむとした。その歌は、

『大蛇に追はれた蟆蛙　こんなこと【ぢや】と知つたなら

使ひに行くの【ぢや】なかつたに　何【ぢや】かん【ぢや】とだまされて

【ぢや】ぢや馬神に【ぢや】ぢやにされ　元照彦に邪魔されて

善【ぢや】悪【ぢや】と争ひつ　たがひに邪推の廻し合ひ

相も變らぬ邪智深き　常世の邪神に尾をふつて

尻までふつて腰抜いて　輿を取られて輿を昇き

輿に乗せたる神さんに　さんざん膏を搾られて

その上腰を揉まされて　越の國をば腰抜け顔して龍宮へ

かへ すがた なが
歸つた姿を眺むれば

あをな しほ ひる しほ
青菜に鹽か蛭に鹽

ち は おも ほととぎす
血を吐く思ひの時鳥

ひといきやす ま
ほつと一息休む間も

ば いちどう ひ だ
なくてこの場に一同引き出され

なん い
何の云ひわけ荒男

をどこ かほ たつよひめ
男の顔も龍世姫

た とき いきほひ
立つ時えらい勢で

かへ とき すがた
歸つた時のその姿

すがた な
姿かくして泣いてゐる

みやま ほととぎす
これが深山の時鳥

はう づら
ほうほけきよりの呆け面

つら かく しり だ
面を隠して尻を出し

しり しま とほ
尻の締りはこの通り

とほ こ おほあほう
通り越したる大阿呆

あほうあほう あかつき
阿呆々と曉に

な からす とぼ ごゑ
鳴いた鳥の惚け聲

ゆる くだ
どうぞ許して下しやんせ

さんにな よ もんじゆ ちゑ
三人寄れば文殊の智慧といふものを

さんにな かみ
この三人の神さんは

とし と むしく
年は取つても蟲喰はぬ

め み ちゑ わかひめ
目に見ぬ智慧は稚姫の

若布のやうな弱腰で

向ふも見ずにべらべらと

云はぬは云ふにいや勝る

猿が三匹飛んで出て

常世の國で恥を【かき】

なほまた歸つて頭搔く

木から落ちたる猿のよに

空を眺めて泣くよりも

一先づこの場をさるがよい

『よいよいよいのよいとさつさ』

といふ戯歌であつた。三柱はこの歌の言靈によつて、稚櫻姫命のお怒りを和らげ、言靈別命を失つたる失敗の罪を赦された。

(大正一〇・一一・一 舊一〇・二 加藤明子録)

第二十七章 湖上こじやうの木乃伊ミイラ〔七七〕

もとてるひこ　らたい　から　とこよじやう　のが　くさ　あ　みのかさ　つく　くれなゐ　やかた　お
元照彦は裸體のまま辛うじて常世城を逃れいで、草を編んで蓑笠を作り、紅の館に落ちのび
みのひこ　もん　たた　みのひこ　もんこ　たてくまわけ　しゆしやう　せうすう　しんそつ　とも　げんしゆ
美濃彦の門を叩いた。美濃彦の門戸には立熊別といふ守將が、少數の神卒と共に嚴守してゐた。
もとてるひこ　かほ　くは　み　しる　ようばう　か　みのかさ　すがた　あら
そこへ元照彦は顔に桑の實の汁をぬり、容貌を變へ、蓑笠の【みすぼ】らしい姿にて現はれたの
である。立熊別はこの姿を見て惡神の落ちぶれ者と信じ、大いに叱咤して門戸の出入を拒んだ。

もとてるひこ
元照彦は、

われ　みのひこ　どうし
『吾は美濃彦の同志である。すみやかにこの旨を美濃彦に傳へられよ』

たてくまわけ　しん
といった。立熊別はこれを信ぜず、

た　さ
『すみやかにここを立ち去れ』

げんめい　もとてるひこ　なに　べんめい　き　い　もとてるひこ　いつさく　あん
と嚴命し、元照彦が何ほど辨明しても聞き入れぬ。そこで元照彦は一策を案じ、

『實は吾は浮浪神である』

と言つて、【そろそろ】龍世姫の故智をまねて歌を唱ひだした。

『常世の城を逃げだして 身は身で通る裸ン坊』

蓑着て笠着て身の終り どうして會はしてくれなゐの

館の神の門番は 身のほど知らぬ蓑蟲か

わが身の姿の落ちぶれて 乞食のやうに見えたとして

結構な神ちやぞ見のがすな わが身の仇となることを

知らずに門に立つ熊が わけも知らずにハネのける

今は曇りしこの身體 元は照彦身は光る

光が出たら紅の 館はたちまち夜が明ける

開けて口惜しい玉手箱　美濃彦今に泣き面を

かわくを見るのが氣の毒ぢや　會はにや會はぬでそれもよい

後でビツクリして泡吹くな　後でビツクリして泡吹くな』

と繰返しくりかへし踊つたのである。

立熊別は不思議な奴が來たものと、面白半分にからかつてゐた。美濃彦はあまり門口の騒がし

さに立ち出で、【じつ】と様子を考へてみた。合點のゆかぬはこの浮浪神である。顔の色こそ變つ

てゐるが、どことなく見覚えのある顔である。またその聲は何となく聞き覚えのある聲である。

不思議に思つて、ともかくもこれを門内に通した。門内に入るや否や、美濃彦にむかひ、

『吾は元照彦である。常世の城に敗をとり、全軍四方に解散し、吾はわずかに身をもつて免れ、

やうやくここまで落ちのびたのである』

いちぶしじふ ものがた
と一伍一什を物語つた。

美濃彦は驚いて大地に平伏し、立熊別の無禮を陳謝し、ただちに奥殿へともなひ種々の饗應をなし、かつ新しき衣服を出し來りてそれを着用させた。さうして元照彦を正座に直し、自分は左側に端座し、侍者をして立熊別を招き來らしめた。立熊別は美濃彦の前へ出頭した。正座に立派な神のあるのを見て驚き、不審さうに顔を打見まもつてゐる。美濃彦は立熊別に向つて、先程の浮浪神は此方であると、上座の方を指し示した。立熊別はつくづくこれを眺め、はじめて元照彦なりしことを知り、尻を花立にして以前の無禮を陳謝した。

ここに美濃彦と密議の結果、元照彦は服裝を變じ、館の從臣港彦をともし、スペリアル湖のほとりに船頭となつて往來の神司を調べ、味方をあつめ、かつ敵の情勢を探らむとした。

常世姫の軍は、八方に手分けして言靈別命、元照彦の所在を嚴密に探らむとし、猿世彦は言靈別命の後を追ふて、いま此處に現はれた。猿世彦は船を命じこの湖水を渡らむとした。港彦

はただちに船を出した。船は湖の中ほどまで進んだ。にはかに暴風吹きおこり、浪高く船はす

でに浪に吞まれむとする。猿世彦は顔色蒼ざめ慄ひ戦ひてゐた。これにひきかへ、港彦は平氣の

平左で歌をうたつてゐる。さうして常世の城は言靈別命、元照彦といふ神將のために再び陷落し、

常世姫は龍宮城に行つたといふ噂が専らであると、他事に話しかけた。猿世彦は心も心なら

ず、速やかにこの船を元へ返せと命じた。風はますます烈しく、浪はおひおひ高くなつてきた。

猿世彦は氣が氣でなく、しきりにかへせかへせと嚴命した。港彦は少しも騒がず、ますます北方

へ漕ぐのであつた。そして港彦は容を正し、猿世彦にむかひ、

『吾は卑しき船頭となつて汝らの來るのを待つてゐたのである。實は言靈別命、元照彦の謀將で

ある。今ここで南へ引きかへさむか、言靈別命は數多の神軍を整へて汝を滅ぼさむと待ちかま

へてゐる。北へ進まむか、北岸には元照彦が神軍を整へ汝の到着を待つてこれを滅ぼさむとし

てゐる。この湖は兩神軍の部將が東西南北に手配りして、蟻のはひでる隙間もない狀況であ

る。吾は汝に教ふべきことがある、袖振り合ふも他生の縁といふではないか。汝と吾とはいは
ば一蓮托生、いつそこの湖に兩人投身しては如何。なまじひに命を長らへむとして恥をかくは
男子たるものの本意ではあるまい。また卑怯未練な心をおこし身を逃れむとして捕虜となり、恥
をさらさば、汝一人の恥のみではない。常世姫の一大恥辱である。覺悟はいかに』
と詰めた。猿世彦は進退きはまり卑怯にも聲を放つて、男泣きに泣きだし、手を合はせて救ひ
を乞ふた。港彦は愉快でたまらず、

『しからば汝の願ひを聞き届けてやらう。その代りに、吾の一つの願ひを聞いてくれるか』
といった。猿世彦は、

『命あつての物種、たとへ貴下が山を逆様に上れと言はれても、吾が命さへ助けたまへば決し
て違背は申さじ』

と答へた。港彦は、

『しからば汝の衣類を脱ぎすて、この湖の中へ投入し、裸になれ』

と命じた。

寒氣の激烈なるこの湖上に、かてて加へて身を切るやうな寒風が吹き荒んでゐる。されど命が大事と猿世彦は、命の【まにまに】衣を脱ぎ捨てた。たちまち菟蕪の幽靈か地震の孫のやうに、ブルブル慄ひだし、つひには手足も凍り息さへ絶えて、完全なる木乃伊になつてしまつた。港彦は言靈別命の土産として、この木乃伊を乗せて乗場に引きかへしたのである。

(大正一〇・一一・二 舊一〇・三 櫻井重雄録)

第五篇 神の慈愛

第二十八章 高白山の戦闘〔七八〕

ここに言靈別命は元照彦と共に、猿世彦の木乃伊にむかひ、前後より神言を奏上し息を吹きかけられた。たちまち猿世彦は體温次第にまし、辛うじて蘇生した。

猿世彦はわが前に、言靈別命以下の神將の姿を見て大いに驚き、ひたすらに生命を救ひ罪を赦されむことを嘆願した。言靈別命は仁義を重んじ生命を救ひしうへ、一片の信書を認め、これを常世姫に傳達せむことを命じた。

猿世彦は唯々として命を拜し、かつ救命の大恩を感謝し、尾をふり嬉々として歸國した。

その信書の文面は、

『言靈別命、元照彦は、勇猛無比の神將をあまた引率れ、スペリオル湖を中心として陣營を造り、

大舉たいきよして常世城とこよじやうを占領せんりやうせむとす。汝なんぢ常世姫とこよひめすみやかに善心ぜんしんに立歸たちかへり、前非ぜんびを悔くい心底しんていより悔くい改あらた

めよ。しからざれば、われはここに天軍てんぐんを興おこして汝なんぢを塵滅あうめつせむ』

との意味いみであつた。猿世彦さるよひこは虎口ここうを免れ、頭かしらをさげ、腰こしをまげ尾ををふりつつ南方なんばうさして遁にげかへ

つた。スペリアル湖畔こはんの陣營ちんえいは、港彦みなとひこをしてこれを守らしめ、命まもは元照彦みこととともに長驅ちやうくして

高白山かうはくざんに進すすんだのである。ここは荒熊彦あらくまひこ、荒熊姫あらくまひめの二神司にしんがあつた。

この二神司にしんは高白山かうはくざんの守將しゆしやうである。

高白山かうはくざんは常世姫とこよひめ一派いっぱの魔軍まぐんに攻め悩なやまされ、二神司にしんはすでに捕虜ほりよとなり、岩窟がんくつを掘ほつて取とじこ

められてゐた。

このとき言靈別命ことたまわけのみことは、山上さんじやうより白雲はくうんの立上たちの上るを見て正ただしき神司かみありと知り、近ちかづき見るに、

常世姫とこよひめの部下ぶか駒山彦こまやまひこが包圍はうゐしてをつた。言靈別命ことたまわけのみことは南方なんばうより、元照彦もとてるひこは西方せいほうより迂回うくわいして北方ほつぱうの

背後はいごに出いで、前後ぜんごより高白山かうはくざんを攻撃こうげきした。駒山彦こまやまひこは不意ふいの強力きやうりよくなる援軍えんぐんに背後はいごを衝つかれ不覺ふかくを

とり、はうはうの體ていにてわづかに身みをもつて免まぬがれ、全軍ぜんぐんはほとんど四方しほうに潰走くわいそうした。

言靈別命ことたまわけのみこと、元照彦もとてるひこは、南北なんぼく兩面より高白山かうはくざんにのぼり、白雲はくうんの立てる岩窟がんくつの戸とを打碎うちくだき、二神司にしんを救すくひ出した。

ここに荒熊彦あらくまひこ、荒熊姫あらくまひめは再生さいせいの恩おんを謝しやし、みづから乞こふて從臣じゆうしんとなり、高白山かうはくざんの城塞じやうさいを言靈別命ことたまわけのみことに奉獻たてまつつた。

言靈別命ことたまわけのみことは元照彦もとてるひこをローマ、モスコつかーに遣つかはして、味方みかたの情勢じやうせいを偵察ていさつせしめ、みづからは荒熊彦あらくまひこを部將ぶしやうとしてここに根據こんきよを定められた。

高白山かうはくざんは常世とこよの國くにの北極ほくきよくにして、世界經綸せかいけいりんの神策上しんさくじやうもつとも樞要すうえうなる地點ちてんである。

(大正一〇・一一・一二 舊一〇・三 外山豐二録)

第二十九章 乙女の天使〔七九〕

言靈別命は、高白山を中心として仁慈をもつて神政をほどこし、諸神は鼓腹撃壤してその堵に安んじ、實に地上の天國といふべき聖代を現出した。命の威望は旭日昇天の勢であつた。荒熊彦は荒熊姫の使喚により、内心時をうかがひ、大恩ある言靈別命を陥れ再び自分が取つて代らむと企みてゐた。かれ荒熊彦は、常世城に密使を立て、常世姫の力を借りて、再生の恩神、言靈別命を亡ぼさむとした。

一旦敗走したる駒山彦は兵備を整へ、遮二無二高白山に攻めかけた。言靈別命は荒熊彦に命じてこれを防がしめた。しかるに荒熊彦はすでに敵軍に款を通じてゐた。

ここに荒熊彦の子に清照彦といふ正しき神司があつた。この度の戦ひに大敗して元照彦のために滅ぼされたりとの風評たかく荒熊姫のもとに届いた。この時元照彦はローマ、モスコの視察

ををへ、高白山の危急に迫れることを聞きて、はるかに神軍を率ゐて應援に來たのである。荒熊姫
は清照彦の、元照彦に亡ぼされし噂を聞きてますます怒り、ここに言靈別命の神軍を率ゐて南方
に陣し、敵軍を防ぐと見せかけ、高白山を陥れむとした。折しも龍馬にまたがり天空を翔り、
高白山の城塞目がけて下りきたる女神使があつた。年いまだ若く容貌秀麗なる天使である。案内
もなく馬を乗りすてて、言靈別命の御座近くすすみ、
『吾は天津神の使神なり。高白山は、今や荒熊彦の變心によつて、危機一髪の間に取り、命の生命
は瞬時に迫りつつあり。命にして吾が天使の言を信じたまはば、われに全軍の指揮を命じたまへ』
といふのである。言靈別命は荒熊彦、荒熊姫を深く信じ、全軍の指揮を委任したるくらゐなれば、
今この天使の言葉を聞いて大いに訝かり、
『汝は天使に化して吾を偽る邪神には非ざるか、汝は常世姫の魔術によりて現はれたる魔神な
らむ』

とただちに劍つるぎを抜ぬきてその女神使によしんに斬きりつけた。電光石火でんくわうせきくわい今いまや天使てんしは頭上づじやうより眞ま二ふたつになりしと

思おもふ瞬間しゆんかん、天使てんしの頭上づじやうより異様いやうの光輝くわうきあらはれ、劍つるぎは三段さんだんに折をれて命みことの手てには柄つかのみ残のこつた。

言靈別命ことたまわけのみことは呆然ぼうぜんとして乙女をとめの天使てんしを眺ながめてゐた。乙女をとめの天使てんしは笑わらひとともに命みことにむかひ、

『もし吾わが言げんを疑うたがひたまはば、高白山かうはくざんは直ただちに滅亡めつぼうすべし。吾われは天津神あまつかみの命めいにより、正ただしき神人かみ

に味方みかたせむとて天てんより救援きうゑんに來きたりしものぞ』

と天神てんしんの神慮しんりよを詳細しやうさいに述のべられたのである。言靈別命ことたまわけのみことはやうやく乙女をとめを天使てんしと信しんずるに至いたつた。

時ときしも門外騷もんぐわいさわがしく、足音あしおと高たかく命みことの前まへに近ちかづき來くるものがある。命みことは怪あやしみて見るみに、荒熊彦あらくまひこ、

鐵棒てつぼうを打ち振うりつつ御座ござ近く迫せまりきたつて、

『言靈別命ことたまわけのみことにただいま更あらためて見參けんざんせん。高白山かうはくざんはすでに常世姫とこよひめの有力いうりよくなる應援おうゑんと、駒山彦こまやまひこの巧妙かうめう

なる戰略せんりやくと、加くはふるに吾われら夫婦ふうふの變心へんしんとによりほとんど全滅ぜんめつせり。もはや命みことの運命うんめいは盡つきたり。

潔いさぎよくこの場ばにて自決じけつさるるや。いたづらに躊躇ちうちよしゆんじゆん逡巡ときして時ときを移うつさるるにおいては、畏おそれながら

吾は、この鐵棒をもつて命を粉碎し奉らむ。返答いかに』

と詰め寄つた。見るより乙女の天使絹子姫はその仲に入り、

『荒熊彦、しばらく待て』

と柔しき女神使に似ず、言葉鋭く皆を釣つて叫んだ。荒熊彦はかよわき乙女と侮り嘲笑つてい

ふやう、

『大廈の覆へらむとするとき、一木のよく支ふべきに非ず。いはんや乙女のただ一柱の如何で

か力及ばむや、邪魔ひろぐな』

と乙女を突き倒さむとした。乙女の天使は聲をはげまし、

『汝天使に向つて挑戦するか。目に物見せむ』

といふより合掌した。勇猛なる神卒はたちまち天より下り、荒熊彦を前後左右に取圍み、つひに

その場に引据ゑた。荒熊彦は膽をつぶし、救ひを求め、かつ總ての罪状を自白し、全軍の指揮權

を返上した。荒熊姫はかかる出来事を夢にも知らず、南麓の原野において元照彦と鎬を削つて

ゐたのである。この時元照彦は深く進みて重圍に陥り、ほとんど全滅せむとする間際であつた。

駒山彦の魔軍はますます勢を得て今や城内に入らむとする。常世姫の應援軍は関をつくつて勢を煽り、侮りがたき猛勢である。この時言靈別命は、乙女の天使に全軍の指揮を命じた。

ほとんど絶望に瀕したる味方の神軍は、にはかに天使の現はれしに勇みたち、勇氣はここに百倍

した。乙女の天使は金の采配を打振り全軍を指揮し、駒山彦の魔軍にむかつて、驀地に突入した。

敵軍は雪崩をうつて、倒けつ轉びつ數多の死傷者を出しつつ、山麓目がけて逃げ散つた。

荒熊彦は改心の上一方の部將となり、常世姫の援軍にむかつて嚴しく攻め入り、奮闘のすゑ

足部に大負傷をなし、身體の自由を失ひ、從臣に救はれやうやく城塞に逃げ歸つた。乙女の天使

は駒山彦の魔軍を破り、再び轉じて荒熊姫の頭上より攻撃をはじめた。荒熊姫は周章狼狽き、つ

ひに乙女の天使にむかつて降を乞うた。ここに乙女の忠告により元照彦に無禮を謝し、高白山は

目出めでたく平和へいわに歸きし、敵てきは四方しほうに散亂さんらんした。

(大正一〇・一一・三 舊一〇・四 加藤明子録)

第三〇章 十曜とえうの神旗しんき〔八〇〕

高白山かうはくざんを中心ちゅうしんとするアラスカ國こくはふたたび平和へいわに治おさまった。常世姫とこよひめはいかにもしてこれを占領せんりやうせむと、多おほくの探女さぐめ醜女しこめを放はなつて、種々しゆじゆの計畫けいくわくを立ててゐるので、少すこしの油斷ゆだんもできぬ有様ありさまであつた。

天使てんしとして下くだり來きたれる絹子姫きぬこひめは言靈別命ことたまわけのみことの身邊しんぺんを衛まもり、かつ不測ふそくの出來事できごとを排除はいじよせむために、
ここに侍女じぢよと身みを變へんじ名なを照妙姫てるたへひめと改稱かいしやうし、命みことの側近そばちかく奉仕ほうしした。

常世姫とこよひめの部將駒山彦ぶしやうこまやまひこはこのことをうかがひ知り、ただちにこれを常世姫とこよひめに通告した。常世姫は

好機逸かうきいつすべからずとなし、みづから龍宮城りゆうぐうじやうにいたつて、稚櫻姫命わかざくらひめのみことに謁えつし、

『言靈別命ことたまわけのみことは高白山かうはくざんに城塞じやうさいを構かまへ、ローマ、モスコの神軍しんぐんと相呼應あひこおうして常世城とこよじやうを屠はふり、つい

で龍宮城りゆうぐうじやうを占領せんりやうせむとし、照妙姫てるとへひめといふ怪あやしき女性をみなを妻つまとなし、神政しんせいを怠おこたり、國土こくどは亂みだれ、晝夜ちうや

閒斷かんだんなく酒色しゆしよくに耽ふけり、荒淫くわういんいたらざるなし。かつ言靈姫ことたまひめを極力きよくりよく誹謗ひばうし、かつ天地てんちに容いれざるの

大叛逆だいはんぎやくを企くはだてをれり』

と誣奏ぶそうした。

稚櫻姫命わかざくらひめのみことは常世姫とこよひめの言ことばを信しんじ、たちまち顔色がんしよくを變へんじて、天使大八洲彦命てんしおほやしまひこのみこと、眞澄姫ますみひめ、言靈姫ことたまひめ、

神國別命かみくにわけのみことその他の諸神將た　しよしんしやうを集めて言靈別命ことたまわけのみことの非行ひかうを傳つたへ、かつ神軍しんぐんをもつてこれを討亡うちほろぼさむ

ことを嚴命げんめいされた。

ここに小島別こじまわけ、竹島彦たけじまひこは大いに喜び、雙手さうしゆをあげて贊成さんせいをとなへた。城内じやうないの諸神將しよしんしやうは常世姫とこよひめの

言げんを疑うたがひ、大廣間おほひろまに諸神司しよしんをあつめて、高白山攻撃かうはくざんこうげきに關くわんする協議けふぎを開ひらいた。

そのとき末席まつせきよりあらはれたる神山彦かみやまひこ、村雲彦むらくもひこ、眞倉彦まくらひこ、武晴彦たけはるひこは一齊いつせいに立ち、大八洲彦命おほやしまひこのみことに

向むかつて發言はつげんをもとめ、言葉ことばも穩おだやかに、

『高白山討伐かうはくざんたうばつの儀ぎは、しばらく吾われらに委まかしたまはずや』

といつた。小島別こじまわけ、竹島彦たけじまひこはたちまち立つて、

『汝なんぢがごとき微力びりよくなる神司かみの、いかでかこの大任たいにんを果はてし得うべきぞ。冀こひねがはくは吾われに少すこしの神軍しんぐんを

與あたへたまはば、吾われは神變しんぺん不可思議ふかしぎの妙策めうさくをもつて、言靈別命ことたまわけのみこと以下いかを捕虜ほりよとし面縛めんばくして、彼らかれを

諸神司しよしんの眼前がんぜんに連れ歸つらむ』

と述べ立てた。神山彦かみやまひこは憤然ふんぜん色いろをなし、

『常世とこよの國くにに使つかひして、言靈別命ことたまわけのみこと以下いかをとり失うしなひ、失敗しつぱいの恥はぢを晒さらしたる汝なんぢら諸神司しよしん、いかなる

妙策めうさくあるとも散々さんざんに討うち悩なやまされ、ふたたび恥辱ちじよくを重かさぬるは火ひをみるよりも瞭あきらかなり。いらざる

ことあ
言擧げして失敗をとるなかれ』

ね
と睨めつけた。

おほやしまひこのみこと
大八洲彦命は、相互の争論のいつ果つるべきやうもなきを見、この場をはづして直ちに
わかざくらひめのみこと はいえつ
稚櫻姫命に拜謁し、

かみ
『いづれの神司を遣はさむや』

おしへ こ
と教を請はれた。稚櫻姫命はこれを聞きて頭をかたむけ、やや思案の體であつた。このとき
ますみひめ ことたまひめ たつよひめ いくどうおん
眞澄姫、言靈姫、龍世姫は異口同音に、

かみやまひこ つか
『神山彦を遣はしたまふべし。彼は忠勇無比の神將にして、かつ至誠至實の神司なり』
そつじやう
と奏上した。かくしてつひに神山彦の進言は容れられた。

かみやまひこ むらくもひこ まくらひこ たけはるひこ とも じゆうしん ひきつ あまのいはくすぶね うちの てんくう
ここに神山彦は、村雲彦、眞倉彦、武晴彦を伴なひ、従臣を引連れ、天之磐樟船に打乗りて天空
たか かうはくざん
高く高白山にむかふた。

とき ことたまわけのみこと かうはくざんじやうさい あんきよ てるたへひめ あらくまひこ もとてるひこ ゆうしやう
時しも言靈別命は、高白山城塞に安居し、照妙姫を侍臣とし、荒熊彦、荒熊姫、元照彦らの勇將
たかだい つき しやう
とともに高臺にのぼり、月を賞してゐた。空は一點の雲もなく、星はほとんどその姿を隠し、
くわうけい
えもいはれぬ光景であつた。

をり とうなん さうくう いつてん こくえい
折から東南の蒼空より一點の黑影があらはれ、おひおひ近づいてくる。一同は何者ならむと
いっしん なが
一心にこれを眺めてゐた。たちまち音響が聞えだした。見れば天之磐樟船である。この船には白地
あか とえう そ しんき た
に赤の十曜を染めだしたる神旗が立つてゐた。ややあつてその船は城内に下つてきた。これは
かみやまひこいつかう の ふね
神山彦一行の乗れる船であつた。

てるたへひめ なにおも はくうん くわ ほそ なが にじ み へん げっかい かへ
このとき照妙姫は何思ひけむ、にはかに白雲と化し、細く長く虹のごとく身を變じて月界に歸
つた。

あらくまひこ かみやまひこ いつかう でむか いんぎん ゑんらい らう しや つかひ おもむき かみやまひこ
荒熊彦は神山彦の一行を出迎へ、慇懃に遠來の勞を謝し、かつ使節の趣旨をたづねた。神山彦
あぎ ただ
は威儀を正して、

『吾は稚櫻姫命の直使なり。言靈別命に面會ををはるまでは、何事も口外することあたはず』

と意味ありげに答へ、

『ただちに命の前へ吾らを導くべし』

といった。荒熊彦は何思ひけむ、得意氣に微笑を洩らしつつ、この由を命に傳へた。

命はただちに應諾して、神山彦一行を居間に導き、まづ來意を尋ねた。神山彦は、

『一大事あり、冀はくは隣神司を遠ざけたまへ』

と申込んだ。ここに言靈別命は隣神司を遠ざけ、

『一大事とは何ぞ』

とあわただしく尋ねた。

(大正一〇・一一・三 舊一〇・四 谷口正治録)

第三章 手痛き握手〔八一〕

神山彦は決心の色をあらはし言靈別命にむかつて、

『貴神は美しき天女のごとき妻ありと聞く、冀はくは吾らに拜謁を許したまはずや』

と出しぬけに申しこんだ。言靈別命は案に相違し、

『こは奇怪なることを承はるものかな、わが妻は汝の知らるるごとく龍宮城にあり』

と答へた。神山彦は、

『そは既に承知せり。第二の妃神に面會したし。祕くさせたまふとも、祕くすよりあらはるるは

なし。すでに妃神のあることは龍宮城に雷のごとく響きわたれり。命は吾らにむかつて詐言を

用ゐたまふや』

と詰問した。命はおほいに困り、

『吾は汝の言はるるごとく第二の妃神を持てる覚えなし。吾高白山の戦ひに敗れ、危機に迫れるとき、天上より乙女の天使下りきたりて吾を救ひ、かつ吾が身邊に侍してこれを保護せり。常世姫はこれを傳へ聞きて、第二の妃神と思ひ誤りしならむ。疑はしくば今ここに天使を招き、もつて汝の蒙を啓かむ』

とたちまち立つて一室に入り、『照妙姫殿、照妙姫殿』と呼んだ。何の返事もなく、そこらには影だに見えぬ。命は不思議にたへず今度は、『乙女の天使絹子姫殿、絹子姫殿』と名をかへて呼びかけた。されども音沙汰も返辭もない。命は荒熊彦に命じて乙女の行衛を嚴探せしめたが、いづこにも乙女の姿を認めることはできなかつた。

命は是非なく一閒へ歸り、神山彦らに向つて、

『今まで吾が前にありし乙女はいかがなりけむ。聲のかぎり呼べど叫べど、何の答へもなし。城内くまなく探せどもその影さへも認めず』

と答へた。こた かみやまひこ 神山彦はニヤリと笑ひ、わら

『天女のごとき妃神二柱までも、左右に侍らせたまふ命の身の上こそ實に羨まし。からかはず
てんによ きさきのみふたはしら さいう はべ みこと み うへ じつ うらや
と早くわれらに會はせたまへ』
はや あ

としきりに嘲笑の色をうかべて促すのである。命はおほいに當惑した。ここに元照彦は戸を排し
てうせう いろ うなが みこと たうわく もとてるひこ と はい
て入りきたり、密室を開きたてまつり、
い みつつ ひら

『吾は申しわけなき次第なれど、大變事出來せり』
われ まを しだい だいへんじしゅつたい

と顔色をかへ進言するのであつた。命は、
がんしよく しんげん みこと

『變事とは何事ぞ』
へんじ なにごと

と反問した。元照彦は、
はんもん もとてるひこ

『ただいま照妙姫命は白雲と化し、月宮殿に歸りたまへり』
てるたへひめのみこと はくうん くわ げつきうでん かへ

といった。言靈別命はおほいに驚き、思はずその場を立ち上がらむとした。このとき神山彦は
ことたまわけのみこと おどろ おも ば た あ かみやまひこ

ことたまわけのみこと たもと
言靈別命の袂をひかへ、

しほら ま
『暫く待たれよ、その計略はもはや古し、ふるし、吾らはかかる奸策に誤らるる神司にあらず、

せいしんせい い ぜんしん た
誠心誠意、善心に立ちかへり、もつて事實の真相を明白に述べられよ』

つめきう はげ
と追窮ますます烈しくなつた。眞倉彦、村雲彦、武晴彦は一齊に立つて刀の柄に手をかけ、満面

ふんど いろ
憤怒の色をあらはし、

いつは あくがみ ちやうほん め ものみ
『われを偽る悪神の張本、目に物見せてくれむ』

さんばう つ
と三方より詰めよつた。神山彦は聲を荒らげ、

だいに きさきがみきぬこひめ まへ だ だいさん きさきがみてるたへひめ
『第二の妃神絹子姫をわが前に出せ。第三の妃神照妙姫をこのところに現はせ。汝は龍宮の使神

べんぜつ ごまくわ ぶれいもの き
を辨舌をもつて胡魔化さむとするか、無禮者、斬つて捨てむ』

かたな つか て きしよく しはう せま みこと しんたいきは
とこれまた刀の柄に手をかけ氣色ばみて四方より迫つた。命は進退谷まり、いかにしてこの疑

は せうりよ くによひめ たま くさぐさもの ひれ くわいちゆう と
ひを晴らさむかと焦慮し、かの國世姫より賜はりし種々物の領巾を懷中より取りいだし、左右左

に打ちふつた。たちまち天に嚙喰たる音楽がきこえ、乙女は閉したる戸のまま、何の障もなく入りきたり、言靈別命の前に平伏した。

ここに神山彦は、【したり】顔に命にむかひ、

『こは照妙姫にあらずや、最早かくなる上は絹子姫も現はし、吾らの疑ひを晴らされよ』

と迫つた。困りはてたる命は、左右左に前の如くに領巾を振つた。たちまち嚙喰たる音楽聞え、

あまたの天女その場に現はれきたつて、四柱の手を把り踊り狂うた。手をとられた四柱は身體た

ちまち強直してその場に仆れ、ここに全く疑ひを晴らし、重々の無禮を陳謝したのである。

眞倉彦、村雲彦は大いに弱り、

『いかに美しき天女なりとて、かかる強き手にて握られては、實にたまつたものにあらず。命は

よくもかかる怪物を相手にしたまひしぞ』

と目と目を見あはせ、舌をまきうち驚く。命は、

『汝らの疑ひ全く晴れたるは相互の幸ひなり。いざこれより遠來の勞を犒はむため、奥殿にて饗應せむ』

と先に立つてゆかむとした。そのとき神山彦は、

『しばらく待たれよ。申し上げたき仔細あり』

と引きとどめ、

『これから肝心要の正念場なり。この返答承はりしのち饗應に預からむ』

と四柱はともに聲を揃へていきまきながらいった。

(大正一〇・一一・三 舊一〇・四 櫻井重雄録)

第三二章 言靈別命の歸城〔八二〕

かみやまひこ　あぎ　ただ　ことば　あらた
神山彦は威儀を正し、言葉を改め、

わかざくらひめのみこと　ちよくし
『稚櫻姫命の直使として貴神に傳ふべきことあり。貴神はローマ、モスコーにあまたの神軍を

はいち　いま　かうはくざん　ぢんえい　ひさ　りゆうぐうじやう　かへ　なにゆゑ　いちじ　はや
配置し、今またこの高白山に陣營をかまへ、久しく龍宮城へ歸りきたらざるは何故ぞ。一時も早

くローマ、モスコーの神軍を解散し、當城をすてて龍宮城に歸り、稚櫻姫命の疑を晴らすべ

し』

けしき　はないき　の　ことたまわけのみこと　こた
と氣色はげしく鼻息たかく述べたてた。言靈別命は答へて、

わかざくらひめのみこと　しんい　いま　ましん　てんか　ばつこてうりやう　いきほひ　あなど
『稚櫻姫命の眞意はさることながら、今や魔神は天下に跋扈跳梁して、勢なかなか侮るべか

らず。吾らが今、ローマ、モスコーに神軍をあつめ、また當山に城塞をかまへて神軍を集むるは、

ち　たかあまはら　まも　たてまつ　わかざくらひめのみこと　そうめい　しんぐん　あつ　ふじん
地の高天原を守り奉らむがためなり。いかに稚櫻姫命は聰明におはしますとも、元來は婦神の

かな　ひかくてき　ごしんりよあさ　ぎねんふか　つね　とこよひめ　かんねいじやち　かみ　しんにん
悲しさ、比較的その御神慮浅く疑念深く、常に常世姫のごとき奸佞邪智の神を信任し、つひには

こんてい　しんせい　くつが　ひ　あきら　わがはひ　ぜんち　じつ　てんし
根底より神政を覆へされたまふは、火をみるより瞭かなり。われはこの災禍を前知し、實は天使

おほやしまひこのみこと　ますみひめ　はか　まんいち　そな　くりよ　しりよあさ　によしん　せうしん　し
大八洲彦命、眞澄姫と謀り、萬一に備へむとして苦慮せるなり。思慮淺き女神、小神の知るところに非ず』

ふんぜん　せき　ひとま　か　い　かみやまひこ　くわいちゆう　たんけん　とり
と憤然として席をけり、一間に駆け入らむとした。このとき神山彦は懷中より短劍を取りだし、
もろはだ　ぬ　かつぶく　まくらひこいかにしん　われおく　いちじ　もろはだ　ぬ　たんたう　はら
兩肌を脱いで割腹せむとした。眞倉彦以下二神司も、吾後れじと一時に兩肌を脱ぎ短刀にて腹を
掻ききらむとす。

ことたまわけのみこと　み　おどろ
言靈別命はこれを見ておほいに驚き、

しよしん　ま　はや
『諸神しばらく待たれよ。逸まりたまふな』

よはしら
ととどめむとした。四柱は、

みこと　りゆうぐうじやう　かへ
『しからば命は龍宮城へすみやかに歸りたまふや』

と　みこと　こた　といき　しあん　かみやまひこ　けつしん　いろ
と問ひつめた。命はいかに答へむと太息をもらし、思案にくれた。神山彦は決心の色をあらはし、
かへ　わかざくらひめのみこと　たてまつ　ちんべん　じ　し　いさぎよ　もろとも　じさつ
『われは歸りて稚櫻姫命にたいし奉り、陳辨の辭なし。如かず、ここに潔く諸共に自殺して、

その責任を明らかにせむ』

と又もや短刀を逆手に持ち、四柱一度に割腹せむとする。

このとき言靈別命は心中にて、吾は天下を救はむと思へばこそ、寒風強き極北に種々の苦難を嘗めつつあるのである。されど眼前に、かかる忠誠なる神司の自殺の慘状を看過するに忍びず、アゝいかにせむと、その刹那の苦痛は實に言辭の盡すべきかぎりでなかつた。

命は意を決し、

『しからば神山彦の言葉を容れ、すみやかに歸城すべし』

と決心固くのべた。ここに一行は大いによるこび自殺を思ひとどまり、その場は無事に治まつたのである。言靈別命はやむをえず、一まず神山彦一行とともに歸城せむとするに際し、元照彦を一閒に招き、清照彦の所在を教へ、かつわが妹の末世姫を娶し、齋代彦を相そへて、海峽をこえ、長高山の北方に都を開き、時期を待ちつつあることを密かに告げた。

しかして高白山は元照彦を主將とし、荒熊彦を部將としてこれを守らしめ、天の磐樟船に乗りて、神山彦一行とともに目出度く龍宮城へ歸還した。

龍宮城にはかに色めきたつて、諸神司の悦びはたとふるにもものなき有様で、春陽の氣は城内に溢れた。常世城よりきたれる常世姫のみは、何ゆゑか顔色が平常よりも冴えなかつた。

言靈別命はただちに奥殿に入り、稚櫻姫命に謁した。かたはらに常世姫、龍世姫、眞澄姫は侍してゐた。言靈別命は歸城の挨拶を慰懃にのべた。稚櫻姫命は歸城を悦び、いろいろの飲食を出して饗應された。

常世姫はたちまち口を開いて命にむかひ、

『高白山は全く滅亡し、汝は進退きはまり九死一生の悲境にありしを、稚櫻姫命の大慈悲心よ

り窮場を救はれしは、定めて満足ならむ。すみやかに命にその大恩を謝したまへ』

と言葉を鼻にかけて嘲笑ひつつ、いと憎氣に言ひはなつのであつた。

言靈別命は立腹のあまり、高白山の實情を述べむとし、口を開かむとする時、常世姫は遮つて、

『敗軍の將は兵を語らず。默したまへ』

と頭から押へつけた。また言葉をついで、

『汝は命に背き、ローマ、モスコに陣營を構へたが、これまた荒熊彦のために一敗地に塗れ、

汝にしたがひし諸神將卒は四方に散亂して、今は残らず天下に放浪のあはれ果敢なき者となつ

てゐる。汝はこの失敗に省み、今後は心を改めて命の嚴命に服従し、かつ吾は女性なれども、

わが言も少しは用ゐられよ』

と舌長に上から被せかけるやうに言つた。

言靈別命は怒りを忍び、わざと笑つてその場をすました。今後この二神司の關係はどうなる

であらうか。

(大正一〇・一一・三 舊一〇・四 外山豊二録)

第三章 焼野の雉子〔八三〕

高白山の陣營は、元照彦代つてアラスカ全土を治めてゐた。

ここに常世姫の部將猿世彦は、スペリオル湖において一たん救けられたが、たちまち變心して常世姫の命をふくみ、駒山彦の高白山下の隠れ家にいたり、ふたたび高白山占領の計畫を執拗に企ててゐた。

まづ第一に荒熊姫を説きおとす必要を感じ、種々の手段をもつて荒熊姫に密會した。荒熊姫は元照彦にその子清照彦の亡ぼされしことを、常に恨んでゐた。彼にとつて、仇敵を主將と仰ぎつかふるは、實に無限の苦痛であつた。ある時はその寢室にしのび入り、一刺にこれを刺殺し、吾兒

の仇あだむくを報いむと考かんがへたこともしばしばであつた。

かかる考かんがへを抱いだいてゐる荒熊姫あらくまひめにひそかに面會めんくわいをもとめた。猿世彦ざるよひこ、駒山彦こまやまひこは荒熊姫あらくまひめにとつ

ては實じつに強大なる味方きやうだいを得たえごとく感ぜられた。

猿世彦ざるよひこ、駒山彦こまやまひこは荒熊姫あらくまひめにむかひ、

『貴下きかは子の愛あいを知れりや』

と問ふた。荒熊姫あらくまひめは涙なみだを腮邊しへんに垂らしつつ、

『焼野やけのの雉子夜きぎすよるの鶴つる、子を憐あはれまざるはなし。ましてや天てんにも地ちにも杖柱つゑはしらとたのむ最愛さいあいの子こを討うた

れ、老おいの身みの味氣あぢけなき世よを送る吾われらの境遇きやうぐう、推量すゐりやうされよ』

とその場ばによよと泣なきふれた。

ふたりは策さくのあたれるを喜び、さも同情どうじやうの念ねんに堪たへざるごとく、ひそかに兩眼りやうがんに唾つばきをぬり、

泣顔なきがほをつくり、さも悲かなしさうにオイオイと泣なきくづれた。荒熊姫あらくまひめは居たたまらず、共に聲こゑを放はなつ

て泣きさけんだ。

荒熊彦はその泣聲を聞いて馳せきたり、見れば三柱のこの状態である。荒熊彦は聲を勵まして、

『かかる太平の御代にあたつて何を悲しむか』

と尋ねた。三柱はその聲に驚いて一度に顔をあげた。見れば敵軍の駒山彦、猿世彦がその場にあ

つた。

荒熊彦は大いに憤り、荒熊姫にむかつて、

『汝は何故にわれの承認をも得ず、男性をわが居間に引入るのみならず、このふたりは敵方の

謀將である。實に汝の舉動こそ訝かしきかぎりなれ』

と怒りとともにその不都合を詰つた。ここに荒熊姫は泣きたふれつつ、

『愛兒の清照彦を亡ぼせしは元照彦の部下である。しかるに今や何の因果ぞ、吾子の仇を主將と

して仰ぎ、これにまめまめしく仕ふるは實に残念である。時世時節とは云ひながら、かかる悲惨

なことが何處いづくにあらうか』

と、いと悲かなしげにいふのであつた。猿世彦さるよひこ、駒山彦こまやまひこはすかさず荒熊彦あらくまひこにむかひ、今日こんにちまでの無禮ぶれいを謝しやした。さうして、

『吾われらふたりは最愛さいあいの獨兒ひとりごを彼元照彦かのもとてるひこの部下ぶかに殺ころされ、無念むねんやるかたなく、いかにしてもこの仇あだを報はうぜむと日夜肺肝にちやはいかんをくだいてゐた。貴下きかは勇壯活潑ゆうさうくわつぱつにしてわが兒この愛あいには溺おほれたまはず、

ときよじせつ 仇敵きうてきにまめまめしく奉仕ほうしさるるは、實じつにお心こころの美うるはしき次第しだいである。さ

れど金銀珠玉きんぎんしゆぎよく、その他たあまたの寶たからありといへども、吾兒わがこにまさる寶たからは、天地てんちの閒あひだにあらじと思おも

ふ。貴下きかはこれでも愛兒あいじの仇あだを討うちたまふ御心みこころはなきや』

といつて、荒熊彦あらくまひこの顔色がんしよくいかにと見詰みめてゐた。

荒熊彦あらくまひこは默然もくねんとして何なんの返事いらへもなく、さしうつむいて思案しあんにくれてゐたが、たちまち兩眼りやうがんより

は豆まめのごとき涙なみだがはふり落おつる。

元來、荒熊彦は言靈別命を亡ぼし、自分がとつて代らむとし、駒山彦に一時款を通じたる

關係上、今は敵味方と區別はあれど、子を思ふ一念は少しも變りはない。同病相憐むの念より、

叛心をおこし、駒山彦らとともに元照彦を亡ぼし、みづから主將となりアラスカの王たらむとした。

ここに荒熊姫は偽つて元照彦を殺さむとし、事をかまへて拜謁を乞ふた。元照彦は何の氣もな

く面會を許した。見れば荒熊姫は表面笑を含み、何心なき體を装ふてゐたるが、その面上には

陰險なる毒氣を含んでゐた。

元照彦はこれを怪しみ、ただちに荒熊姫の兩手を後へ捻まはし、堅く柱に縛りつけ酷しく訊問

をはじめた。荒熊姫は知らぬ知らぬの一點張りである。勝敗いかにと氣遣ひたる荒熊彦、猿世彦、

駒山彦はこのとき折戸を押しわけ亂入し、矢庭に元照彦を目がけて斬つてかかった。

元照彦は三柱を相手に、しばしは火花を散らして鬭ふたが、つひに山を下り、身をもつて逃れ、

ローマをさして遠く落ちのびた。かくして高白山は全く荒熊彦の手に落ちた。

(大正一〇・一一・三 舊一〇・四 谷口正治録)

第三章 義神の参加〔八四〕

ここに常世姫は龍宮城に入りて種々の策をめぐらし、巧言令辭をもつて諸神司を藥籠中のものにせむとした。されど城内の諸神の大半は依然として言靈別命、神國別命に心服してゐたのである。されど執拗なる常世姫の魔の手は、油のにじむがごとく暗々裡に擴がつてゆく形勢となつた。

ここに言靈別命は神國別命と謀り、花森彦をして神務を總轄せしめ、二神司は各自に天下の

義神ぎしんを募つるべく東西とうざいに袂たもとを分わかつた。

茲ここにペテロの都みやこに聲望せいぼう高き道貴彦みちたかひこといふ義勇ぎゆうの神司かみがあつた。言靈別命ことたまわけのみことは村幸彦むらさちひこを遣つかはして味方みかたに参加さんかせしめむとし、大神おほかみの御經綸ごけいりんを詳細しやうさいに説明せつめいせしめた。道貴彦みちたかひこは謹つつしんでその神慮しんりよを奉ほうじ、ペテロの館やかたを捨て妻葭子姫つまよしこひめとともに、村幸彦むらさちひこを介かいしてつひに龍宮城りゆうぐうじやうに出仕しゆつしすることとなつた。

これより先さきき言靈別命ことたまわけのみことはペテロの道貴彦みちたかひこの館やかたにいたり、神界しんかいの經綸けいりんを逐一ちくいちせつめい説明みちたかひこした。道貴彦みちたかひこはすでに決心けつしんを定め、今いまや龍宮城りゆうぐうじやうにむかつて出發しゆつぱつせむとするとき、その弟おとうとなる高國別たかくにわけきたりて出發しゆつぱつを妨害ぼうがいせむとした。高國別たかくにわけは大酒おほざけを煽あふりきたりて道貴彦みちたかひこの愚蒙ぐもうを罵ののしり、かつ葭子姫よしこひめをとらへて、

『汝なんぢは何ゆゑに夫なにの館をを捨て怪あやしき龍宮りゆうぐうの神人かみに誑惑けうわくされ、つひには噬臍ぜいせいの悔くいを残のこさむことを知しりながらこれかんしを諫止かんしせざるや』

と聲こゑも荒あらく睨ねめつけた。葭子姫よしこひめは言葉ことばをつくして、

『神界の一大事は刻々に迫りつつあり、わたくしはこの大事を看過するに忍びず、むしろ妾より進んで夫に勧め、もつて神業に参加せむとしたるなり。貴下も一身の利欲を捨て一切の寶を擲ち、吾らとともに神界のために盡されよ』

と事をわけ理をつくして説き諭した。高國別はますます怒り、

『女神と小神とは養ひがたしとは汝がことなり。女性の世迷言、耳をかすに足らず』

といふより早く杯を取つて葭子姫めがけて打ちつけた。その時、仲國別走りきたりて高國別をとつて押へた。この神司は勇力無比の巨神司であつた。

高國別はこの巨神司に取押へられ、無念の齒を喰ひしりながらも、口をきはめて言靈別命、道貴彦らを惡罵し、かつ、

『吾はたとひ汝に生命を奪はるるとも、吾精魂は再生して汝らの計畫を破壊すべし』
と聲を勵まして叫んだ。このとき村幸彦は顔色を和らげ、言葉も穩かに仲國別にむかひ、

『まづ高國別を許し、吾言を心靜めて聞かれよ』

といった。

仲國別はその言葉を機に、高國別を捻伏せたる手を放ち、しづかに座についた。高國別は直ちに起きあがり、仲國別にむかつて、血相をかへて死物狂ひの體で飛びついた。村幸彦は襟髪とつて引きもどし、靜かに端座せしめ、怒りに狂ふ高國別をなだめて大義名分を説き、かつ、

『貴下の、祖先の館を大切に保護せむとせらるるその誠意は大いに愛するにあまりあり、されど神界は危急存亡の場合に瀕せり。一身をすて總ての執着を葬つて義に殉ずるは、大丈夫の本懷たらずや。吾も今まで住の江の館に、心安く親子樂しき日を送りたるものなるが、今回の神界の大望にたいし、すべてを捨てて神業に参加せしものなり。貴下もいま一つ心を取り直し、想ひをかへ、冷靜に天下の大勢を顧みられなば、道貴彦の今回の決心は氷解せむ』

と諄々として説き諭したのである。ここに高國別ははじめて悟り、

『貴下きかの言葉實ことばげにもつともなり。吾われはしばしこの館やかたにありて固く守るべし。なにとぞ道貴彦みちたかひこ以下の神將しんしやう、くれぐれも頼たのみたてまつる』

と顔色がんしよくをやはらげ心底しんていより感謝かんしやした。一場いちぢやうの波瀾はらんは平和へいわに納まり、ここに盛大せいだいなる祝宴しゆくえんを開き、道貴彦みちたかひこは言靈別命ことたまわけのみことの諸神司しよしんに従したがひて、龍宮城りゆうぐうじやうにむかつて参向さんかうした。

言靈別命ことたまわけのみことは有力いうりよくなる神將しんしやうをえて大いに喜び、ここに道貴彦みちたかひこ、花森彦はなもりひこをして、新あらたに龍宮城りゆうぐうじやうの大門おほもんの部將ぶしやうとして、入り來るあまたの神々の正邪善惡せいじやぜんあくを審判しんぱんせしむる重要な職務ぢゆうえうを命めいじた。一方いつぱう、常世姫とこよひめは魔我彦まがひこ、魔我姫まがひめをして城内じやうないの様子やうすを隈なく探らしめ、かつ言靈別命ことたまわけのみこと以下の神司かみがみの動靜どうせいを監視かんしせしめおき、みづからは一先づ常世城ひとまに歸かへつた。

(大正一〇・一一・四 舊一〇・五 加藤明子録)

第三章 南高山の神寶〔八五〕

龍宮城の表大門口は花森彦、道貴彦二神司が控へてゐた。この時、天下の形勢を憂へ、四方八方より神業に参加せむとして集まる神司は日増しに殖えてきた。折しも東の空より怪しき光を放つて入り来る神司があつた。この神司を若豊彦といふ。若豊彦は常世の國にありて、數多の神司と共に神界を救ふべく種々の畫策をなし、一時は一方の主將となり聲望を遠近に轟かした神司である。然るに時節非にして大自在天の忌諱にふれ、たちまち猛烈なる攻撃にあひ、カシハ城をすて味方は四方に散亂し、自分はわづかに身をもつて免れた。この神司はいかにしても初志を達せむとし、散り失せたる味方の神將を集めむとしたが、カシハ城の陷落のために、目的を達することができなかつた。ここにおいて、地の高天原に稚櫻姫命あらはれ神政成就の經綸を起したまふと聞き、自分もその幕下に参加せむとし、はるばる尋ねてきたのである。道貴彦、花森彦

はいつけん一見してその眞偽しんぎを疑うたがひ、これを言靈別命ことたまわけのみことに進言しんげんした。言靈別命はただちに神國別命かみくにわけのみことに命めいじて、その正邪せいじやを審判しんぱんせしめた。八咫やあの大廣間おほひろまに連れゆき、ここに嚴肅げんしゆくなる審神さにはがはじまつた。
若わか豊彦とよひこの肉體にくたいには數多あまたの邪神じやしんがひそかに憑依ひよういしてゐた。大神おほかみの神殿しんでんに端座たんざし、神國別命かみくにわけのみことの審神さにはを
受うくるや、たちまち憑靈現ひようれいあらはれて前後左右ぜんごさいうに飛びまはり、野天狗のてんぐ、野狐のぎつね、惡蛇あくじや、狸たぬきの類たぐひさかん
に飛びだし、その數かずは幾いく十百じふひやくとも數かずふるに違いとまなきほどであつた。これらの數多あまたの邪靈じやれいは美山彦みやまひこの
部下ぶかの魔神まがみであつて、若わか豊彦とよひこの體たいに憑依ひよういし龍宮城りゆうぐうじやうに深く忍しのび入いらむとした。ここに嚴肅げんしゆくなる審神さには
によつて邪靈じやれいは全部ぜんぶその正體しやうたいを露あらはし、四方八方しはうはつぱうに逃にげ散ちつた。
邪靈じやれいの退しりぞきさつた若わか豊彦とよひこは、はじめで本心ほんしんにたちかへり、正ただしき神司かみとなつて龍宮城りゆうぐうじやうに奉仕ほうしす
ることとなつた。そこで言靈別命ことたまわけのみことは花森彦はなもりひこを神務しんむにつかしめ、若わか豊彦とよひこには、その後あとを襲おそはしめた。
それより表大門おもておほもんは道貴彦みちたかひこ、若わか豊彦とよひこの二神にしんが嚴守げんしゆすることとなつた。若わか豊彦とよひこは漸次ぜんじすすんで、
言靈別命ことたまわけのみことの帷幄ゐあくに參さんずるやうになつた。

わかとよひこ みこと ないめい てん たかあまはら てんじやう もつと いうりよく めがみ たかてるひめのみこと
若豊彦は命の内命をうけ天の高天原にいたり、天上において最も有力なる女神の高照姫命を
ひやつばうちから と りゆうぐうじやう くだ たかてるひめのみこと じやうない しよしん むか
百方力をつくして説きつけ、龍宮城に下つてきた。ここに高照姫命は城内の諸神司に迎へら
れ、鄭重なる饗應を受け、ついで稚櫻姫命に謁し、天上における混亂の状態を詳細に宣り傳へ、
かつ天上を修理固成し、眞の天國たらしめむとせば、まづ地上の修祓を第一着とするの必要な
ことを詳細に宣示された。

わかざくらひめのみこと しんい りやう てんちあひおう しんげふ さんか たが あひやく
稚櫻姫命はその眞意を諒し、ここに天地相應じて、神業に参加せむことを互ひに相約された。
とき あめ やちまた たかてるひめのみこと やうす おほまがひこ ば あら
この時、天の八衢より高照姫命の様子をうかがひ、ひそかに跟けきたりし大魔我彦はその場に現
はれて、

われ りやうしん ひみつ けいくわく のこ き いちぶしじふ やつわうだいじん はうこく
『吾は兩神の祕密の計畫を残らず聞きたり。さればこれよりこの一伍一什を八王大神に報告し、
もつて根底より破壊せしめむ。後悔するな』

い すがた け こくうん いちはや どうはう てん むか さ りやうしん ましん
と言ひをはるとともに、姿を消し黒雲となつて逸早く東方の天に向つて去つた。兩神司は魔神に

神策しんさくの暴露ばくろせむことを恐れ、奥殿おくでんに入つて深く戸を閉ぢ、眞澄姫ますみひめを加へて種々の協議けふぎををへ、その結果、言靈別命ことたまわけのみことを招き神界の祕策ひさくを授けられた。

言靈別命ことたまわけのみことは高照姫命たかてるひめのみことを先頭に、神國別命かみくにわけのみこと、花照姫はなてるひめ、火水姫かみひめ、梅若彦うめわかひこ、廣照彦ひろてるひこ、秋足彦あきたるひこ、村幸彦むらさちひこ、

若豊彦わかとよひこ以下五神將をともなひ、長驅ちやうくして南高山なんかうざんに微行することとなつた。このときの天の八衢やちまたに

待ち伏せたる大魔我彦一派おほまがひこいつぱは、一行の乗れる天の磐船いはふねを覆へさむとし、數多あまたの部下ぶかを引き連れ、

醜しこの磐船いはふねをあまた狩り集め、中空ちゆうくうにありて盛んに攻撃こうげきをはじめた。

高照姫命たかてるひめのみことの一行は、ただちに方向を變じて北方に引きかへし、東方とうほうの天にめぐり、つひに東北とうほく

さして大空高く、やうやくにして南高山なんかうざんに到着した。

南高山なんかうざんは天上より下りたる種々の神寶しんぼうの祕藏ひざうされし靈山れいざんである。五六七神政成就のため使用しよう

すべき種々の神物が充滿してゐる。高照姫命たかてるひめのみことは、一切を言靈別命ことたまわけのみことに授け、

若豊彦わかとよひこを従へて一旦天上に歸られた。言靈別命ことたまわけのみこと一行は一切の祕密を固く守り、目出たく龍宮城りゆうぐうじやう

へ歸還きくわんした。この南高山なんかうざんの神物しんもつは、他の神司かみがみには少しも點檢てんけんを許さず、言靈別命ことたまわけのみことただ一柱ひとしらがこ
れを舊もとのごとく祕ひめおかれた。

(大正一〇・一一・四 舊一〇・五 櫻井重雄録)

第三十六章 高白山かうはくざん上の悲劇ひげき「八六」

もとてるひこ かうはくざん やぶ
元照彦は高白山に敗れ、部下の神軍しんぐんを狩り集め、長驅ちやうくしてローマのに遁れ、ここにしばらく駐屯ちうとん
し、モスコーをへて清照彦きよてるひこの立てこもれる長高山ちやうかうざんに到着し、清照彦きよてるひこ、末世姫すゑよひめに會くわいし、荒熊彦あらくまひこ以下
の反逆無道の詳細しやうさいを物語ものがたった。荒熊彦あらくまひこ、荒熊姫あらくまひめは前述ぜんじゆつのごとく、清照彦きよてるひこの父母ふぼに當る神である。
ここに清照彦きよてるひこは父母ふぼの慘虐無道なる行爲かうゐを諫め、善心ぜんしんに立返らしめむとして侍臣じしんに命じ、天あまの

鳥船を遣はして、高白山の城塞に信書を送つたのである。その信書の意味は、

『父母の二神は再生の大恩ある言靈別命に背き、かつ天地の法則に違ひ大義名分忘れたる其の非理非行を諫め、かつわれは慈愛深き言靈別命の妹末世姫を娶りて今や長高山にあり。すみやかに悔あらためて常世姫をすて、恩神に従來の無禮を謝し、ただちに忠誠の意を表するべし。もし言靈別命にしてこれを許したまはざる時は、兩神には、すみやかに自決されむことを乞ふ』

といふ信書であつた。

荒熊彦夫妻はこの信書を見て、清照彦の安全なるを喜び、またその信書の文意にたいして大いに驚きかつ悲しんだ。されど二柱はいかに最愛の兒の言なりとて、直ちにこれを容れ、言靈別命に歸順せむとせば、強力なる常世姫に討伐されむ。また常世姫に隨はば、最愛の兒に捨てられむ、とやせむ角やせむと二柱は煩悶し、その結果つひに荒熊彦は病を發し、身體の自由を失ふにいたつた。荒熊姫は日夜に弱りゆく夫の容態を眺めて心も心ならず、かつ清照彦の忠告を思

ひ浮うかべて、矢やも楯たてもたまらず、胸むねに熱鐵ねつてつを飲のむごとく思おもひわづらつた。この様子やうすを怪あやしみ窺うかがひたる駒山彦こまやまひこは、荒熊姫あらくまひめの居間ゐまを訪とひ、

『前さきごろより貴下きかふうふ夫婦やうすの様子やうすをうかがふに、合點がつてんのゆかざることのみ多おほし。貴下きからにして吾子わがこの愛あいに溺おぼれ、常世姫とこよひめに背そむきたまふにおいては、われは時ときを移うつさず委細ゐさいを常世城とこよじやうに注進ちうしんし、反逆はんぎやくの罪つみを問とひ、もつて貴下きかを討うち奉たてまつるべし』

と顔色がんしよくをかへて詰めかけた。このとき天空高てんくうたかく、天あまの鳥船とりふねに乗りてきたる美うつくしき神司かみあり。こは長高山ちやうかうざんより翔かけきたれる第二だいにの使者ししやであつた。荒熊姫あらくまひめは駒山彦こまやまひこを賺すかして自みづから應接おうせつの間まに出いで、第二だいにの使者ししやより信書しんしよを受取うけとり披見ひけんした。

その文面ぶんめんによれば、

『われ先さきに使つかひをつかはして、父母二神ふぼにしんの改心歸順かいしんきじゆんを勸め奉すすりたり。されど使者ししやは久ひさしきに亘わたる

も歸りきたらず。惟ふにわが言を用ゐたまはざるものとみえたり。われは骨肉の情忍び難しといへども、大義名分上、やむを得ず貴下を天にかはつて討滅せざるべからざるの悲境に陥れり。ああ、忠ならむとすれば孝ならず。孝ならむとすれば忠ならず。わが萬斛の涙は何れに向つて吐却せむ。されど大義には勝つべからず。骨肉の情をすて、天に代つて、すみやかに神軍を率ゐ、海山の恩ある兩親を滅ぼさむとす。不孝の罪赦したまへ』

との信書であつた。

荒熊姫は第二の信書を見て、ただちに一室に入り短刀を抜いて自刃せむとする時しも、蒼惶しく戸を押し開け、「暫く、しばらく」と呼ばはりつつ駒山彦が現はれ、その短刀をもぎ取り言葉をはげまして曰く、

『主將は病の床に臥し、高白山はその主宰者を失はむとす。加ふるに貴下は短慮を發し、今ここに自刃して果てなば、當城はいづれの神司かこれを守るべき。逃げ去りたる元照彦は、何時神軍

を整へ攻め来るや圖り難し。われはかかる思慮淺き貴下とは思ひ設けざりき。さきに怒りて貴下を滅ぼさむと云ひしは、われの眞意に非ず。貴下の決心を強めむがためなり。かかる大事の場合、親子の情にひかれて敵に降り、あるひは卑怯にも自刃してその苦を免れむとしたまふは、實に卑怯未練の御振舞なり。善に強ければ悪にも強きが將たるものの採るべき途ならずや』

と涙とともに諫める。病の床に臥したる荒熊彦は俄然起あがり、

『最前より始終の様子ことごとく聞きたり。今や詮なし、大義をすて、親子の情を破り、もつて常世姫に忠誠を捧げむ。荒熊姫の覺悟やいかん』

と言葉鋭く迫つたのである。荒熊姫は大聲をあげて涕泣し、狂氣のごとく吾胸を搔むしり、

『われを殺せよ、わが苦痛を救けよ』

と藻搔くのである。ここに第一、第二の使者は、この様子を見て元のごとく、天の鳥船に乗り西北の空高く長高山に歸つた。

(大正一〇・一一・四 舊一〇・五 外山豊二録)

第三十七章 長高山の悲劇〔八七〕

長高山の城塞には清照彦、末世姫、元照彦とともに、高白山に遣はしたる使者の歸還を待つてゐた。そこへ第一、第二の使者は天空をかすめて一度に歸つてきた。

様子いかにと待ちかまへたる清照彦は、ただちに使者を居間に通した。使者は荒熊彦夫妻の反逆心ますます強く、かつ常世姫の壓迫はげしく、駒山彦は容易に従はず、やむを得ず、言靈別命に反抗を繼續するの決心確なりと報告した。

清照彦はしばし默然として頭を垂れ、吐息をつき思案にくれた態であつた。末世姫の顔には憂ひの雲が漂うた。

やがて清照彦は翻然としてたち上り、部下の部將を集めて、

『吾らの強敵は高白山にあり。早く出陣の用意に取りかかれ』

と命令を發した。數多の部將は時を移さず群臣を集め、部署を定め、命令一下せばたちまち出發せむと、數萬の鳥船を用意した。清照彦は一室に入つて獨語した。

『あゝ天なる哉。吾父母を救ひたる恩神にたいし、背かばこれ天の道に非ず。さりとして又、山海の鴻恩ある父母を討たむか、これまた天の理に反くものなり。されど大義は炳然として日月の如し。あゝ、鴻恩ある父よ、母よ、吾不孝の罪を赦したまへ』

かく言ひて涙に暮るるをりしも、最前より様子を窺ひるたる末世姫は、あわただしく入り來つて、清照彦の袖をひかへ、

『夫神、かくまで決心したまひし以上は、妾はいかにとどめ奉らむとするも、とどまりたまはざるべし。されど、父の恩は山より高く、母の恩は海より深しと聞く。いかに大義を重んずれば

とて、現在げんざい骨肉こつにくの父母ふぼを殺ころしたまふは、いかに時世ときよじ時節せつとは申しながら悲惨ひさんのきはみなり。希こひねがは

くはわが夫をつとよ、今日こんにちの場合は嚴正げんせいなる中立ちゅうりつを守り、もつて忠孝ちゅうかう兩全りやうぜんの策さくを建てさせ給たまへ』

かく言いつて末世すゑよひめ姫かは搔くき口説くどくのである。このとき清照きよてるひこ彦が、慨然がいぜんとして立ち上たり、

『一旦いったん、男子だんしの身みとして決心けつしんの臍ほぞを固かためたる以上いじやうは、善惡ぜんあく正邪せいじやは免とも角かく、初志しよしを貫徹くわんでつせざれば止や

まず。女子によしの喧やかましく邪魔じやまひろぐな』

と云いひも終をらず、袖そでふり拂はひ、今いまや出陣しゅつちんの用意よういにかからむとした。末世すゑよひめ姫ははただちに一室いつしつに入り、
懷劍くわいけんを逆手さかてにもち、咽喉のどを搔かき切きつてその場ばにうち倒たふれた。清照きよてるひこ彦あやは怪ものしき物音おとにうち驚おどろき、

一室いつしつに走り入はしり見みれば、こはそも如何いかに、末世すゑよひめ姫あけは朱そまに染もり、悶もだえ苦くるしみつつあつた。

清照きよてるひこ彦ありさまはこの有様みを見て何思なにおもひけむ、たちまち大刀だいたうを抜き放はなち、雙肌もうはだを脱ぬぎ、しばらくこれを

打ち眺うめてありしが、たちまち決心けつしんの色いろをあらはすとともに、刀かたなを逆手さかてに持ち、左腹さふく部ぶよりこれ

を突き切つらむとする一刹いちせつ那な、元照もとてるひこ彦さは差し足あし抜き足あししのび寄り、その大刀だいたうをもぎとり聲こゑをはげま

して、その不覺を戒しめた。

時しも天空とどろきわたり、天の磐船に乗りて降りきたる神司があつた。これは龍宮城より派遣されたる梅若彦である。ただちに案内もなくツカツカと奥殿に入りきたり、清照彦に大神の命を傳へむとした。

清照彦は使者の來臨に驚き、ただちに容をあらため、襟を正し、梅若彦を正座に直し、自らは遠く引下つてその旨を承はらむことを申し上げた。

梅若彦は懷中より恭しく一書を取り出し、これを頭上に捧げ披いてその文面を読み傳へた。その文意は、

『荒熊彦、荒熊姫、駒山彦ら、常世姫に内通し、高白山を根據とし、つひに龍宮城を占領せむとす。汝は元照彦に長高山を守らしめ、みづから神軍を率ゐて高白山を攻め、彼ら魔軍を剿滅せよ』

との嚴命である。しかし言靈別命は大慈大仁の神なれば、決して内心清照彦をして父母の兩親を討たしめむの心なし、ただ清照彦をして父母兩親を悔い改めしめ、最愛の兒の手より救はしめむとの神慮であつた。清照彦は深き神慮を知らず大義名分を重んじ、つひに父母兩神を涙を振つて攻撃した。すなはち清照彦の心中は熱鐵をのむよりも苦しかった。されど大命は黙しがたく謹んで拜命の旨を答へた。

梅若彦は吾が使命の遂げられたるを喜び、

『時あつて親子兄弟となり主従となり、互ひに相争ふも天の命ならむ。御心中察し入る』
と温かき一言を残して再び磐船に乗り、蒼空高く龍宮城さして歸還した。

ここに、高白山の城塞には、高虎彦の部下に大虎別といふ忠勇にして誠實なる神があつた。この神は常に荒熊彦の悪事を嘆き、いかにもして悔改めしめむと、陰に陽に全力をつくして注意したのである。今しも荒熊彦夫妻のあくまで神軍に對抗せむとする状を聞き、その場にあらはれ

種々の道理を説き、涙を流して諫言した。されど、荒熊彦は容易に肯かむとする氣色がなかつた。

大虎別は、

『吾かくの如く主の耳に逆らひ奉るは、主および天下の大事を思へばなり。かくなる上は到底吾が力の及ぶべくもあらず。さらば』

といふより早く懷劍をとり出し、手早く雙肌を脱ぎ、腹を掻ききり、咽喉を突刺し、その場に繹切れた。

荒熊彦は冷笑の眼をもつてこれを眺めてゐた。たちまち西北の天より數萬の神軍天の鳥船にうち乗り、高白山の上空高く押寄せきたり、空中より火彈を投下した。ために駒山彦は戦死し、荒熊彦夫妻は天の磐船に乗り、ローマを指して一目散に遁走した。この神軍はいふまでもなく清照彦の率ゐるものであつた。

陥落したる高白山は清照彦代つてこれを守り、アラスカ全土はきはめて平和に治まつた。さう

して長高山は元照彦ちやうかうざん もとてるひここれを守り、その地方一帯はこれまた平安へいあんによく治まつてゐた。後に清照彦のち きよてるひこはシオン山ざんの戦闘せんとうに加はらず、ここに割據くはし、言靈別命ことたまわけのみことの了解れうかいをえて堅く守つた。

(大正一〇・一一・四 舊一〇・五 谷口正治録)

第三十八章 歡天喜地くわんでんきち〔八八〕

清照彦は最愛の妻に死に別れ、厚くこれを葬はうむるのいとまもなく、言靈別命の進退のつびきならぬ嚴命げんめいに接せつし、ただちに高白山かうはくざんに向ひ、吞劍斷腸どんけんだんちやうの思おもひをなして、骨肉こつにくの父母兩親ふぼりやうしんを討滅たうめつするのやむなき窮境きうきやうにたちいたつた。されど神命辭しんめいじするに由なく、大義たいぎを重んじ、ここに血ちをもつて血ちを洗あらふ悲慘ひさんなる戦闘せんとうを開始かいしした。

荒熊彦、荒熊姫は一方血路を開き辛うじて免ることを得た。この時清照彦は、ただちに追撃

せばこれを滅ぼすこと實に容易であつた。されど敵といひながら、肉身の情にひかされ、わざと

これを見逃し、心の中にその影を拜みつつ、父母の前途を氣遣ひ、いづれへなりとも兩親の隠れて安く餘生を送らむことを祈願した。親子の情としてはさもあるべきことである。

荒熊彦は、散軍を集めて尚も懲りずまに羅馬城に進み、決死の覺悟をもつて戦ふた。されど天運

つたなき荒熊彦は力盡き、つひに大島彦のために捕虜となり、夫婦ともに密に幽閉され、面白か

らぬ幾ばくかの月日を送つた。

清照彦は、風の共響きに兩親の羅馬に敗れ、幽閉され、苦しみつゝあることを傳へ聞きて、心

も心ならず、煩悶苦惱しつゝ面白からぬ月日を淋しく送つてゐた。清照彦は忠義に篤く、孝道深

き神司なれば、その心中の煩悶は一入察するに餘りありといふべし。清照彦は雨の朝風の夕に空

を仰いで吐息を漏らし、われ兩親の憂目を見ながら坐視するに忍びず、これを救はむとすれば

主命しゅめいに背そむき、大逆たいぎやくの罪を重ぬるにいたるべし。あゝ兩親りやうしんといひ妻つまといひ、今は或いまひは幽界いうかいに、あるひは敵城てきじやうに囚とらはれ、子たるもの如何いかに心を鬼畜きちくに持ぢすとも忍しのび難がたし、【いつそ】自刃じじんを遂とげ、もつて忠孝ちうかうの大義たいぎを全まつたうせむ、と決心けつしんせる折をりしも、また飛報ひはうあり、

『荒熊彦夫妻あらくまひこふさいは、羅馬ローマにおいて大島彦おほしまひこのために殺ころされたり』

と。これを聞ききたる清照彦きよてるひこは矢も楯もたまらず、吾われは山海さんかいの洪恩こうおんある戀こひしき兩親りやうしんに別わかれ妻つまに別わかれ、生きて何なんの樂たのしみもなし、自刃じじんするはこの時ときなりと、天てんに向むかつて吾身わがみの不遇ふぐうを歎なげき號泣がうきふし、短刀たんたうを逆手さかてに持もち雙肌脱もろはだぬいで覺悟かくごをきはむるをりしも、天空てんくうより光強ひかりつよき寶玉ほうぎよく眼前がんぜんに落らく下かするよと見みえしが、たちまちその光玉くわうぎよく破裂はれつして、中なかより麗うるはしく優やさしき女神めがみ現あらはれたまひ、

『吾われは天極紫微宮てんきよくしびきうより來きたれる天使てんしなり。天津神あまつかみは汝なんぢが忠孝兩全ちうかうりやうぜんの至誠しせいを隣あはれみたまひ、ここに汝なんぢを救すくふべく吾われを降くだしたまへり。汝なんぢしばらく隱忍いんにんして時ときを待まて、汝なんぢがもつとも敬愛けいあいする兩親りやうしんおよび妻つまに再會さいくわいせしめむ。夢疑ゆめうたがふなかれ』

との言葉を残して、再び鮮光まばゆき玉と化り天上にその影を隠した。後に清照彦は夢に夢見る心地して、合點のゆかぬ今の天女の言葉、われは憂苦のあまり遂に狂せるには非ざるか。あるひは父母、妻を思ふのあまり、一念凝つて幻影を認めしに非ずやと、みづから疑ふのであつた。されどどこやら心の底に、一道の光明が輝くのを認めた。何はともあれ、吾ここに自刃せば、たれか兩親および妻の靈を慰むるものあらむ、と心を取り直し、時節を覺束なくも待つことに決心した。

待つこと幾星霜、山は緑に包まれ、諸々の鳥は春を謳ひ、麗しき花は芳香を放ち、所狭きまで咲き満ち、神司はその光景を見て喜び勇み、あたかも天國の春に遇へるがごとく舞ひ狂うてゐた。されど清照彦の心の空はますます曇り、花は咲けども、鳥は歌へども、諸神司は勇み遊べども、自分に取つては見るもの聞くもの、すべてが吾を呪ふもののごとく、悲哀の涙はかはく術なく、日に夜に憂愁の念は増すばかりであつた。

清照彦は天の一方を眺め、長大歎息を漏らす折しも、天空高く數十の鳥船は翼を連ね高白山めがけて降り来るあり、いづれの鳥船にもみな十曜の神旗が立てられてあつた。清照彦は、かかる歎きの際、又もや龍宮城よりいかなる嚴命の下りしならむかと、心を千々に碎きつつ重き頭を痛めた。

鳥船はたちまち清照彦の面前近く下り來りて、内より言靈別命、元照彦、梅若彦は英氣に満ちたる顔色にて現はれ來り、言靈別命は第一に進んで清照彦にむかひ慇懃に禮を述べ、かつ容を改め正座に直り、

『われ今、稚櫻姫命の神使として、當城に來りし理由は、汝に賞賜のためなり』
と云ひをはつて、數多の從臣に命じ善美を盡した御輿を鳥船よりかつぎおろさしめ、清照彦の前に据ゑ、

『汝は忠孝を全うし、かつ至誠をよく天地に貫徹したり。國治立の大神は深くこれを嘉して汝

に珍寶ちんぼうを授與じゅよし賜たまひたり。謹つつしんで拜受はいじゆされよ』

と莞爾くわんじとして控ひかへてをられた。清照彦きよてるひこは不審ふしんの念ねんますます晴はれず、とも角かくもその厚意こういを感謝かんしやした。

前方ぜんぱうの輿こしよりは顔色がんしよくう美しく勇氣ゆうき凜々りんりんたる男神をとこがみが現あらはれた。つらつら見れば思おもひがけなきわが父ちち

荒熊彦あらくまひこであつた。第二だいにの輿こしを開ひらいて母ははの荒熊姫あらくまひめが現あらはれた。第三だいさんの輿こしよりは自殺じさつせしと思おもひし

最愛さいあいの妻つま末世姫すゑよひめが現あらはれ、ただちに清照彦きよてるひこの手てを取とつてうれし泣なきに泣なく。清照彦きよてるひこは夢ゆめに夢見ゆめみる

心地ここちして何なんと言ことばも泣なくばかり、ここに四人よにん一度いちどに聲こゑを放はなつて嬉うれし涙なみだに時ときを移うつした。親子夫婦おやこふうふの

目出めでたき對面たいめんに、高白山かうはくざんの木きも草くさも空そらの景色けしきも、一入光ひとしほひかりを添そへるやうであつた。

ここに言靈別命ことたまわけのみことは懷中くわいちゆうより一書いつしよを取とりだ出し、聲こゑも涼すずしく神文しんもんを讀よみ聞きかした。その意味いみは、

『長高山ちやうかうざんは汝荒熊彦なんぢあらくまひこ、荒熊姫あらくまひめこれを主宰しゆさいせよ。また高白山かうはくざんは清照彦きよてるひこ永遠えいゑんにこれを主宰しゆさいせよ』

との神勅しんちよくである。

【附記】

すゑよひめ　ちやうかうざん　じやうちう　じじん
末世姫は長高山の城中において自刃せむとしたるとき、たちまちその貞節に感じ、天使來りて
みがは　すゑよひめ　ぶ　じ　ことたまわけのみこと　そばちか　つか
身代りとなり、末世姫は無事に言靈別命の傍近く仕へてゐた。
(大正一〇・一一・六　舊一〇・七　加藤明子録)

第六篇　神靈の祭祀
しんれい　さいし

第三十九章　太白星の玉〔八九〕
たいはくせい　たま

龍宮城の從臣鶴若は、黄金水より出たる十二の玉の中、一個の赤玉を命にかへてアルタイ山

に逃れ守つてゐたが、竹熊一派の奸策に陥り、つひにこれを奪取されて無念やる方なく、つひに

は嘆きのあまり、精靈凝つて丹頂の鶴と變じたるは、さきに述べたところである。

丹頂の鶴は晝夜の區別なく、天空高く、東西南北に翔めぐつて聲も囁れむばかりに啼き叫んだ。

その聲はつひに九皐に達し、天の太白星に傳はつた。太白星の精靈生代姫命はこの聲を聞き、大

いに怪しみ、その啼くゆゑを尋ねられた。ここに鶴若は、

『われは、わが身の不覺不敏より大切な黄金水の寶を敵に奪はれ、大八洲彦命に謝する辭な

く、いかにもして、この玉を探し求め、もつて龍宮城に歸參を願ひ、再び神人となり、この

千載一遇の神業に参加せむと欲し、晝夜の區別なく地上を翔めぐり探せども、今にその行方を知

らず、悲しみにたへずして啼き叫ぶなり』

と奉答した。生代姫命は、

『そは實に氣の毒のいたりなり。われは十二の白鳥を遣はし、黄金水の寶に優れる貴重なる國王を汝に與へむ。汝が敵に奪はれたる玉は今や死海に落ち沈めり。されどこの玉はもはや汚されて神業に用ふるの資格なし。されば、われ新に十二の玉を汝に與へむ。この玉を持ちて龍宮城に歸還し、功績を擧げよ』

と言葉をはるや、忽然としてその神姿は隠れ、白氣となりて太白星中に歸還された。たちまち鳩のごとき白鳥天より降るをみとめ雀躍抃舞した。されど鶴若は、わが身一つにして十二の白鳥の後を追ふはもつとも難事中の難事なり、いかがはせむと案じ煩ふをりしも、天上より聲ありて、

『汝は天空もつとも高く昇り詰め、玉の行方を仔細に見届けよ』

といふ神の言葉が聞えてきた。

鶴若はその聲を聞くとともに天上より引つけらるるごとき心地して、力のかぎり昇り詰めた。このとき十二の白鳥は諸方に飛散してゐたが、たちまち各地に降下するよと見る間に白き光とな

り、地上より天に沖して紅霓のごとく輝いた。

鶴若はその光を目あてに降った。見れば白鳥は一個の赤玉と化してゐる。鶴若は急いでこれを

腹の中に吞み込んだ。また次の白氣の輝くところに行つた。今度はそれは白玉と化してゐた。こ

れまた前のごとく口より腹に吞み込んだが、かくして順次に赤、青、黒、紫、黄等の十二色の玉

をことごとく腹に吞み込んだ。鶴若は、身も重く、やむをえず低空を飛翔して、やうやく芙蓉山

の中腹に歸ることをえた。

芙蓉山の中腹には種々の色彩鮮麗なる雲立ちあがつた。この光景を怪しみて、清國別は訪れ

て行つた。すると其處には立派なる女神が一柱現はれて、十二個の玉を産みつつあつた。清國別

は怪しみて、

『貴神は何神ぞ』

と尋ねた。女神は答ふるに事實をもつてし、かつ、

『この玉を貴下は龍宮城に送り届けたまはずや』

と頼んだ。この女神は鶴野姫といふ。

清國別はここに肝膽相照らし、夫婦の約を結び、龍宮城に相携へて歸還し、この玉を奉納せむとした。

しかるに夫婦の契を結びしより、ふたりはたちまち通力を失ひ、次第に身體重く、動くことさへままならぬまでに立ちいたつた。

ふたりは神聖なる寶玉はともかく、夫婦の契によりてその身魂を流し、通力を失ひたることを悔い、聲をはなつて泣き叫ぶ。

その聲はアルタイ山を守る守護神大森別の許に手にとるごとく聞えた。大森別は從臣の高山彦に命じ、芙蓉山にいたつてその聲の所在を探らしめた。

高山彦は命を奉じ、ただちに芙蓉山に天羽衣をつけて、空中はるかに翔り着いた。見ればふた

りは十二の玉を前に置き泣き叫んでゐる。高山彦は大いにあやしみ、

『汝、かかる美しき寶玉を持ちながら、何を悲しんで歎きたまふや』

と問ふた。ふたりは答ふるに事實をもつてし、かつ、

『貴神司はこの十二の玉を龍宮城に持ちゆき、大八洲彦命に傳獻したまはずや』

と口ごもりつつ歎願した。

高山彦はこの物語を聞き、しばし頭を傾け、不審の面持にて思案の體であつた。たちまち物

をも言はず、ふたたび羽衣を着し、アルタイ山めがけて中空はるかに翔り去つた。

後にふたりは絶望の念にかられ、その泣き聲はますます高く天上に届くばかりであつた。ふた

りのまたの名を泣澤彦、泣澤姫といふ。

高山彦はアルタイ山に歸り、大森別に委細を復命した。大森別は、

『こは看過すべからず。汝も共にきたれ』

といふより早く天の羽衣を着し、芙蓉山に向つた。さうして心よくふたりの請を入れ、十二個の玉を受取り、ただちに龍宮城にいたり、この玉を奉獻した。

おほやしまひこのみこと おほ よろこ せんざい しんこくしゆご みたま ざん りつぱ きうでん
大八洲彦命は大いに喜び、これを千載の神國守護の御玉とせむと、シオン山に立派なる宮殿を造營し、これを安置した。

ざん りゆうぐうじやう どうほく くらゐ えうがいけんご れいざん れいざん まぐん て うば
シオン山は龍宮城の東北に位し、要害堅固の靈山にして、もしこの靈山を魔軍の手に奪はれむか、地の高天原も龍宮城も衛ることのできない重要な地點である。

ぼうふりひこかり なみやまひこ たかとらひめかり なくにてるひめ れいち うば じふに ほうぎよく
ここに棒振彦假の名美山彦、高虎姫假の名國照姫は、この靈地を奪ひ、かつ十二の寶玉をとり、ついで龍宮城および地の高天原を占領せむとして、主としてシオン山に驀進した。かくていよいよシオン山の戦鬪は開始さるるのである。

(大正一〇・一一・六 舊一〇・七 谷口正治録)

第四〇章 山上の神示〔九〇〕

ここに大八洲彦命は、稚櫻姫命の神命を奉じ、シオンの靈山にのぼり地鎮祭をおこなひ、かの顯國の御玉の母岩の現はれたる聖跡を中心として、十六社の白木の宮を造り、鵜の羽をもつて屋根を覆ひ、金銀珠玉種々の珍寶をちりばめ、莊嚴優美たとふるにものなく、旭に照り夕陽に輝き、その状は目も眩きばかりであつた。

一つの宮に一つの玉を神體として祭り、十二社と稱へた。他の四個の宮には、鶴野姫、大森別、生代姫命および姫古曾の神を鎮祭し、莊嚴なる祭祀は舉行された。

その他、樓門、廣間等大小三十二棟を造り、いづれも白木造りにして檜皮をもつて屋根を覆ひ、千木、堅魚木等實に崇高の極みであつた。この十六の宮とともに四十八棟となり、あまたの重臣はこれに住みて神明に日夜奉仕した。

ここに宮比彦を齋主とし、一切の神務を主宰せしめられた。シオン山はもとより莊嚴なる靈山である。しかるに今や四十八棟の瀟洒たる社殿幄舎は建て並べられ、莊嚴の上になほ莊嚴を加へた。

このとき常世姫の部下たる美山彦、國照姫は杵築姫を部將とし、鬼雲彦、清熊ら數多の魔軍を率ゐて鬼城山を立ちいで、東西兩方面より、シオン山を占領せむと計畫しつつあつた。また南方よりは別働隊として主將武熊別は、荒熊、駒山彦を率ゐ、シオン山を奪取せむとし、ここに東西南三方よりこれを占領するの計畫を定めた。

このこと忽ち天使大八洲彦命の知るところとなり、東の山麓には吾妻別を主將とし、香川彦、廣足彦を部將として防衛の陣を張り、西の山麓には磐樟彦を主將とし、上倉彦、花照彦を部將とし、あまたの神軍をもつてこれを守らしめた。南方の山麓には大足彦を主將とし、奥山彦、安世彦を部將とし、あまたの神軍と共にこれを守らしめ、北方の山麓には眞鐵彦少しの神軍と共に萬一

に備へることとなつた。また山上の本營には大八洲彦命を總大將として眞道彦命、花森彦、谷川彦、谷山彦が固く守ることとなつた。

三方より押寄せたる敵軍は、難攻不落の靈山を攻撃せむとするは容易の業に非ず、遠くこれを圍みて睨み合ひ、互ひに火蓋を切らざること長きに涉つた。ここに南軍の將武熊別は探女を放つて一舉にこれを討ち破らむとした。南軍の神將大足彦の陣營を夜ひそかに足音を忍ばせ、横切る女性があつた。數多の神卒は怪しみ、四方よりこの女性を圍み捕へて大足彦の陣中に送つた。女性の衣をことごとく剥ぎあらため見るに、一通の信書があつた。これは東軍の敵將美山彦にあて、武熊別より送るところの密書のやうである。

その文意は、

『常世姫すでに龍宮城を陥れむとす。されど敵は克く防ぎ、克く戦ひ容易に抜くべからず。大國彦の援軍を乞ひ、大勢をもち返したれば、味方の士氣頓に加はり來り、龍宮城の陥落は旦夕

に迫る。汝らは吾らを顧慮するところなく、全力を盡してシオン山を攻め滅せ。時を移さず龍宮城を屠り、地の高天原の諸神將を討伐し、その機に乗じて應援に向はむとの、常世姫の密書來り。これを貴下に報告す』

と記してあつた。

大足彦は南軍の指揮を安世彦に一任し、ひそかに遁れて龍宮城の警衛に盡力してゐた。安世彦はこの密書を探女の手より奪ひ大いに驚き、吾妻別、眞鐵彦、磐樟彦を山上の陣營に集めて密議をこらした。諸將はおほいに驚き、シオン山は難攻不落にして、一卒これに當れば萬卒進むあたはざるの要害なり。軍の半を割き速やかに一方の血路を開き、龍宮城に應援せむことを決議され、その決議の結果は大八洲彦命の前にいたされた。大八洲彦命はしばし思案に暮れゐたりしが、直ちにその決議を排し諸將にむかひ、

『龍宮城には大足彦警衛のために歸還しをれば、深く案ずるに足らず。加ふるに眞澄姫、

ことたまわけのみこと かみくにわけのみこと ちゆうけんび しんしやう かた まも
言靈別命、神國別命ら智勇兼備の神將の固く守りあれば、いかなる邪神もこれを抜くあたはざ
るべし。これ必ず敵の奸策ならむ』

こと は
と事もなげに刎ねつけられた。このとき安世彦色をなしていふ。

きしん わかざくらひめのみこと おんうへ いうりよ まんいち みつしよ いっは ちようでふ
『貴神は稚櫻姫命の御上を憂慮したまはざるや。萬一この密書にして偽りなれば重疊なり。さ
れど油斷は大敵、當山は寡兵をもつて克く衆を防ぐに足る。しかるに龍宮城陥りなば、地の
たかあまはら あやふ ぜ ひ おうゑんぐん だ りゆうぐうじやう ききふ すく
高天原もまた危からむ。是非に應援軍を出し、もつて龍宮城の危急を救ひたまへ』

けつしん いろ あら ようい いし ま けいせい み
と決心の色を表はし、容易に意志を枉ぐべき形勢は見えなかつた。

まがねひこ いわくすひこ あづまわけ やすよひこ ていあん さんせい ぶ か しんそつ ふうへう みみ だいぶぶん
眞鐵彦、磐樟彦、吾妻別も、安世彦の提案に賛成した。部下の神卒はこの風評を耳にし、大部分
りゆうぐうじやう きけん しん いちじ はや きじやう とな
は龍宮城の危険を信じ、一時も早く歸城せむことを唱ふるにいたつた。

おほやしまひこのみこと だんこ しうぎ はい けつしん いろ あら
大八洲彦命は斷乎としてその衆議を排し、決心の色を表はし、

『しからば諸神司は吾が指揮を用ゐざるや。今は詮なし、たとへわれ一柱になるとも、當山は誓

つて退却せじ、また一卒をもわれは歸城應援せしむるの意志なし』

と主張した。ここに宮比彦は恭しく神前に出で神勅を奏請したるに、たちまち神示あり、

『探女をわが前に伴ひきたれ』

とあつた。宮比彦は神示を大八洲彦命に恭しく傳へた。大八洲彦命は安世彦に命じ、神示のご

とく探女を神前に曳き來らしめ、庭石の上に引据ゑた。たちまち探女の身體は上下左右に震動し、

かつ自ら口を切つて、

『武熊別の密使にして、實際は龍宮城の陷落近きにありといふは虚偽なり。貴軍の士氣を沮喪せ

しめ、かつ陣容を紊し、その虚に乘じ一舉にシオン山を攻略せんずの攻軍の奸計なり』

と白状するや、たちまち大地に倒れた。

ここに諸神將は神明の威力と、大八洲彦命の明察力に感嘆し、今後は命の命令には一切背か

ずと誓つた。

さぐめ おほやしまひこのみこと じんじ
探女は大八洲彦命の仁慈によつて、神卒に守られ、武熊別の陣營近く護送せられたのである。

(大正一〇・一一・六 舊一〇・七 外山豊二録)

第四章 十六社の祭典〔九一〕

シオン山は難攻不落の堅城鐵壁にして、如何なる鬼神といへども、これを攻略するは容易の業に非ず。ここに西方の陣を固むる敵將國照姫は鬼雲彦、清熊らと謀り、謀計をもつてこの目的を達せむと畫策した。

しかるにシオン山の本營にては、神明の靈威と、天使大八洲彦命の明察とにより、探女の眞相を探知し、危きを免れたる神恩を感謝し、かつ味方の無事を祝福するため、盛大なる祭典が執行

された。神軍の過半は祭典に列し、をはつて各もとの守備につき、また半分の餘る神軍は交代して、山上の祭典に列する仕組であつた。

十六社の宮にはおのおの八鹽折の酒を大なる甕に充て供進された。敵の軍臣に非ざるものは何神といへども、その當日のみは參拜を許さることとなつた。

ここに數多の女性あり、順禮の姿に身を装ひ麗しき顔したる美姫神續々として山上へ登り、この祭典に列し、かつ神威の無限なるを口をきはめて讚美しつつあつた。時しも十六社の祭典は一時に行はれ、神饌神酒を捧ぐるものは若き女性ならざるべからず。しかるに今は戰場のことなれば女性の影もなく、男臣の武者ぶり勇ましけれど、いづれの男臣も何となくあきたらぬ思ひに沈みつつありし時なれば、麗しきあまたの女性の數奇を凝らして參上り來れる姿を見て、大いに喜び、身心を【とろ】かし、中には眉や目尻を下る軍神さへあらはれた。いづれ劣らぬ花紅葉、色香爭ふその態に、竝ある神將神卒も見惚れつつ、戦ひの庭にあることをも打ち忘れてゐた。

みやびひこ うつく
宮比彦はその美しきもつとも年若き女性に向ひ、

いま せんぢやう かみ つか をとめ ひとはしら
『今は戦場のこととて神に仕ふる乙女の一柱だもなし。願はくは汝ら神に至誠奉仕の信仰あら

ば、直ちに立つて神饌神酒を供せよ。また技藝あるものは立つて神樂を奏し奉れ』

よ たら た みけ みき きやう
と呼ばはつた。天女に等しき乙女らは一齊に立つて神饌神酒を供し奉り、かつ神樂を奏して神慮

なくさ たてまつ さいてん しき ぶ じしうれう しよしん しんそつ いた なほらひ えん ざ みけ みき
を慰め奉つた。祭典の式も無事終了し、諸神司は神卒に至るまで直會の宴に坐し、神饌神酒を

はいたい あまた をとめ しゆはい あひだ わうらい さかん と さけ
拜戴することとなつた。數多の乙女は酒杯の間に往來して盛に取りもつた。酒はおひおひまは

つてきた。たちま ろれつ めぐ もの め む もの みみ きこ もの かしら いた もの てあし しび もの は
忽ち呂律の廻らぬ者、眼を剥く者、耳の聞えぬ者、頭の痛む者、手足の痺れる者、吐

もの くだ もの はら いた むね くる しつてんばつたふくろち は もの
く者、下痢す者、腹を痛め胸を苦しめ七轉八倒黒血を吐く者もできてきた。そこにもここにも石

ころのやうに轉びまはつて、不思議な手つきをなし虚空を掴んで倒れむとする者も現はれてきた。

じふろくしや しんでんめいどう かくみやみや とびら しぜん ひら なか あまた きんしあら えんせき
たちまち十六社の神殿鳴動し、各宮々の扉は自然に開かれ、中より數多の金鵒現はれて宴席の

うへ じゆうわうむじん と いま くる いちどう のこ げんきくわいふく ひとはしら けが
上を縦横無盡に飛び舞うた。今まで苦しみつつつありし一同は残らず元氣恢復して一柱の怪我あや

まちななかつた。今まで花顔柳腰の乙女と見えしは魔神の變化にて、見るみる面相すさまじき悪鬼と化し、あるひは老狐と變じ、毒蛇となつて、四方に逃げ散つた。これは國照姫以下の神軍剿滅の殘虐なる奸策であつた。

ここにシオン山の全軍は、神助により全部その危難を救はれ、以後戰場に酒と女性を入れぬこととなつた。

(大正一〇・一一・六 舊一〇・七 櫻井重雄録)

第四章 甲冑の起源〔九二〕

南方の敵將武熊別は、美山彦および國照姫の二回の計略もぜんぜん失敗にをはり、尋常一様の

畫策くわくさくにては容易よういに目的もくてきを達たつしがたきを知り、部下ぶかの魔軍まぐんをことごとく數千萬すうせんまんの黒熊くろくまと化せしめた。

さうして東軍とうぐんの吾妻別あづまわけ、南軍なんぐんの大足彦おほだるひこ、西軍せいぐんの磐樟彦いはくすひこの陣營ちんえいにむかひ、夜陰やいんに乗じて、一せい

に咆哮怒號ほうかうどがうの聲こゑとともに襲撃しふげきした。三軍さんぐんの神將卒しんしやうそつは不意ふいの襲撃しふげきに驚き右往左往うわうさわうに散亂さんらんした。

武熊別たけくまわけは勢いきほひを得て、まつしぐらにシオン山の山頂目さんちやうめがけて馳せのぼり、大八洲彦命おほやしまひこのみことの陣營ちんえいを襲

ひ、かつ十六社の宮みやを破壊せむとした。大八洲彦命おほやしまひこのみこと以下の神將しんしやうは不意ふいの襲來しふらいに驚き、みづから

奥殿おくでんに入り、宮比彦みやびひことともに天津神あまつかみにむかつて救援きうゑんを請ひたまうた。

このとき十六社の宮は既に武熊別たけくまわけの部下ぶかなる數多あまたの黒熊くろくまに破壊されむとする間際まぎはであつた。た

ちまち社殿しゃでんの扉とびらは自然しぜんに開かれ、中より數千萬羽すうせんまんばの金鵄きんしあらはれ、黒熊くろくまの群ぐんにむかひ、口より火焰くわえん

を吐はき、縱横無盡じゆうわうむじんに翔めぐつた。

數千萬すうせんまんの黒熊くろくまはたちまちその毛けを焼かれ、一時いちじに羆ひぐまとなつて熱さに悶え苦しみつ、北方ほつぱうの

雪山目せつぜんめがけて遁走とんさうし、積雪せきせつの中に残らずもぐり入り、やうやく焼死せうしをまぬがれた。

焼死をまぬがれた熊の群は、火傷のために表皮は全部剥落して眞裸となつた。熊の群は雪山に雪を分け土を掘り、穴を造つてその中に潜み、傷の癒ゆるを待った。さしも激しき火傷は漸次恢復して、全身ことごとく白毛を生じ白熊と變化した。

山麓にありし東西南の諸神將はやうやく散軍を集め、陣營もとに復し、勇氣はますます隆盛であつた。武熊別はあまたの味方を失ひ、ふたたび國照姫の魔軍をかつて再舉を企てた。今度は魔軍を數千萬の龜と化し、山上目がけて密かに這ひ登らしめた。山上は龜をもつて埋もれた。龜は一齊に口より火焰を吐き、四十八棟の社殿および幄舎を一時に焼盡し、神軍を全部焼滅ぼさむとする勢であつた。神軍はこれを見て、一々龜の首を斬らむとした。數萬の龜は一時に首を甲の中に潜め、打ても斬れども何の痛痒も感ぜず、ただカツカツ音の聞ゆるばかりである。龜はだんだん折重なつて山を築き、諸神將を取圍み、一步も動かざらしめむとした。さうして口々に烈しき火焰を甲のなかより紅蓮のごとくに吐きだし、神軍を悩ますのであつた。

ここに大八洲彦命は宮比彦に神策を授け、十二社の神殿に到らしめた。さうして神殿に奉獻さ

れたる神酒を一滴づつ數百の甕にうつした。たちまち天に黒雲おこり、大雨降りそそぎで、瞬く

うちに數百の甕は満ちあふれた。その雨水は全部芳醇なる神酒と化した。このとき何處ともなく
數十羽の怪しき鳥族現はれて、甕に浸り、羽撃きしていづくともなく消え去った。

芳しき酒の匂ひは山上に溢るるばかりであつた。この匂ひを嗅いだ數萬の龜の群はにはかに
首を出し、先を爭ふて酒甕の前へ驅けりつき、背のびをなし、首を長く突出して残らず甕の酒を
飲み干し、敵地にあるを忘れて、一せいに酔狂ひ踊りまはった。

このとき山上の神將神卒は、彼らを討つは今この時なり。醒めては容易に討つこと難しと、お
のの刀を引抜き首を一せいに斬らむと計った。大八洲彦命はこれを遮り、諸神司をして龜群の
酔狂状態を觀覽せよと命じた。

神將神卒は命にしたがひ、袖手傍觀することとなつた。龜はますます面白き手つきをなして踊

り狂^{くる}ひ、たがひに争^{あらそ}ひを始^{はじ}めた。その光景^{くわうけい}は何^{なん}ともいひえない面白^{おもしろ}き場面^{ばめん}であつた。

さんじやう

しんしやうしんそつ

おも

て

う

つひには

かめ

をどり

おもしろ

ひ

じぶん

山上^{さんじやう}の神將神卒^{しんしやうしんそつ}は思はず手^{おも}を拍^てち、つひには龜^{かめ}の踊^{をどり}の面白^{おもしろ}さに引^ひつけられて、自分^{じぶん}もそろそ

うた

うた

かめ

むれ

まじ

てきみかた

をど

くる

かめ

どく

まは

くろち

は

ろ歌^{うた}を唄^{うた}ひ、龜^{かめ}の群^{むれ}に交^{まじ}つて敵味方^{てきみかた}ともに踊^{をど}り狂^{くる}うた。そろそろ龜^{かめ}は毒^{どく}が廻^{まは}つた。黒血^{くろち}を吐^はく、

あふむ

たふ

くもん

はじめた。

たちまち

味方^{みかた}の

神將神卒^{しんしやうしんそつ}

は

帯刀^{たいたう}

を

抜き、

龜^{かめ}の

首^{くび}を

ず

仰向^{あふむ}けに倒^{たふ}れる、そろそろ苦悶^{くもん}しはじめた。たちまち味方^{みかた}の神將神卒^{しんしやうしんそつ}は

たずたに

斬^きり放^{はな}ち、

残^{のこ}らず

これ

を

亡^{ほろ}ぼし、

甲^{かふ}を

剥^はいで

各自^{かくじ}の

武具^{ぶぐ}となし、

これ

を

身^みに

鎧^{よろ}うた。

こ

れが戦争^{せんそう}に甲冑^{かつちう}を着^{ちやく}するにいたつた嚆矢^{かうし}である。

（大正一〇・一一・八 舊一〇・九 谷口正治録）

第四章 濡衣〔九三〕

ぬれぎぬ

シオン山ざんはかくのごとく大八洲彦命おほやしまひこのみことの機略縦横きりやくじうわうの戰略せんりやくによつて、容易よういに抜くこと能はず、かつ

三方さんぱうの神將しんしやうはますます勇氣ゆうきを増しきたり、魔軍まぐんはもはや退却たいきやくするのやむなき苦境くきやうに陥つた。

このとき常世姫とこよひめより密使みつしが來た。

『汝なんぢらはいかに苦境くきやうに陥るとも斷だんじて一步も退却たいきやくすべからず。持久戰ぢきうせんをもつて大八洲彦命おほやしまひこのみこと以下

の諸神將しよしんしやうを、シオン山ざんに封鎖ふうさせよ。われは龍宮城りゆうぐうじやうをはじめ、芙蓉山ふようざん、モスコ、ローマ、龍宮島りゆうぐうじま

をこの機きに乗じて占領せんりやうせむ』

とのことであつた。

美山彦みやまひこ、國照姫くにてるひめ、武熊別たけくまわけはこの命めいを奉じて、あくまでも退却たいきやくせざることになつた。ここに龍宮城りゆうぐうじやう

の諸神將しよしんしやうは、芙蓉山ふようざんおよびローマ、モスコの魔軍まぐんの攻撃こうげきにあひ、苦戰くせんの情況じやうきやうを察知さつちし、

神國別命かみくにわけのみこと、元照彦もとてるひこをして、ローマ、モスコへ向はしめ、眞鐵彦まがねひこをして芙蓉山ふようざんに向はしめた。

龍宮城りゆうぐうじやうには言靈別命ことたまわけのみこと、花森彦はなもりひこ、主將しゆしやうとしてこれを守ることとなつた。言靈別命ことたまわけのみことは内部ないぶの統制とうせいに

あたり、花森彦は敵軍の襲來に備へた。

とこよひめ をつとがみやつわうだいじん

とこよひこ

さんぐん

しやう ふようざん はじ

常世姫の夫神八王大神常世彦は、三軍の將として芙蓉山を始めローマ、モスコの攻撃に全力

そそ とこよひめ まがひこ まがひめ

ふたた りゆうぐうじやう

い わかざくらひめのみこと ふか とりい へうめんねこ

を注ぎ、常世姫は魔我彦、魔我姫とともに再び龍宮城に入り、稚櫻姫命に深く取入り、表面猫

かぶ じうじゆん つか

ことたまわけのみこと はなもりひこ しつつめ

じやうない しゆけん にぎ

を被つて柔順に仕へてゐた。しかして言靈別命、花森彦を失墜せしめ、みづから城内の主權を握

らむと考へてゐた。

かんが

とこよひめ とこよ

きた ようしよくえんれいなら

からこひめ じやうちう

い ことたまわけのみこと はなもりひこ ちか

常世姫は常世の國より來れる容色艷麗並びなき唐子姫を城中に入れ、言靈別命、花森彦に近く

ほうし

からこひめ

すず まなこ

はなもりひこ み

はなもりひこ からこひめ せいしん

奉仕せしめた。唐子姫の涼しき眼は、つひに花森彦を魅するにいたつた。花森彦は唐子姫に精神

うば たいせつ しんむ

ばうきやく よる

て たづさ だんざん かく

かりふうふ せいくわつ

を奪はれ、大切なる神務を忘却し、夜ひそかに手を携へて壇山に隠れ、ここに假夫婦として生活

をつづけた。

ことたまわけのみこと ちから

はなもりひこ うしな

な

し

はなもりひこ つま

言靈別命は力とたのむ花森彦を失ひ、ほとんど爲すところを知らなかつた。花森彦の妻

さくらぎひめ

おどろ

いか

うら

ていきふはんもん

けつくわ

はつきやう

櫻木姫はおほいに驚き、かつ怒り、かつ怨み、涕泣煩悶の結果つひに發狂するにいたつた。

ことたまわけのみことい か しんしやう おほ はなもりひこ ゆくへ さぐ
言靈別命以下の神將は大いにこれを憂ひ、いかにもして花森彦の行衛を探り、ふたたび城内に還

さくらぎひめ めんくわい ぜんくわい けふぎ けつくわ しんそつ しよはう はけん
らしめ櫻木姫に面會せしめなば、たちまち全快せむと協議の結果、神卒を諸方に派遣し、その行方

さぐ じやうない しんそつ すう げん ぜんじしゆび てうす
を探らしめた。城内はおひおひ神卒の數を減じ、漸次守備は手薄になつた。

さくらぎひめ あれくる ことたまわけのみこと いま わかざくらひめのみこと まへ い ざん せんきやう
櫻木姫はますます暴狂ふのである。言靈別命は今や稚櫻姫命の前に出で、シナイ山の戰況を

そうじやう とき さくらぎひめ はし きた ことたまわけのみこと いだ
奏上する時しも、櫻木姫は走り來つて言靈別命を抱き、

こひ わ をつと
『戀しき吾が夫ここにゐますか』

な わら むり て ぬ じぶん あま かへ とこよひめ
と、かつ泣き、かつ笑ひ、無理に手も脱けむばかりにして、自分の居間に歸らむとする。常世姫

しんちゆうぼうけい づ みだけだか ことたまわけのみこと ことば かど た よ
は心中謀計の圖にあたれるをよろこび威丈高になつて、『言靈別命』と言葉に角を立てて呼びと

め、

なんち つね ぎやうじやうあし ないぐわい うはさ き てんばつ ま
『汝は常に行状悪く内外ともにその風評を聞かぬものはなし。しかるに天罰は眼のあたり、い

わかざくらひめのみこと みまへ しうたい ばくろ さくらぎひめ はつきやう きしん げんどうりよく
ま稚櫻姫命の御前にて醜態を暴露したり。櫻木姫の發狂せしは貴神司が原動力なり。これを

探知したる花森彦は温順の性なれば、過去の因縁と斷念してすこしも色に表はさず、櫻木姫を汝
に與へ、みづからは唐子姫とともにこの場を遁れたるなり。花森彦は決して女性の情に絆されて、
大事を誤るがごとき神司に非ず。しかるに危急存亡の場合、命をしてかかる行動に出でしめた
るは、全く汝が罪のいたすところ、これにてもなほ辨解の辭あるや』
と、理を非にまげ、誣言をもつて稚櫻姫命の心を動かさむとした。言靈別命は居なほつて
常世姫にむかひ、

『こは奇怪なることを承はるものかな。貴神司は何の證據あつて、かくのごとき暴言を吐きた
まふや』

と言はせもはてず、常世姫は眼を怒らし、口を尖らし、少しく空を仰いで、フフンと鼻で息をな
し、

『證據は貴神司の心に問へ』

と睨めつけた。

櫻木姫は言靈別命を花森彦と誤解し、狂氣の身ながらも常世姫にむかつて飛びつき、

『汝は何故なれば最愛の吾夫にたいし、暴言を吐くか。われは夫に代り、目に物見せてくれむ』
と、いふより早く髻に手をかけ、力かぎりに引ずりまはした。常世姫は聲を上げて救いを叫んだ。
城内の神司はこの聲に驚いて諸方より駆けつけた。

言靈別命の濡衣は容易に晴れず、稚櫻姫命の嚴命により、龍宮城を追放さるることとなつたのである。ここに稚櫻姫命は常世姫の誣言を信じ、言靈別命を追放し、花森彦を壇山より召還し、城内の主將たらしめむとしたまうた。ここに天稚彦は協議の結果壇山にむかひ、花森彦を招き歸らしめむと出發せしめられた。天稚彦は容色美はしき男性にして、稚櫻姫命を助けてゐた。

天稚彦は天の磐船に乗つて壇山にむかひ、花森彦に稚櫻姫命の命を傳へ、かつ唐子姫との手を斷り、一時も早く歸還せむことを傳へた。

花森彦はおほいに悦び、ただちに迷夢を醒まし、天の磐船に乗つて龍宮城に歸還し、
稚櫻姫命の帷幄に參ずることとなつた。

城内は常世姫、花森彦の二神司が牛耳を執つてゐた。實に龍宮城は常世姫の奸策によつて、
何時破壊さるるか分らぬ状態であつた。

天稚彦は唐子姫の姿を見るより、にはかに精神恍惚として舉措動作度を失ひ、つひに手に手を
とつて山奥深く隱遁し、龍宮城へは歸つてこなかつた。

稚櫻姫命といふ美はしき妻神があり、また八柱の御子のあるにもかかはらず、唐子姫に心魂を
蕩かしたるは、返す返すも残念な次第である。

(大正一〇・一一・八 舊一〇・九 外山豊二録)

第四章 魔風戀風〔九四〕

言靈別命は思はざる漏衣を着せられ、如何にもしてこの疑を晴らし、身の潔白を示さむと
焦慮し、かつ常世姫を悔い改めしめむとした。されど狐獨の身となりし命はいかんとも策の施
すべき道がなかつた。そこでいよいよ意を決し、萬壽山に落ち延びた。

言靈別命の境遇に同情したる數多の神司は、命の後をおふて萬壽山に馳集まつた。

重なる神將は、吾妻別、鷹松別、河原林、玉照彦、有國彦、森鷹彦らの諸神將であつた。勇猛

なる神軍は期せずして日に月に集まりきたつた。このこと常世姫の耳に雷のごとく響いてきた。

常世姫はおほいに驚き、八王大神常世彦をして萬壽山を攻撃せしめむとした。時しも龍宮城は

常世姫のために陥落し、稚櫻姫命は神國別命以下の神將とともに、言靈別命の駐屯せる萬壽山

に逃れたまうた。

ここに言靈別命は、禮をつくしてこれを迎へ奉り、龍宮城を回復せむとし、かつ言靈別命

以下の清廉潔白にして、至誠至實の神たることが初めて悟られた。

稚櫻姫命の來臨とともに萬壽山はますます開拓され、つひには堅城を造り、鐵壁をめぐらし、實に難攻不落の城塞となつた。

この時、智勇兼備の勇將にして、紅葉別といふ軍神があつた。この神司あまたの神軍を率ゐて來り、言靈別命に面謁せむことを申込んだ。言靈別命はまづ吾妻別に面會せしめ、その來意を

尋ねさせた。紅葉別は常世姫の奸策を聞き義憤をおこし、自ら進んで萬壽山に参加し、彼を亡ぼ

し天下を太平に治めむと欲し、協心戮力もつてミロク神政の神業に参加せむと、殊勝にも誠意を

表にあらはして参加せむ事を申込んだ。吾妻別はおほいに喜び、これを言靈別命に委細進言し

た。紅葉別は戦鬪に妙をえたる武神である。言靈別命は稚櫻姫命とはかり、紅葉別をして萬壽山

の主將たらしめむとした。このとき龍宮城はすでに常世姫の占領するところとなり、ついで地の

高天原も、橄欖山も敵手に落ちてゐた。シオン山の總大將大八洲彦命は、逃れきたれる大足彦の國の眞澄の鏡をもつて、敵軍を山上より射照した。たちまち山頂より幾十萬とも知れぬ巨巖湧出して中空に飛び、美山彦、國照姫、武熊別の魔軍の集團めがけて雨のごとく落下し、一方鏡に射照されてその正體を露はし、たちまち惡鬼、大蛇、惡狐の姿と變じ、鬼城山めがけて逃げ散つた。

ここに大八洲彦命は宮比彦を祭祀の長とし、安世彦を主將とし、一部の神軍をもつてこれを守らしめ、ただちにその勢をもつて龍宮城に攻め寄せ回復戦を試みた。眞鐵彦は地の高天原にむかひ、磐樟彦は橄欖山にむかひ、吾妻別、大足彦は龍宮城にむかひ、國の眞澄の鏡を取り出し、敵軍を照し、かつ大八洲彦命の神言を奏上するや、たちまち暴風吹きおこり、浪は山の如く立荒び、城はほとんど水中に沒した。常世姫の身體よりは異様の光現はれ、金毛八尾の惡狐と化し、黒雲を卷きおこし、常世城めがけて遁走し、部下の魔軍は諸方に散亂して、龍宮城も地の高天原も再び神軍の手に歸つた。ここに稚櫻姫命は、言靈別命、吾妻別らを率ゐてふたたび龍宮城

に歸還きくわんしたまうた。萬壽山まんじゆざんは鷹松別たかまつわけ、有國別ありくにわけらの諸神將しよしんしようをしてこれを守備しゆびせしむることとなつた。

話はなしかはつて天稚彦あめのわかひこは、唐子姫からこひめに心を奪うばはれ、壇山だんざんを捨ててなほも山奥やまおく深くわけいり、

『お前まへと一緒に暮いっしょすなら、たとへ野のの末山すゑやまの奥おく、虎狼とらおほかみの住家すみかにて、竹たけの柱はしらに茅かやの屋根やね、手鍋てなべ提さげてもかまやせぬ』

といふやうな状態じやうたいにて、わづかの庵いはりを結び夫婦ふうふきどりで暫しばらく暮くらしてゐた。

ある時天稚彦ときあめのわかひこは近邊ほとりの山やまに分け入りて、兔うさぎを狩かつて歸かへつてきた。唐子姫からこひめは夫をの留守をに氣きを許ゆるし、邊あたりに響ひびく鼾聲かんせいを發はつし、よく寢入ねいつてゐた。天稚彦あめのわかひこはひそかに外そとより覗のぞいて見た。唐子姫からこひめの姿すがたは

どこへ行いつたか影かげもなく、寢間ねまには銀毛八尾白面ぎんまうはちびはくめんの惡狐あくこが睡ねむつてゐる。天稚彦あめのわかひこはおほいに驚おどろき、

かつ怒いかり、

『この邪神奴じゃしんめ、わが不在ふざいを窺うかがひ、最愛さいあいの唐子姫からこひめを喰くひ殺ころし腹膨はらふくらせ、安閑あんかんと假眠いねむりをるとは心憎にくし。妻つまの敵かたき、思おもひ知しれよ』

と弓に矢をつがひ、悪狐をめがけて發止と射かけた。この時遅く、かの時速く、悪狐はたちまち白煙となつて消え失せた。いづこともなく唐子姫の聲として、

『われは常世姫の部下の魔神なり。龍宮城を占領せむために花森彦を誘き出し、今また汝をこの山奥に誘ひ、その通力を失はしめたり。吾はこれより常世の國に馳歸り賞賜に預からむ。汝はすみやかに龍宮城に還り、この失敗を包み隠さず物語り、唐子姫に眉毛をよまれ、尻の毛も一本も残らず引抜かれたり。悔し残念を耐りこぼりてここまで還りきました。今までの罪はお許し下さいと、女房の稚櫻姫命に頭を下げて、三拜九拜せよ』

と言葉途切るとともに、カラカラと嘲笑ひの聲次第に遠くなりゆくのであつた。命は大いに怒り、聲する方を中空目がけて矢を射つた。矢は危くも命の肩先をすれずれにうなりを立てて落ちきたり、實に危機一髪の間であつた。天稚彦はこれより諸方を流浪し、種々の艱苦を嘗めつつすごすこと龍宮城に歸ることとなつた。

(大正一〇・一一・八 舊一〇・九 加藤明子録)

第七篇 天地の大道てんち だいだう

第四十五章 天地の律法〔九五〕てんち りつぽう

地の高天原に宮柱太しき立て千木高しりて鎮まりゐます、ち たかあまはら みやはしらふと た ちぎたか國治立命、くにはるたちのみこと とよくにひめのみこと豊國姫命の二神は、にしん神界しんかいのかくまで混亂の極に達し、こんらん きよく たつ しうしふ收拾す可からざるにいたりしは、しよしん たい げんかく しんりつ諸神人に對し、嚴格なる神律の制定せいいていされざるに基づくものなりとし、もとここに天道別命とともに律法を制定したまうた。あまぢわけのみこと りつぽう せいてい

その律法は内面的には、「反省よ。恥ぢよ。悔改めよ。天地を畏れよ。正しく覺れよ」の五戒律

であつた。また外面的律法としては、「第一に、夫婦の道を嚴守し、一夫一婦たるべきこと。第二

に、神を敬ひ長上を尊み、博く萬物を愛すること。第三には、互ひに嫉妬み、誹り、偽り、盜

み、殺しなどの惡行を嚴禁すること」等の三大綱領である。

この律法を天下に廣むるに先立ち、まづ龍宮城および地の高天原より實行し、これが模範を

天下萬神人に傳示し堅く遵奉せしむることと定められた。これより高天原は規律正しく、ことに

一夫一婦の道は嚴格に守られてゐた。

龍宮城も地の高天原も、天使大八洲彦命、大足彦らの機略縱横の神策により、常世姫の魔軍を

伐ちはらひ、平穩無事に治まり、諸神司は太平の夢に酔ひ、花に戯れ、月を愛で、莊嚴なる神樂

を奏上して神の御祭を盛大に舉行し、舞ひ遊ぶ黄金時代となつた。

しかるに遠き國々はいまだ泰平ならず、したがつて大神の律法もゆきわたるまでに至らなかつ

た。茲ここにおいて稚櫻姫命わかざくらひめのみことは天上てんじやうおよび天下泰平てんかたいへいの御喜びに、盛装せいさうを凝こらして諸神司しよしんの遊樂場いうらくちやうへ出場遊ばされ、高座かうざより愉快氣ゆくわいげにこれを眺ながめてをられた。このとき、眉目清秀びもくせいしうなる年若としわかき男神司だんしんは、長き袖ながの錦衣きんいを着ちやくし中央ちうあうに立ち、音樂おんがくにつれて淑やかしとに舞まひはじめた。實じつに萬綠叢中紅一點ばんりよくそうちうこういつてんの觀くわんがあつた。時ときに稚櫻姫命わかざくらひめのみことは、にはかに顔色蒼白がんしよくさうはくとなり、吐息といきをつき、その場ばに倒たふれ伏ふしたまうた。

大八洲彦命おほやしまひこのみこと以下の神將しんしやうは驚おどろいて介抱かいほうし、奥殿おくでんへ送りたてまつり、柔やはらかき夜具やぐを八重やへに重ね、その上うへに命みことを安臥あんぐわさせたてまつり、いろいろと介抱かいほうに餘念よねんなかつた。神司かみがみはめいめいに病床びやうしやうを訪ね、いろいろの藥草やくさうを遠近をちちの山々やまやまより求め來きつてこれを勸すすめた。されども命みことは御首みくびを左右さいうに振ふつてこれを拒絶きよぜつしたまひ、命みことの様子は日ひをおふて疲勞ひらうを増ますばかりであつた。神司かみがみは種々しゆじゆと手てをつくし、心こころをつくした。されど、命みことの病氣びやうきにたいしては何なんの效能かうのうもなかつた。このとき命みことは思おもひ切きつたやうに、神樂かぐらの舞まひを見みせよと仰あふせられた。直ただちに諸神司しよしんは準備じゆんびに取りかかり、命みことの御前ごぜん

に神樂を奏上した。音樂につれて數多の乙女は長袖をひるがへし、淑やかに舞ひはじめた。諸神人の歡呼の聲、拍手の響きは天に轟くばかりであつた。

稚櫻姫命はその舞曲を一心に眺め、眼を諸方に配り、また「あゝ」と吐息をもらして床上に伏したまうた。大八洲彦命は御病のかへつて重らむことをおそれ、舞曲を中止し、自分はただ一柱枕頭に侍して看護に餘念なかつたのである。夜中稚櫻姫命は、

『あゝ玉照彦、玉照彦』

と連呼された。大八洲彦命はあわてて、

『玉照彦は如何にいたせしや』

と問ひたてまつた。命は何の返答もなく、すやすやと眠らせられたまうのであつた。

大八洲彦命はただちに玉照彦を招き、命の看護を命じた。それより稚櫻姫命の御病は日に日に恢復し、玉照彦は命のそば近く奉仕することとなつた。雨の夜も風の荒き日も瞬時も御傍を離

したまはず、玉照彦を掌中の玉のごとくに愛されたまうた。

(大正一〇・一一・八 舊一〇・九 櫻井重雄録)

第四章 天則違反〔九六〕

ここに天稚彦は唐子姫の妖魅に誑らかされ、諸方を流轉し、山野河海を跋涉し、雪の朝霜の夕に足を痛め、風雨に曝され、晩秋の案山子の如きみすばらしき姿となりて萬壽山の城下に現はれ、神司の門戸をたたき、乞食の姿となつてあらはれた。

たまたま吾妻別の門戸をたく者がある。その音はどこともなくことなれる響きであるを感じ、吾妻別はみづから立つて門を開きみれば、一個の賤しき漂浪神が立つてゐて、命の顔を眺め、

『汝は吾妻別に非ずや』

といった。命の從臣瀧彦は走りきたり、その神司にむかつて、

『汝はいづれの神司か知らざれども、吾門戸に立ち、吾主人にむかつて名を呼捨てになす不届者、一時も早くこの場を立去れ。否むにおいてはこの通り』

といふより早く棍棒をもつて頭上を毆打した。そのはづみに急所をはづれて笠は飛び散つた。漂浪神は眼光炯々として射るごとく、言葉するどく、

『無禮者』

と罵つた。

吾妻別は始めて天稚彦の成れの果てなることを覺り、從臣の無禮を謝し、ねんごろに手を引き萬壽山城内に迎へたてまつり、新しき神衣を奉つた。今までの案山子のごとく寔れたる神司は、たちまち豊頬圓滿なる天晴勇將と變りたまうた。吾妻別は信書を認め、瀧彦を使者として龍宮城

わかざくらひめのみこと
につかはし、稚櫻姫命に、

あめのわかひこ まんじゆざん かへ
『天稚彦、萬壽山に還りたまひ、しばらく休養されしのち、ふたたび龍宮城に歸還したまはむ

とす。すみやかに歡迎の準備あらむことを乞ふ』
くわんげい じゆんぴ こ

といふ意味の文面であつた。
い み ぶんめん

おほやしまひこのみこと しんしよ
大八洲彦命はまづこの信書をひらき、一見して大いに悦び、稚櫻姫命は定めて満足したまは

むと、みづから心中雀躍りしながら、稚櫻姫命の御前に出で、委細を言上した。
しんちゆうこをど わかざくらひめのみこと みまへ い あさい ごんじやう

命はさだめて御喜びのことと思ひきや、その御顔には怪しき雲がただようた。側近く仕へゐた
みこと およろこ おんかほ あや くも そばちか つか

る玉照彦は、にはかに顔色蒼白となり、唇はぶるぶると震へだした。
たまてるひこ がんしよくさうはく ぐちびる ふる

おほやしまひこのみこと がつてん
大八洲彦命は合點ゆかず、その場を引退つた。このとき瀧彦は、天稚彦の今までの御經歷を語

り、かつ稚櫻姫命にたいし、大なる疑を抱き給ふことを述べた。大八洲彦命は一室に入りて、
わかざくらひめのみこと だい うたがひ いだ たま の おほやしまひこのみこと ひとま い

雙手を組み思案に時を移し、この度の命の態度といひ、玉照彦の様子といひ、實に怪しさのかぎ
もろて く しあん とき うつ たび みこと たいど たまてるひこ やうす じつ あや

りである。しかし律法りつぽうきび厳りゆうぐうじやうしき龍宮城しゆしんの主神として天則てんそくを破りたまふごとき失態しつたいあるべき理由りいうな

しと、とつおいつ煩悶はんもんくなう苦惱してゐた。

しばらくあつて城内じやうないにはかに騒さわがしく、天稚彦あめのわかひこの御歸城ごきじやうなりとて、右往左往うわうさわうに神司かみがみは奔走ほんそうしはじめた。ここに花森彦はなもりひこは大八洲彦命おほやしまひこのみことの前に出で、夫君をつとぎみの御歸城ごきじやうなり、一時いちじもはやく稚櫻姫命わかざくらひめのみこと

みづから出迎でむかへたまふやう、御執成おとりなしあらむことをと、顔かほに笑ゑみを含ふくんで進言しんげんした。

花森彦はなもりひこはすでに善道ぜんだうに復歸たちかへり、律法りつぽうをよく守りつつあれば、唐子姫からこひめを奪うばはれしことは、少しも

念頭ねんとうにかけてゐなかつた。ここに稚櫻姫命わかざくらひめのみことは周章狼狼しうしやうらうばいのあまり、袴はかまを前後まへうしろにはき、上着うはぎの裏うらを

着きるなどして、あわてて出迎でむかへられた。しかして玉照彦たまてるひこは相變あひかはらず、御手おんてをひき命みことを勞いたはりつつ迎むかへた。

天稚彦あめのわかひこは、いきなり物ものをもちはず鐵拳てつけんを振りあげ、玉照彦たまてるひこを打ちすゑた。稚櫻姫命わかざくらひめのみことはおほいに驚おどろき、玉照彦たまてるひこを抱いだきあげむとしたまうた。

たまてるひこ いき
玉照彦は息もたえだえに、

『われは嚴重なる規律を破り、天則に違反し、ここに命のために打たれて滅びむとす。これ
くにはるたちのみこと ぎしんばつ ゆる
國治立命の御神罰なり。許したまへ』

まごころ おほかみ いの ささ
と眞心より大神に祈りを捧げ、たちまち城内の露と消えた。

しよしん くわうけい にしん あひだ
諸神司はこの光景をながめ、二神司の間をいかにして宥め奉らむやと苦心した。

くにはるたちのみこと しんし あら にしん まへ た
このとき國治立命は神姿を現はし、二神司の前に立ち、

ふうふ かいりつ やぶ ごくじうざいあくしん てんち きそく てら あめのわかひこ わかざくらひめのみこと
『夫婦の戒律を破りたる極重罪惡神なり。天地の規則に照し、天稚彦、稚櫻姫命は、すみやか
いうかい いうちやう しゆさいしや
に幽界にいたり、幽廳の主宰者たるべし』

げんめい ちじやう をさ うへてんじやう しんせい しゃうあく うんめい かみ わかざくらひめのみこと
と嚴命された。地上を治め、その上天にいたりて神政を掌握さるべき運命の神、稚櫻姫命は、
やがては天より高く咲く花の、色香褪せたる紫陽花や、變ればかはる身の宿世、いよいよここに、
にしん ぢごく かま こげおこ さんぜんねん しの くる う
二神司は地獄の釜の焦起し、三千年の、忍びがたき苦しみを受けたまうこととなつた。

(大正一〇・一一・八 舊一〇・九 外山豐二録)

第四章 天使の降臨〔九七〕

ここに常世姫は、龍宮城に敗れ、金毛八尾の惡狐と變じ、常世城に逃げかへり、魔神八頭八尾の大蛇とともに、天下を席捲せむとし、ロッキー山、ウラル山、バイカル湖および死海にむかつて傳令をくだした。死海の水はにはかに沸騰し、天に冲するまもなく、原野を濁水に變じて惡鬼となつた。つひにウラル山はにはかに鳴動をはじめ、八頭八尾の惡龍と化し、あまたの惡龍蛇を吐きだした。

バイカル湖の水はにはかに赤色をおび、血なまぐさき雨となつて、四方八方に降りそそいだ。つぎに揚子江の上流なる西藏、天竺の國境青雲山よりは、しきりに火焰を吐きだし、金毛九尾の

悪狐あくことなり、その口くちよりは數多あまたの悪狐あくこを吐はき、各自四方かくじしほうに散亂さんらんした。

天足彦あだるひこ、胞場姫えばひめの靈れいより出生しゅつしやうしたる金毛九尾白面きんまうきゅうびはくめんの悪狐あくこは、ただちに天竺てんじくにくだり、ついで

ウラル山麓さんろくの原野げんやに現あらはれた。ここに常磐城ときはじやうといふ魔軍まぐんの城しろがある。その王わうは八頭八尾やつがしらやつをの悪龍あくりゆうの

一派いつぱにしてコンロン王わうといふ。青雲山せいうんざんより現あらはれたる金毛九尾きんまうきうびの悪狐あくこは、コンロン王わうの前に現あらは

れ、たちまち婉麗ゑんれいならびなき女性によしやうと化くわし、コンロン王わうに愛あいされつひにその妃きさきとなり、名なをコン

ロン姫ひめとつけられた。

コンロン姫ひめはウラル山さんいつたい一帯しやうあくを掌握しやうあくせむとし、まづコンロン王わうを滅ほろぼさむとして佛頂山ぶつちやうざんの魔王まわう、

鬼龍王きりゆうわうに款くわんを通じてゐた。コンロン王わうの從臣じゆうしんコルシカはコンロン姫ひめの惡計あくけいを悟さとり、夜陰やいんに乗じやうじ

てこれを暗殺あんさつした。コンロン王わうは鬼龍王きりゆうわうの惡計あくけいを知しり、惡龍あくりゆうをして、近ちかづき攻撃こうげきせしめた。鬼龍王きりゆうわう

は、死力しりよくをつくして戦たたかふた。このとき常世國とこよのくにロッキー山さんより常世姫とこよひめの魔軍まぐんは黒雲こくうんとなり、風かぜに送おく

られて、佛頂山ぶつちやうざん近く進すすんだ。空中くうちゆうよりは黒き雲塊雨うんくわいあめのごとく地上ちじやうに落らく下かし、たちまち荒鷲あらわしと變へんじ、

猛虎となり、獅子と化し、狼となつて諸方に散亂し、ここに驚天動地の大混亂が始まつたので

ある。敵味方の區別なく、世界は大混亂状態に陥り、味方の同志討は諸方に勃發した。

海上には黒龍火焰を吐きつつ互ひに相争ひ、勝敗定まらず、暴風吹き荒み、血雨瀧のごとく降

り、洪水おこりて山をも没せむとするにいたつた。天空には幾千萬とも數かぎりなき怪鳥翼を

ならべて前後左右にかけめぐり、空中に衝突して、あるひは地上に、あるひは海上に落下し、火焰

は濛々としてたちあがり、高き山はほとんど焼けうせ、水上は地震のために巨浪山をなし、天地

もほとんど破壊せむばかりであつた。

このとき地の高天原に、國治立命現はれたまひ、大八洲彦命に命じて、天上の天則をもつて

地上に宣傳せむとしたまうた。八百萬の神司はこの旨を奉戴し、天の鳥船に乗り諸方に駆けめぐ

り、天則を芭蕉の葉に記し、世界各地に撒布せしめた。されど一柱とてこれを用ゐる者はなく、

かへつてこれを嘲笑するばかりである。大八洲彦命はやむをえず、一まづ地の高天原に歸還され

た。

このとき天上より嚙唳たる音楽聞こえ、數多の從神をともし、いういうとして地の高天原めがけて降りきたる莊嚴な女神があつた。女神は第一着に龍宮城に現はれ、城内にしばし光玉と化して休息し、ふたたび元の女神となり、從神とともに地の高天原なる、國治立命の宮殿に着かせたまひ、

『この度の地上の大混亂たちまち天上に影響し、天上の状態はあたかも亂麻のごとし。一時も早く大地を修理固成し、もつて天上の混亂を治められよ。吾は日の大神の神使、高照姫命なり』と傳へられた。

國治立命は神意を畏み、すみやかに地上の混亂を治め、天界を安全ならしめ、もつて天津大神の御目につけむと答へられた。高照姫命は大いに喜び、大神もさぞ御満足に思召すらむ。妾は急ぎ、貴神の答辭を復命したてまつらむ、と喜び勇んで天上に紫雲とともに歸りたまうた。

(大正一〇・一一・八 舊一〇・九 栗原七藏録)

第四章 律法の審議〔九八〕

くはるたちのみこと あまぢわけのみこと てんち りつぱう せいいてい だいいちちやくしゆ わかざくらひめのみこと りつぱう
國治立命が、天道別命とともに天地の律法を制定され、その第一着手に、稚櫻姫命は律法の
犠牲となり、幽界に降りたまうた。それより龍宮城も、地の高天原も、神司の謹慎により、律法
は嚴肅に守られてゐた。

いつふいつふ せいいてい はなもりひこ みのうへ ひと もんだい ことたまわけのみこと
さて一夫一婦の制定により、花森彦の身上について一つの問題がおこつた。ここに言靈別命は、
花森彦の孤獨を憐み、相當の妻を選定し、夫婦うちそろひ、神業に参加せしめむことを提議した。
かみくにわけのみこと か しよしんしょう きうしゆぼうぎ けつくわ ことたまわけのみこと ていぎ りいう はうむ
神國別命以下の諸神將は、鳩首謀議の結果、言靈別命の提議を理由なしとして、葬らむとした。

りいう
その理由は、

あめのわかひこ わかざくらひめのみこと だらく げんいん はなもりひこ かんじん しゆしん いうかい お
『天稚彦、稚櫻姫命を墮落せしめたる原因は、花森彦である。肝腎の主神は幽界に落ちたまひ

し後に、安閑として妻を娶り、雪隠にひそみて饅頭くらひしごとく素知らぬ顔色なしをるは、實に無責任にして且つ道義的罪惡である。平たくいへば花森彦は、二柱とともに罪に殉じ、幽界にいたつてこれに奉仕すべきが、神司たるものの當然の行動であらねばならぬ』

といふのであつた。城内の諸神將は満場一致、手を拍つて神國別命の意見に賛成した。

言靈別命は、

『今回の事件の原動力は決して花森彦にあらず。奸佞邪智にたけたる常世姫が原動力である。ゆゑに花森彦の妻を禁ずるに先だち、まづ常世姫を改心せしめ、幽界に赴かしめよ』

と言葉を強めて主張した。かくして互ひに議論は果てなかつた。つひには眞澄姫の裁斷を乞ふこととなつた。眞澄姫は、

『花森彦の妻帯は、斷じて許すべからず』

と裁決した。八百萬の神人はこの説に賛成をした。

ここに言靈別命は色をなし、
ことたまわけのみこと いろ

『天地の律法は既往に遡りてこれを罰すべきや』
てんち りつぱう きわう さかのぼ ばつ

と質問した。神司は、
しつもん かみがみ

『肉體上の既往はおろか、過去における靈魂の罪も今回の律法によりて罰すべきもの』
にくたいじやう きわう くわこ れいこん つみ こんくわい りつぱう ばつ

と主張したのである。言靈別命は、
しゆぢやう ことたまわけのみこと

『然らばまづ第一に吾を罪せよ。吾は言靈姫の夫となるまでに、數回妻を替へたり。過去の靈魂の罪は確知せずといへども、肉體上における律法違反は、確乎たる證據あり』
しか だいいち われ つみ われ ことたまひめ をつと すうくわいつま か くわこ れいこん つみ かくち にくたいじやう りつぱうあはん かくこ しやうこ

といひはなち、かついふ。

『諸神司にして果してこの律法に觸れざるもの幾柱かある』
しよしん はて りつぱう ふ いくはしら

と大聲叱呼された。いづれの神司も今まで自分の罪を棚にあげ、素知らぬ顔に隠してゐたのを素
たいせいしつこ かみがみ いま じぶん つみ たな そし かほ かく
つ破ぬかれ、猿猴の樹上よりたたき落されしとき心持ちとなり、いづれもアフィンとして沈黙に
ぱ ゑんこう じゆじやう おと こころも ちんもく

おちてしまった。いづれの神司もここにいたつて開いた口がすばまらず、誰もかれも雪隠で饅頭食ふた系統の神司ばかりであつた。

神司らは言靈別命の事理明白なる一言に膽をぬかれ、石龜が横槌の柄の上に甲をのせられ、首を延ばしてもがきつつ進退きはまりし體裁にて、手も足もつけやうがなかつた。

言靈別命は、

『諸神司の意見にして果して正當ならば、吾には大なる決心あり。吾まづ、天則違反の罪神として裁斷をうけ、幽界にくだらむ。諸神司はいづれも清廉潔白の神司にましますれば、決して幽界に降されたまふごとき案じは毛頭なかるべし。さらばこれより國治立命の御前に出で吾が罪を自白し、その處置を甘受せむ』

と立ちあがらむとするを、諸神司はあわててこれを引きとめ、

『短氣は損氣、しばらく待たれよ』

と大手をひろげて命の前に立ちふさがるのであつた。言靈別命はをかしさにたへず、思はず失笑せむとしたが、にはかに律法の精神を思ひだし、無理にこれをおさへた。

そのとき眞鐵彦走りいで、

『蓋をあくれば何れの神司も同様ならむ。同じ穴の狐、同僚の情誼をもつて、まづ思ひとどまりたまへ』

と諫止した。言靈別命は、

『天地の律法に依怙なし。吾は過去の罪によつて裁斷を受けむ。止めたまうな』

と袖振りきつて行かむとす。をりしも安世彦は口をひらいて、

『まづこの場はこれにて静まりたまへ。敵の末は根を絶つて葉を枯らす。まづ第一に常世姫を亡ぼし禍根を絶つに如かず』

とこともなげにいった。言靈別命は、

『亡ぼすとは殺すといふことならむ。殺すといふ行爲は天地の律法に違反せずや』

と一本參つた。安世彦は頭をかき、

『これは失言いたしました』

と引きさがる。この光景を見たるあまたの神司は、あたかも蜎のあくびしたやうな顔色にて、口を開きアフィンとしてゐたのである。

をりしも天上より一道の光明赫灼として、衆神司のまへに強く放射するよと見るまに、麗き威嚴そなはれる女神降りきたり、中央にしとやかに端座せられた。この神は國直姫命である。

國直姫命は神司にむかひ、ただいま國治立命天上にのぼり、律法の解釋につき、天津神とともに御詮議ありし結果、

『律法制定前の罪は今回かぎり問はざるべし。今後の世界における總ての罪惡は嚴重に處罰し、靈魂上の罪も償却するまでは永遠に罪さるるべし』

との御決定なりと、言葉おごそかに宣示せられた。そして國直姫命は、稚櫻姫命の天職をおそひ、龍宮城にとどまり地の高天原を治めたまふこととなつた。かくて花森彦は國榮姫一名花森姫との結婚を許さるることとなつた。

(大正一〇・一一・九 舊一〇・一〇 加藤明子録)

第四章 猫の眼の玉〔九九〕

常世姫の雄猛びにより、世界の各地はほとんど戦亂の巷と化し、天に妖雲みなぎり、地に濁流あふれ、猛獸惡蛇の咆吼する聲、吞噬の争ひはますます烈しくなつてきた。

盤古大神もその部下の八王大神も、さらに策の施すところがなかつた。大自在天はこの慘状を

坐視するに忍びず、いかにもしてこれを平定せむと苦心した。八王大神は妻常世姫の暴動を制する能はず、最初は一小部分の小火災くらゐにみなしてゐたが、火は意外に猛烈となり、全世界を焼盡せんず勢ひとなつた。八王大神は案に相違し、その處置に困りはてたのである。ここにいよいよ前非を悔い、善道をもつて世界を鎮定するよりほかに策なきを自覺した。

八王大神は常世城にあつて東北の天を仰ぎ見る折しも、一道の光明天に沖するを見た。熟視すればその光明の中より、平和の女神の姿幾柱となく現はれ、琴や笛などの音楽を奏し、日の丸の扇を手にもてる女神の舞ひ遊ぶ光景を眺めて、おほいに怪しみつつ盤古大神に奏上しおき、ただちに風雲に乘じ光明をたづねて進んだ。この光明は地の高天原より現はれてゐた。

八王大神はあまたの從臣とともに地の高天原に降りついた。そして自ら高尾別と名乗り龍宮城の門戸をたたき、主神に謁を請ふたのである。若豊彦は來意をたづね、喜んでこれを言靈別命に通じた。言靈別命はただちに面會を許した。高尾別は慇懃に禮をのべ、かつ世界の

へいわ きた しんさく かいじ
平和を來さむための神策を開示せられむことを乞ふのであつた。言靈別命は一見して、こは正し
かみ あら ただ さには しつ
き神に非ざるべしと直ちに審神の室へともなつた。たちまち正體露はれ大蛇の姿となり、

『われは實は八王大神なり』

じはく た いた
と自白するのやむなきに立ち至つた。されど言靈別命は、「いかなる惡神にもせよ悔い改めなば
ぜんしん てんち りつぱう てら てき あい おほかみ みこころ
善神なり。また天地の律法に照し敵を愛するは大神の御心なり」として、これを許し、厚く導き
さと
諭し、

『一時も早く天地の律法を守り、正道に立ちかへりなば天下は治平ならむ』

こんこん せつじ やつわうだいじん たかをわけ ほんしん かいしゆん じやう あら よろこ
と懇々として説示されたのである。八王大神の高尾別は本心より改悛の情を表はし、喜んで教へ
をこふこととなつた。この神司の教導には、神國別命これにあたることとなつた。高尾別に從ひ
きた かみがみ とも せいだう きじゆん くにはるたちのみこと しんりつ ほう しんげふ ほうし ちか
來れる神司も、共に正道に歸順し、いよいよ國治立命の神律を奉じ、神業に奉仕せむことを誓つ
た。神國別命はおほいに喜び、言靈別命を通じてこれを國治立命に進言したのである。大神は
まづ、

くになほひめのみこと　さいだん
『國直姫命の裁斷をえよ』

げんめい　たかをわけ　おそ　くになほひめのみこと　みまへ　い　しよしん　ちくいちそうじやう
と嚴命された。高尾別は恐るおそる國直姫命の御前に出で、所信を逐一奏上した。

くになほひめのみこと
國直姫命は、

わるがみ　かいしん　もと　ぜんしん　たかをわけ　りゆうぐうじやう　そうかつ　か　み　ちから
『いかに惡神なりとて改心せば元の善神なり。高尾別をして龍宮城を總轄せしめ、この神司の力
によりて、常世姫を心底より改心せしむるに如かず』

ことたまわけのみこと　じやうあ　しんむ　ほうし
とし、言靈別命の上位につかしめ、神務に奉仕させられたのである。

たかをわけ　い　きやうやう　かみくにわけのみこと　かみくにひこ　てるひこ　とこよじやう　きくわん　とこよひめ
ここに高尾別は意氣揚々として神國別命、神國彦、照彦とともに常世城に歸還し、まづ常世姫
を悔い改めしめむとし、天の磐船に乗りて常世の國へ歸つていった。歸りみれば常世の國は目も
あてられぬ常夜の暗であつて、萬の災ことごとく起り、山河草木色を失ひ、實に慘憺たる光景
であつた。

たかをわけ　かみくにわけのみこと　い　か　かみがみ　とこよじやう　きうそく　みづか　た　ばんこだいじん　やかた
高尾別は神國別命以下の神司を常世城に休息せしめ、自らは立つてただちに盤古大神の館に

参向し、天下治平の神策は國治立命の律法によるの外なきを奏言した。盤古大神は何の答へもなく、ただ微笑をうかべて高尾別の進言を聞くのみであつた。高尾別は盤古大神が何の答辭も與へざるをもどかしがり、天下擾亂の場合かかる主將を戴き、事をなさむとするは吾のあやまちなり。むしろ國治立命を奉じて事をなさむと心を決し、大自在天の從神松山別、小鹿彦に決心をのべ、盤古大神は平和の世の主將にして、天下の混亂を案配するの器に非ずと説きつけた。

松山別、小鹿彦は大いに怒り、

『汝は今まで盤古大神を奉戴して諸神司を率ゐ、天下の經綸にたいして赤心をこめゐたりしに、國治立命の神示を聞き、たちまち猫眼のごとく心を變ずるはその意をえず。善惡正邪にかかはらず何ゆる初志を貫徹せざるや。思ふに國治立命は邪神ならめ。すみやかに汝は神國別命以下の神司を捕虜にし、これを質となして盤古大神に歸順すべく嚴しき交渉を開始せよ』
と大自在天を笠に、虎の威をかる狐の嚴命であつた。

折しも常世姫その場に現はれ、口をきはめて高尾別の不明をなじり、かつ松山別の應援を求めた。松山別は常世姫の言を一も二もなく採納した。ここに高尾別の八王大神は進退これきはまり、折角の決心を翻し、ふたたび盤古大神を奉戴して、國治立命に反抗の態度をとることとなつた。
(大正一〇・一一・九 舊一〇・一〇 櫻井重雄録)

第五〇章 鋼鐵の銚〔二〇〇〕

神國別命、神國彦以下の神司は、八王大神の變心せしことは夢にも知らず、數多の神司に圍繞されながら、諄々として國治立命の敎示を説き示しつつあつた。

折しもにはかに城内は騒々しく數多の足音は近く迫つてきた。室内の戸を開くやいなや、

やつわうだいじん いぜん 八王大神は以前にかはる暴悪なる顔色をなし、大刀の柄に手をかけ、神國別命の前に詰めより、

なんぢ 『汝はすみやかに盤古大神に歸順せよ。混亂紛糾をきはめたる現下の世界の情勢は、汝らの主神

くにはるたちのみこと とな 國治立命の唱ふるごとき、迂遠きはまる教をもつて、いかでか天下を至治太平ならしむること

え なんぢ とな を得む。汝らの唱ふる經綸策は、天下泰平に治まれる世にたいしての遊戲的神策にして、言ふべ

おこな くして行ふべからざる迂愚の策なり。汝すみやかにその非を悟り常世城の從臣となるか、ただ

かぶと しは兜をぬいで降伏するか、二つとも否認するにおいては、氣の毒ながら汝らを門出の血祭り、

いつたうりやうだん しよち と 一刀兩斷の處置を執らむ』

う と 打つて變つた狂態を演ずるのである。

かみくにわけのみこと 神國別命は、じゅんじゅんとしてその非を説き、天下は壓力武力をもつて到底治むべからざ

しんり るの神理を、言葉をつくして辨明した。されど貪、瞋、癡の三毒をふくめる惡神の主將八王大神

ばじとうふう には、あたかも馬耳東風のごとく、もはや毫末の効果もなかつた。

八王大神は立ちあがり、

『いらざる繰言耳を汚すも面倒なり』

と眞向上段に斬つてかかつた。神國別命以下は身に寸鐵を帶びず、ただ一心に神明を祈るよりほかに道はなかつた。神國別命は天に向つて合掌し、神言を奏上せむとするや、八王大神は一刀を頭上高く振りかざしたるままどつと仰向に倒れた。この光景を目撃したる常世城の神司は、右往左往に周章ふためき、急ぎ常世姫にこの實状を報告した。常世姫は直ちに鐵棒の火に焼けて白熱化したるを提げ來り、あはや神國別命は、燒鐵に打たれてすでに燒き滅ぼされむとするをりしも、東北の空より俄然暴風吹ききたり、常世姫は暴風にあふられて、たちまち地上に轉倒した。城内の神司もまた一度にどつと吹き倒された。神國別命は神國彦以下の神司とともに、からうじてその場を逃れ、やうやくにして龍宮城に歸還し、高尾別の變心し、かつ何時魔軍を引率してここに攻め來るやもはかられざることを、國直姫命に奏上した。

ここに地の高天原においては、國直姫命、大八洲彦命、言靈別命以下の神將龍宮城に會し、

八王大神の反逆にたいし防戰の議をこらした。このとき國直姫命は、

『いかなる暴惡無道の強敵たりとも、神明の力を信じ、天地の律法を遵守し、惡にたいするに至善をもつてせよ』

との命令を發せられた。神司は神國別命の詳細なる報告に接し、切齒扼腕悲憤の涙を、顯邊にただよはしながら、天地の律法に違反すべからず、あくまで柔和と懇切と信義をもつてこれに對抗せむと、協議一決した。

時しも百雷の一時に轟くごとき音響とともに黒雲に乘じ、西南の天をかすめて入來る數多の鳥船がある。彼らは黄金橋のかたはらに落下し、獅子奮迅の勢をもつてヨルダン河を押しわたり、龍宮城に押しよせ門扉を打破り、暴虎馮河の勢をもつて城内に侵入し、國治立命に面會せむと、大音聲に呼ばはつた。

鬼雲彦、清熊を先頭に八王大神その他の魔神が、雲霞のごとく押し寄せているため、城内にはかに騒ぎたつた。大八洲彦命は周章ふためく神司を制しとどめ、みづから出でて八王大神に面會し、來意を嚴かに訊問した。

八王大神は傍若無神の態度にて、諸神將を眼下に睨めつけ、

『汝らのごとき【やくざ】神にいふべき言葉なし。すみやかに國治立命に見參せむ』

と仁王立になつて怒號した。國治立命はこの聲を聞くより、たちまち悠然としてその場に出現したまうた。八王大神は聲をふるはしながら、

『われは盤古大神自在天の天命を傳へむために出場せり。汝はみづから國治立命と稱すれども、まつたくの偽神なり。國治立命とは國土を永遠に立て守るべき神明なり。かかる天下混亂の際、下らぬ迂遠なる教をもつて、難きを避け安きにつかむとするは心得がたし。汝が唱ふる天地の律法とはそもそも何ぞ。陳腐固陋の世迷言にして唾棄すべき教理なり。すみやかにこの

りつばう はくわい なんぢ
律法を破壊し、汝はこれより根の國底の國に、一時も早く退却せよ。眞の國治立命は、大自在天
けんあ しんさく
の權威ある神策によつて、初めて顯現せむ。返答いかに』

と詰めよつた。

やつわうだいじん じゅうしん おにくもひこ しりうま の
八王大神の從臣、鬼雲彦は尻馬に乗り、

『汝國治立命と稱する偽神よ。八王大神の敎示を遵奉せずして、萬一違背に及ばば、われは

りゅうぐうじやう しよりゅうじん すんだん ち たかあまはら かみがみ ひとはしら のこ かたな さび
龍宮城の諸龍神を寸斷し、地の高天原の神司を、一柱も残らず、刀の錆となし、屍の山を築き、

りゅうぐうかい ち うみ くわ
龍宮海を血の海と化せしめむ。返答いかに』

と詰めよつた。國治立命以下の諸神司は、天地の律法をみづから破るに忍びず、いかなる惡言暴語

いか ひろ ばんぶつ あい
にも怒りをしづめ、博く萬物を愛するの律法を遵守し、柔和の態度をもつてこれに向はせ給ふた。

やつわうだいじん なん ようしや
されど八王大神は何の容赦もなく、つひに一刀を抜きはなち、今や狼藉におよばむとするとき、

しゅうしん なか とつぜんあら はなもりひこ
衆神の中より突然現はれたる花森彦は、

『われはただ今戒律を破らむ』
いまかいりつ やぶ

と言ひもはてず、一刀を抜きはなち鬼雲彦の背部に斬りつけた。なほも進んで八王大神に斬つてかかるを、大足彦は、「しばらく待て」とこれを制止した。
おほだるひこ いつたう ぬ おにくもひこ はいぶ き せいし

大足彦の一言に花森彦も刀ををさめ、元の座に復し、唇をふるはせ、心臓をはげしく鼓動させ、顔色蒼白となつてひかへてゐた。八王大神はこの勢にのまれて、やや躊躇の色が見えた。鬼雲彦は背部の負傷にその場に打倒れ、哀みを乞ふた。
おほだるひこ いちこん はなもりひこ かたな もと ざ ふく くちびる しんざう ことどう おにくもひこ はいぶ ふしやう ば うちたふ あはれ こ

ここに大足彦は、國の眞澄の鏡を取出し、八王大神以下の魔軍を射照した。たちまち正體をあらはし、惡龍、惡鬼、惡狐の姿と變じ、自在の通力をうしなひ、身動きも自由ならず一齊に救ひを乞ふた。
おほだるひこ くに ますみ かがみ とりいだ やつわうだいじん い か まぐん いてら しやうたい あくりゆう あくき あくこ すがた へん じざい つうりき みうご じいう いっせい すく

この時ふたび國治立命あらはれ給ひ、
とき ぐにはるたちのみこと たま

『地の高天原は天地の律法を遵守する、正しき神の神集ひに集ふ聖地である。また廣く萬物を愛
ち たかあまはら てんち りつぽう じゆんしゆ ただ かみ かむつど つど せいち ひろ ばんぶつ あい

し、禽獸蟲魚にいたるまで殺さざるをもつて主旨とす。ゆゑに今回にかぎり汝らの罪を赦し、

生命を救ひ、常世城に歸城せしむべし。汝らは一時も早く歸城し、常世姫をはじめ他の神司にわ

が旨を傳へよ。暴に報いるに暴をもつてせば、何時の日か世界は治平ならむ。憎み憎まれ、恨み

恨まれ、殺し殺され、誹り誹られ、世は永遠に暗黒の域を脱せざるべし。常世姫にして、わが教

を拒まば是非なし。常世城をすみやかに明け渡し、根の國、底の國に、汝ら先づ退却せよ。し

からざればやむを得ず、律法を破り、決死の神司をして、常世姫を屠らしめむ』

との嚴格なる神示であつた。

ここに八王大神は、その意を諒し、厚く感謝して部下一同とともに、神國彦に送られ常世城に

立歸り、國治立命の神示を常世姫に傳へた。常世姫は聞くより打笑ひ、鼻先に扱ひつつあくま

で國治立命に對抗し、大八洲彦命以下の神司を滅ぼし、ふたたび龍宮城を占領せむと力みかへ

り、かつ八王大神の不甲斐なきを慨歎した。

八王大神は常世姫の大膽なる魔言に動かされ、ふたたび反抗の旗を挙げむとし、魔神を集めて
決議をこらす折しも、天上より鋼鐵の鉾、棟をついて降り、八王大神の側に侍する鬼雲彦の頭上
に落ち、即死をとげたのである。これは自在天より神國彦に向かつて投げたのが、あやまつて
鬼雲彦に中つたのである。

八王大神は驚いて奥殿に逃げ入り、息をこらして鼠のごとく、一隅に身慄ひしつ蹲踞んで
ゐた。

このとき、一天にはかに晴れ、天津日の光り輝き渡るよと見えしとたん、身は高熊山の巖窟に
静坐してゐたのである。このとき巖上に坐せるわが足は、にはかに苦痛をうつたへ、寒氣は身を
切るばかりであつた。

(大正一〇・一一・九 舊一〇・一〇 外山豊二録)

附録 第一回高熊山參拜紀行歌

王仁

高熊山參拜者名簿

(大正十年十二月三日)

千引の岩【石】打【破】る 日本男子の大丈夫と (石破馨)

色香も【馨】る女丈夫が 世界をま【森國】々の (森國幹造)

助けの【幹】を【造】らむと 東や【西】や北南

日【出】る國のまめ人が 【善】男善女を誘ひて (西出善龍)

【龍】宮城に參集ひ 浦【保】國を永遠の

珍の【住】處と歡びて　神の【啓】示を【次】々に　（保住啓次郎）

宣べ傳へ行く言靈は　圓滿晴【朗】澄の江の

天龍【藤】に登る如　我日の【本】の權威なる　（藤本十三郎）

一と二三四五つと六ゆ　七八九つ【十】り【三】年

【今】より【きよ】く田なびかむ　【村】雲四方にかき別けて　（今きよ）

六合【兼太】る我國【土】　眞奈【井】の海の洋々と　（田村兼太郎）

渡も靜かに浦【靖】の　國の榮えも九重の　（土井靖都）

玉の【都】や【小】都會　深【山】の奥も押竝べて　（小山貞之）

忠勇仁義孝【貞之】　道明らけく治まれる

三十一年如月の　梅ヶ香匂ふ九日の

月をば西に【高】熊の　神山に深くわけ【井】りて　（高井壽三郎）

聖【壽】萬歳祈らんと　【三】ツ葉つつじの其上に

【村】肝【清】く端坐しつ　言靈【彦】の神教を　（上村清彦）

耳を澄ませて【マツ】の下　吹き来る風もいとひなく　（同マツ）

岩窟の前に【寛】ぎつ　心の【中】の【村】雲も　（同寛）

かすみと共に消え行きて　稍清【新】の魂となり　（中村新吉）

神の恵みに浴しける　今日は如何なる【吉】日ぞ

【吉】や屍を【原】野に曝すとも　國【常】立の大神や　（吉原常三郎）

【三】ツの御魂の教なら　などや厭はむ【鈴木】野や　（鈴木延吉）

深山に足を【延】ばすとも　心持【吉】き岩清【水】　（水戸富治）

【戸】閉さぬ國と賑はしく　【富】みて治まる君ヶ御代

五十鈴の流れ清くして　【大川口】や小川口　（大川口トク）

水は溢れて【トク】川の　泥にまみれし幕政も

茲に亡びて大小名　名主【庄司】に至るまで　（庄司キツ）

な【キツ】倒れつ四方に散る　その状實に憐れなり

かかる例しも【在原】の　【丑】寅金神【太】元に　（在原丑太郎）

現はれまして【前】の世の　神と【田美】との有様を　（前田美千香）

説き教へたる三【千】年の　一度に【香】ふ白梅の

花咲く春の【山】の【根】に　【菊太】に目出度神言を　（山根菊太郎）

天地の神に奉上し　三千世界の改造を

【チカへ】玉ひし雄々しさよ　四尾と本宮の【山】の【根】に　（山根チカへ）

經と緯との神の機　錦の絲の【絹枝】姫　（同絹枝子）

神の助けの【有】が【田】や　鶴【九臯】に【高】く鳴き　（有田九臯）

【岸】に登りし緑毛の　龜のよはひの長の【とし】　（高岸としゑ）

【ゑ】びす大黒福の神　眞奈【井】の【上】に舞ひ遊ぶ　（井上あや）

【あや】に尊き神の苑　海の内外別ちなく

【山】野河海の神々の 【介】けの道も【昭】々と (外山介昭)

【植】ゑ擴め行く道【芝】の 【盛】りの花も【隆】々と (植芝盛隆)

薫る常磐の神の【森】 【良】きも悪しきも【仁】愛の (森良仁)

神の恵みは變りなく 【竹】の御園の【下斯藝琉】

御國の譽れ照妙の 綾の高天に北【東】の (東尾吉雄)

神【尾】伊都【吉】て【雄】々しくも 教は【廣瀬】の仁【義邦】 (廣瀬義邦)

昇る旭は【高橋】の その勢ひも【常】永に (高橋常祥)

開き行く世ぞ【祥】たけれ 譽れもたかき瑞祥の

やかたに基いを固めつつ 遠【津】御國も近【村】も (津村藤太郎)

すさぶ曲津を【藤太郎】 秋津【島】根の【田】廣路に (島田穎)

千【穎】八百穎實のりゆく 稻【木】の【村】の中心に (木村研一郎)

靈魂【研】きを第一と 教へ導く白【藤】の (藤井健弘)

【井】や榮え行く【健】げさよ　誠の教を遠近に

【弘】むる時や【北】の空　【村】雲四方に搔き別けて　（北村隆光）

【隆】々のぼる日の【光】　本【宮】山や玉の【井】の　（宮井懿子）

空に映え行く御【懿】徳に　浴する魂ぞ【浦山】し　（浦山專一）

靈魂修行を【專一】と　深山の奥に分け入りて

【佐】とり了ふせし高熊の　【イワ】屋の内も賑はしく　（山佐イワ）

朝【日】夕日を【笠】として　祝詞奏上や神の詩を　（日笠吟三）

【吟】じて進む【三】ツ御魂　【藤】の仙人芙蓉坊が

穴太の【村】に【伊】智はやく　現はれ來たりて大神【之】　（藤村伊之吉）

【吉】き音信を宣り傳へ　【石】より固き信仰を　（石井孝三郎）

【井】や益々も勵みつ　忠【孝】敬神愛國の

【三】ツの綱領怠らず　加たく御魂に【納】めつつ　（加納録平）

心に【録】して【平】けく　たとへ野【山】の奥の奥　（山口佐太郎）

率土の濱も宣べ傳へ　【口佐】賀あしき惡【太郎】が

そしり嘲り【山】ぬ【内】　布教傳道厭【トイ】なく　（山内トイ）

四方の國【中】大日本　日高の【村】の佐男【鹿】の　（中村鹿三）

妻呼ぶ如き有様に　世人を思ふ【三】千年の

神の光りは【西】東　【村】雲四方にかき【理^わ】けて　（西村理）

大【海原】も【平】けく　波も鎮まる【八】洲國　（海原平八）

神須【佐】之男の神魂　【澤田】の姫が現はれて　（佐澤廣臣）

教を【廣】く君【臣】の　【中】を執持つ一【條】の　（中條勝治郎）

至誠に【勝】るものはなし　明【治】の廿五年より

【佐藤】りの開く大【善】の　良神の【四郎】し召す　（佐藤善四郎）

梅花の開く神の世は　老も若きもおしなべて

五六七の御世の活動を　　汗と油をしぼりつつ

山田の果ても【伊藤】ひなく　くさきり【耕】やせ【三】伏の　（伊藤耕三郎）

暑さも涼し【高野】原　　【圓】く治まる【太】平の　　（高野圓太）

風に【黒】雲吹き拂ひ　　四方の【澤】ぎも静まりて　　（黒澤春松）

さながら【春】の如くなり　　常磐の【松】や白梅の

枝にて造りし神の杖　　【菅野】小笠に身を包み　　（菅野義衛）

仁【義】の教【衛】らむと　　【京】都をさして【谷】波より　　（京谷朝太郎）

出口の教祖は【朝】まだき　　綾の【太】元立出でて

海潮純子諸共に　　昨日や【京屋】明日の旅　　（京屋フク）

風【フク】山路をすくすくと　　字【司朗】も見ずに足早に　　（同司朗）

【飛田】つ如く進まるる　　【豊】かなそのの梅【香】り　　（飛田豊子）

五六七の御代に【逢坂】の　　【キミ】の恵みに報いむと　　（同香）

鞍馬をさして出でて行く 出口の守の雄々しさは (逢坂キミ)

日本魂の鏡なり 月に【村】雲花に風 (村松タミ)

浮世の常と聞きつれど 【松】の神世の【タミ】草の

心はいつも春の空 深【山】の奥も仁愛の (山崎珉平)

花【崎】にほひ【王民】^{きみ}の なか【平】けく安らけく

【上野】おこなひ下ならひ 國は【豊】かに足御代は (上野豊)

業務を【伊藤】ものも無く 【正】しき【男】の子女子が (伊藤正男)

【大】内【山】の御榮えを 【春】かに祝ひよろこびつ (大山春子)

君に捧ぐる真心の 強きは【波田野】國人の (波田野菊次郎)

【菊】もまれなる【次】第なり 澆季末法の世の【瀬戸】に (瀬戸幸次郎)

現はれ玉ひし良の 神の御【幸】は【次】々に

いやちこまして國民は 【同】じ心の【きみ】が御【よ】 (同きみよ)

四方の【山】々【内】外の 風も【靜】かに【笹川】の (山内靜)

水にも神光【熙】り渡る 【雄】々しき清き葦原の (笹川熙雄)

神の御國ぞたふとけれ 日本御魂の大丈夫が

勇氣も【古井】現し世の 濁りを【清】め【市】村【野】 (古井清市)

戸【口】も【佐】和に佐和佐和に 五六【七】の御世を【松】の色 (野口佐七)

【本】つ御魂も幸ひて 長閑な【春】の【政】事 (松本春政)

【國】常立の【分】御魂 仁【義】の道を【一】と筋に (國分義一)

守るや洋の【西】東 【山】の尾の上に入出る月 (西山勝)

光り【勝】れし大御代に 立て直さむと昔より

【水野】御魂の大御神 【貞】めなき世を【一】^{いく}らんと (水野貞一)

道も【飯田】の神の詔 【千代】の【松】ヶ枝澄み渡り (飯田千代松)

昇る月影【高橋】の 夜の【守】りとありがたき (高橋守)

御代に【太田】の樂もしや 神の御國に【傳】はりし (太田傳九郎)

【九】つ花の咲き匂ふ 深山の【奥】の寒【村】も (奥村芳夫)

大和心の【芳】ばしき 大丈【夫】須佐の大神を

【齋】ひ【藤】とみ惟神 御靈【幸】ひて【吉】祥の (齋藤幸吉)

聖の御代ぞたふとけれ

道の蘊【奥】を塞ぎ居る 【村】雲四方にかきわけて (奥村友夫)

心も清き【友】の夫が 至誠を内外に【長谷川】の (長谷川清一)

【清】きながれも【一】と筋に 久【米】ども盡きぬ【川】水に (米川太介)

濁世を洗ひ【太介】んと 【田】庭綾【邊】の【政雄】等が (田邊政雄)

神の御聲をいや高き 【雲井】に告げよほととぎす (雲井恆右衛門)

【恆】の誠のおこなひは この【右衛門】なき神の笑み

その身の【佐賀】も【康正】の 實にも【鈴】し【木】忠と【孝】 (佐賀康正)

慈悲を【三】つ楯【戸】して 【田】助【澄】まして【國】の祖 (鈴木孝三郎)

【古】き昔の神代より 【高】き神徳【次】ぎつぎに (戸田澄國)

かくれて御世を守りつつ 忍び玉ひし大神を (古高德次郎)

【齋】きまつるぞ【藤】とけれ 【吉】きもあしきも【三】吉野の (齋藤吉三)

花と散りしく【大】八【島】 【長】き平【和】の夢さめて (大島長和)

【西洋】^{から}の國【原】見渡せば 神を【敬】ふ人もなし (西原敬昌)

物質文明【昌】ふとも 心の花は散りにけり

【谷】波の國にあらはれし 出【口】の神の御教は (谷口清満)

【清】く天地に【滿】ちぬらむ 檜【杉原】かきわけて (杉原佐久)

梅【佐久】そのを【杉】の【山】 見【當】てに進む日本【一】 (杉山當一)

長閑けき風も【福】の【井】の 大【精】神は【平】らかに (福井精平)

神の【林】に著【二郎】く 鳴り渡るなり高倉の (林二郎)

高き巖に【八重】むぐら 青き苔蒸し小田【牧野】 (林八重子)

蔓さえ光る萬世の 【龜】の歡【吉】て岩の【上】 (牧野龜吉)

鶴さへ巢ぐふ高【倉】の 【三】ツ葉つつじ【之】御【助】に (上倉三之助)

【小野】が御【田】閒を研きつつ 生れ赤子と【若】がへり (小野田若次郎)

【次】第々にたましひを 【石】とかためて世を【渡】り (石渡たみ)

四方の【たみ】草【同一】に 神の眞道に【進】ましめ (同進)

御代の榮えを内外に 照らすは神の大本ぞ

【谷】波の國は狭くとも 【廣】く【賢】こき神の道 (谷廣賢)

雲【井】の上も海原も 神【武】と【仁】徳かがやきて (井上武仁)

神の守りの金【城】は 【所】在神の【守】りにて (城所守息)

神々安【息】遂げたまふ その聖世【美馬】ほしと (美馬邦二)

心の清き神人が 御【邦二】つくす眞心は

大【小】高下の差こそあれ 【林】の【ナカ】の下木まで (小林ナカ)

よろこび祝ふ【細】し矛 千【田】琉の國の神の【徳】 (細田徳治)

圓く平穩おだひに【治】まりて 身【梶】の【元】も【二三太郎】 (梶元二三太郎)

廣き新道進むより 神の大道踏める身は

【笹原義登】と悉【後藤】く いと【康】らか【仁】進み行く (笹原義登)

無事平【安】の神の道 【達】るは神の温たかき (後藤康仁)

あまき乳【房】にすぎる兒の 太郎【次郎】の生命の (安達房次郎)

親の光りと【松】の御代 上【田】の家に生れたる (松田文一郎)

三【文】奴の只【一】人 神の御【前】にぬかづきて (前田茂壽)

世人を【田】すけ守らんと 晝はひねもす夜【茂壽】がら

愛宕の山の【片】ほとり つづきが【岡】のふもとなる (片岡幸次郎)

小幡神社の【幸】ひに　祈願の效もいち【次郎】く

【大河口】や小川口　教を日々に【トク】人の　（大河口トク）

心の丈けは【庄司】きに　【シウ】ジウの苦辛を耐へつつ　（庄司シウ）

【安】く【達】せん大神の　心は清き白【ユキ】の　（安達ユキ）

黄金の世界銀世界　眞鯉の【上】る【瀧】津瀬の　（上瀧美祐）

さま【美】はしき神【祐】に　心の垢を洗ひつつ

【西】山林【谷】の道　【作】り【治】めて登り行く　（西谷作治）

四十八個の寶座ある　高倉【山】に【崎】にほふ　（山崎耕作）

三ツ葉つつじの花の下　【耕】し【作】る田男の

【中】にも【邨】で【新】しき　由緒を知れる由松の　（中邨新助）

道の手引に【助】けられ　萬壽神苑立出でて

詣づる信者二百人　出口の海潮を先導に

田舎の【村】の小幡【橋】 【金】神龍神【一】同に （村橋金一郎）

渡り【田所】は宮垣内 【鹿藏】住むなる松林 （田所鹿藏）

紅葉は散れど青々と 茂る木の葉のうるはしき

【豊】かな冬の木の【本】に 四方の【景】色を覺めつつも （豊本景介）

婦人子供に至るまで 【介】々しくも【谷】川を （谷前貞義）

飛び越え【前】^{すす}み【貞】勇き【義】^{よし} 【近藤】初めて修業場と （近藤貞二）

神の【貞】めに一同は 第【二】靈地と感謝しつ

祝詞の聲も晴やかに 木魂に響く床しさよ

【勝又】五【六】^{みろく}七の神政に 【水野】御魂があらはれて （勝又六郎）

【久米】ども盡きぬ眞清水の かはく事なき【吉】祥の （水野久米吉）

命の親の神心 仰ぐも【高】し【田】加倉の （高田權四郎）

神の【權】威は【四】ツの海 珍の國【土】も【井】や廣に （土井理平）

攝【理】は届く公【平】の　　うましき御世は【北村】の

人は勇みて神壽ぎの　　祭祀の道も【庄太郎】　　（北村庄太郎）

日本の國は【松】の國　　【浦】安【國】と日【五郎】より　　（松浦國五郎）

御【三木】みそぎ清めし神の國　　【善】一と筋の世の元の　　（三木善建）そうぎ

神の【建】てたる御國なり　　外國人に惑はされ

御國の精華も【白石】の　　五【倫】五常の道忘れ　　（白石倫城）

難攻不落の堅【城】と　　神の造りし無【比】の園　　（比村中）

心にかかる【村】雲を　　拂ふて清め腹の【中】

神の授けし御魂をば　　汚さむ事を【駕海】おしみつつ　　（駕海政彦）

國家の【政】り家政り　　【彦】と夜毎にいそしみて

たとへ惡魔の襲ふとも　　少しも【鎌】はず【田】力男　　（鎌田微）

日本心を【微】かに　　照して見せよ三日月の

敏【鎌】の光り鋤の跡　　稻【田】も【茂】る八百【穎野】
（鎌田茂穎）

【閒田】なき秋に【アイ】の空　　瑞穂の國の【中】國の
（野閒田アイ子）

譽れを【西洋】^{から}まで【ノブエ】姫　　姫氏の國の豐の年
（中西ノブエ）

稔も【吉田】の花ぞ【サク】　　【清】き【水】穂に【フク】風の
（吉田サク子）

薰りは外に【比】類なき　　富貴の草香【村】肝の
（清水フク子）

心の【美佐尾】芳ばしく　　續【鎌】ほしや曇りたる
（比村美佐尾）

世を【田貞】か【江】て神の世に　　なれば曲事かくろひて
（鎌田貞江）

【吉】きこと斗り【村幸】^{さき}の　　雲閒を照らす神の【トク】
（吉村トク）

ま【コト】を【那須】の神人は　　神にすがり【ツヤ】はらぎつ
（同コト子）

吾身のことを打捨てて　　【多田】道のため【クニ】のため
（那須ツヤ子）

つくしの果の人々も　　海【河】こえて【田】庭路の
（多田クニ）

神の御【親】の膝元に　　【直】子の刀自の跡慕ひ
（河田親直）

【滋】しげ通ふ樂もしさ　小【柴田】閒萩【米】躑躅　（同滋子）

茂れる山路ふみ別けて　【同】じ心の【一】隊は　（柴田米子）

神の恵【與】と勇みつつ　清水湧き出る宮垣【内】　（同一與）

上【田】の家も【市】々に　立出で【田渡】る野山路　（内田市子）

心せき【セキヨ】ち登る　新池【馬場】を一【齊】に　（田渡セキヨ）

進めば砂止山の神　祠の跡を右に見て　（馬場齊）

【谷】の【村】杉潜りぬけ　【眞】の道の【友】垣は　（谷村眞友）

山【奥】見かけ【村】々と　【貞】めの場所【雄】さして行く　（奥村貞雄）

黄昏近く【湯】ふ【浅】の　空に出口の王【仁】が　（湯浅仁齋）

岩屋の神を【齋】ひつつ　降【雨】も知らぬ【森】の中　（雨森松吉）

【松】葉の露の一雫　味はひ【吉】しと喜びて

呑みし昔の思ひ出に 水の冥【加】を【藤】^{とう}とみつ （加藤明子）

天地神【明】の洪徳を 感謝しまつる此一行

折も【吉野】の【とき】つ風 吹かれて顔の【湯】煙りも （吉野とき子）

御空になびく【淺】曇り 靈魂を【研】く三柱の （湯淺研三）

神の寶座の大前に 【東尾】さして神【吉】詞 （東尾吉三郎）

拍手【三】拜【上】々の 【坂】えの聲を【きく】の年 （上坂きく）

【山】の尾の上を【崎】わけて 昇る旭日の【あけ】の空 （山崎あけ子）

【小】男鹿妻戀ふ【高】熊の 見るも勇まし【一】つ岩 （小高一榮）

【榮】え久しき神國の 【牧】の柱とまめ人の （牧愼平）

【愼】み仕え大前に 低頭【平】身祈りつつ

松のお【千葉】もいと【清】く 月も見【五郎】の十五日 （千葉清五郎）

【大山】小山の中道を おのが【壽美】家へ【雄】々しくも （大山壽美雄）

松【岡】神使に誘はれて 【本】の古巢へ歸りける (岡本尚市)

【尚】き教へを【市】早く 上【田】の爐【邊】に宣ぶる時 (田邊林三郎)

小松【林】の神憑り 【三】ツの御魂が現はれて

【近藤】二度目の立替は 御國を思【兼】の神 (近藤兼堂)

現はれまして【堂】々と 小【畠】の宮の【山】の跡 (畠山彦久)

本宮神宮の聖邑に 國武【彦】の大神は

世も【久】方の天津神 月見の神や天照す (佐藤かめ)

皇大神の神言もて 世人を【佐藤】し身をた【かめ】 (平野千代子)

天下太【平野千代】の基 【佐藤】りて三【よし】の花の春 (佐藤よし)

お【土】の【井とく】水の恩 【正】しき御【木】の宮柱 (土井とく)

千本高知りて【きん】ぎんや 珠玉を飾る三體の (正木きん)

神の御舍殿莊嚴に　大宮【小宮】建て並べ　（小宮きゑ）

深【きゑ】にしを説き諭す　高天【原】の神の道　（原竹藏）

松のみさをは神の國　【竹藏】即ち外國に

たとへて【東尾】日の本と　【さき】はひ玉ふぞ尊とけれ　（東尾さき）

【板】り盡せしあがなひの　千【倉】の置戸を負ふ神の　（板倉寛太郎）

【寛】仁【太】度の胸の内　【同】じ教も【寛】々と　（同寛文）

【文】化の魁け梅の花　御空は清く山【青】く　（青野都秀）

【野】村も【都】會も【秀】れたる　神の大道に従ひて

日【東】帝國【安】らけく　日【五郎】の信仰現はれて　（東安五郎）

【安】全無事の世の中に　到【達】せしめ聖【哲】の　（安達哲也）

教は四方に響く【也】　【同】じ天地に生ひ立ちし　（同佐右衛門）

草木で【佐右衛門】色艶を　増して歡こぶ君が御代

世は【古川】の水絶えず 萬壽の苑は【龜】岡の (古川龜市)

【市】中に高く聳えつつ 曇れる社會を照らし行く

神の仕組の萬壽苑 瑞祥閣の芽出度けれ。

○

教の花の【櫻井愛子】 【中野祝子】の太祝詞 (櫻井愛子)

【同】じく【作郎】青年も 巖の【上田】に参み詣で (中野祝子)

各自氣分も【由松】の 【前】^{さきがけ}驅し【田】るは十四夜の (同作郎)

【稻】田を照らす月の影 風も清けき秋の末 (上田由松)

此一行廿二人 卷尾に記して證となす。 (前田満稻)

(以上)

（
（
（
（
（
（
（
（
（
（

靈界物語 第二卷 靈主體從 丑の卷

終り